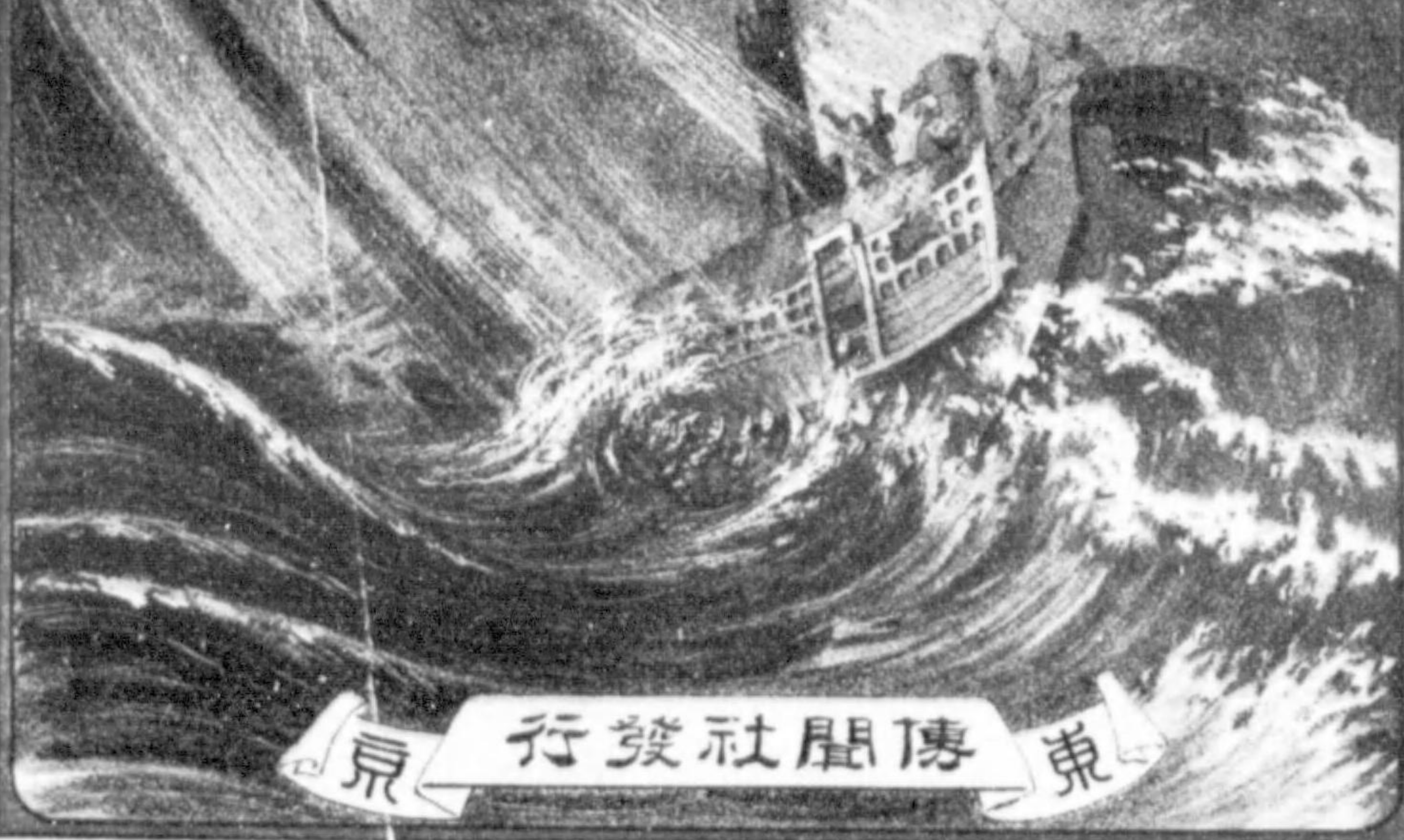


324

著原氏コヒフセヨジ

徳流
開國
興滿



東京 傳聞社發行

289.1
A461R
H

289.1
A461R
H II



81W35877

俗探



奇非

通雅題



如 百
一 安
鬼 永

贈

中川福三郎

香深為人所



題詞

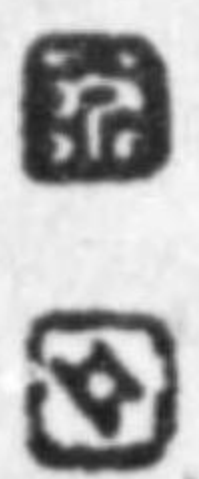


欲採席定較君秋結髮甘為化亦人
通諳通情多所益都交史上一切臣
古傳浦嶋八蛟宮并臣室烟夢一空
實歷身經異于此務遊奇事適亦同

多名を力而邦間を海荒と致往還
艾殺台頭獲屬國終年糧帳夢家山

明治廿六年癸巳九月

芥舟主人致頌



シヨセフ、ヒコ氏はもと名を彦藏といふ播磨の人なり年十三に
して漂流の難に遭ひ北米合衆國の船に助けられ遂に同國に於
て人と成りて再び故國に歸れば幕末の世の川菰と亂れつゝ港
のみは開かれたれど外國拒絶の論國中に熾なりされば内外交
渉の事煩わしき折として氏はえはく其間より立ちて領事の通辨
をなせしかば當時の事情の更なり外國人の抱ける感情又は巷
説など見るまゝに聞くまゝに日記となせるに漂流の顛末を加
へて近き頃初卷を梓よ上りつ名けて「ナレチーブ、ヲブ、ジャバニ
ース」といふ面白き節抄からねど文のすがた異れり見る人より限
りあり日本文になさばと氏が知れる日本人のさはなる勧めに
氏もさらばとて其譯述をなさんと思ひしに兎角神經痛より惱ま
され其意を果し難く偶予に此事を計れり予は氏を知ると期年

ならずされども一たび其警咳に接して其經歷を聞きてより少年立志の逞しきを感じ且つ此書や開國史の餘話とも見るべき者多きを愛み通俗よ知らしめんと思ひて筆を採りぬさるから原文にハ日本の風俗のともくさしあれど開は煩しければ省きて氏より親しく聞き米國の風土及び原文に漏れし日記を譯して補ひぬ又卷中往々事實に違へるくだりなきよあらねど外國人の間に行はれたる風評臆説のしかり者なれば原文のまゝを譯して加筆せず大方の人之を見て杜撰を思ひろ

譯者識

漂流開國之滴

シヨセフヒコ原著
鷗洲散士補譯

第壹回

須磨明石名所に富し播磨瀧小宮の郷は予が懐かしき故郷なり父なりし人の農業を産とし冬寒からず夏暑からず暮しけるが予の誕生を祝ふや間もなく没りたり母まだ年若かりしより長き媒あるを幸ひに近村なる濱田村のさる家へ再縁せり予は一人の兄を得ぬ其十六歳なる頃伯父なる人の江戸大坂間の賣船の船頭なるに頼みて舟乗となしたりしに元より伶俐の質なれば數年ならずして表師をも勤むるに至れり便船の都度家に立寄り津々浦々の物語り面白おかしく演説し長崎は如何なる處江戸大坂の繁盛は斯々と耳新らしきことのみ聞すより近所合壁の人々は勇ましき若者かな荒き波風凌ぎつゝ遠き浦々經廻りて商賣をなすけなげさよと一村の衰め者となるを見聞きては予れ一人家に殘ることの忌はしく寺小

屋通ひ考ふるもいやなり

此日よりして予が胸は有也無也の境に彷徨ひて好奇の心止む時なしされども後日風俗言語全く異り其頃は夷狄として身めたる遠き萬里の域外に漂泊の身とならんとは夢にだも見ず逞しき妄想にだも浮ばざりし

或る日子は思切りて母に存意の糸口を開き其許否如何を伺ひたり只さへ子を案ずるは親の常況してや年行かぬ身にて知らぬ他郷に踏出さんといふにいかでか同意を表すべき諄々として諫めて言ふやう少年の奇を好みて新らしきもの珍らしきもの見聞したきハさるとながらそも船乗の職業は決して快きものにあらずかしきかしき上りより親方と經昇るには幾層の辛苦を凌がでは及ひ難し況してや船頭となりて人の上に立んこと中々に爲し得べからざること聞く年行かぬ身の分別なく樂しき家を顧みず母を振捨て水夫楫取の仲間入せんとは世の憂節を知らぬが故なり其のみならず兄一人舟乗なるさへ此母の苦勞は堪へずあるものを亦今更に其方まで舟乗となるならば嵐凄じき夜半孤燈の下我身は苦悶に玉の緒絶へん強て他郷に行たくは出しもせん舟乗は思ひ切れ今少し年行かば兵庫

にハ知る人の店の繁盛なるもあれば往きて商業見習ひなば兄は運輸弟は商業相依て助けとなり其方等の行先目出度からんしか思はずやと慈愛限なき教訓に徒らに母を苦しめ自ら辛苦に沈まんとしたる愚さを悟り來れば再ひ元の善少年光風霽月胸の雲霧消へて跡なくなりしより浮浪漂泊の志を離し二年餘の歳月を寺小屋通ひに快よく過したり

第二回

頃しも嘉永三年三月の初つかた我從兄なる人百石積の和船にて大阪より金比羅詣の客九人を載せて今此地に立寄りて頻りに予に同行を勧めたり行きたきとは山となれど母の許しの得難ければとて斷りしに予れ取なして母御の承諾を得べければ是非同行すべしとて母には金比羅詣果たらんには他所には連れず立歸るべきとを約して故なく母の許しを得たり予か此時の喜ひは讀者の想像し得る所なるべし籠を出んとする鳥ならねども忽ち想像に昇る外界の有様に身は此にありてこゝろはそでになし乗氣になりて短氣なる小兒の如く一刻も待ればこゝろ無二無三に發足の用意を整へんと寺小屋通ひに遅き足も空なり

聽て其日となりしかば母に暫時の別を告げて丸龜へ向け出帆せり
 乗合の船客は予を手厚く待遇して明暮慰め愛しみければ今より世海に浮沈せん
 とする少年が初旅なれど胸に希望は満るのみ憂鬱繁き難波津のみじかきあしの
 ふしの間も母に離るゝ若は忘れたり金比羅詣果て後宮島見んどの客の求めに従
 ひて之にも參詣し五月十五日に恙なく懐しき故郷に歸り着けるか母に見へて互
 に無事を祝する間も情なし母は卒中にて其日に我歸着の日に幽冥の人となり
 ぬ片羽もがれし鶯の今や古巢に歸り來て語らふひまも夏の夜の短き死別ぞ是非
 もあし

其年九月予は再ひ繼父と共に住吉丸に乗り込て兵庫の港を船出したり此住吉丸
 は千六百石積にして其頃にて和船の最大なるものなるが灘の酒造家の持船にて
 此度も酒を積みて江戸に向ひたるなりき紀伊海峡を過る頃しも向ひ風にて雨も
 加りたれば熊野浦久喜と云ふ港にかゝりて日和を待ちぬ折しも榮力丸と呼ぶ船
 此港に入りたるが此船は新造船にして大さも住吉丸に劣らず其船頭表師等予か
 近村の人々なりしかば予の履歴も略知り居て年尚幼くして舟乗りと成しを賞讃

し榮力丸にて共に江戸に連行かんとて父の許を得て予は住吉丸を榮力丸に乗換
 たるが之ぞ父と永訣の初とは後にぞ思ひ知れたる扱も榮力丸は住吉丸に先つと
 二週日江戸灣に碇を入れぬ予は舟かゝりの間上陸して諸處見物したりし花の大
 江戸とは言離せしかども今の東京と名替り品かわらんとは思ひ及ばぬとなりき
 十月廿日我榮力丸は兵庫に向けて出帆せり住吉丸は其日に江戸灣に入りたりし
 かば遂に復繼父に遇ふの便りなし
 其頃は江戸灣に入る船は浦賀にて改めらるゝの掟なりしが千八百四十六年北米
 合衆國の軍艦なるコロンブス號ヴェンシオン號一はフリゲート形にして一はコル
 ベット形水師提督ピツドルの指揮の下に初めて我國に來りたり徳川幕府二百餘
 年の太平に馴れし曉の夢覺されて柳營の驚愕一方ならずスハ黒船よと稱きて數
 百艘の和船にて軍艦を取巻しめたり父が乗込む住吉丸も其頃は浦賀に繫り居り
 しかば奉行より警護の役を命ぜられたり其折は予の未だ家に在りしが其後父が
 其時はと恐ろしきと思ひしとはなりとて物語りしが此時は十日程も碇泊して大
 統領の書を幕府に致したれど一人も上陸の許されず其上に交易は和蘭の外許す

間敷者也とのすげなき答書を得て萬里の遠征空しく本國に引上たり後予が桑
 港より香港へ向け太平洋航海中軍艦セントマリーの先任大尉が其折の模様を語
 るを聞ば司令官ヒツドルは大尉の伯父にして千八百四十六年コロンブスヴェン
 ーンの二隻を率ひて浦賀に投錨したる時數多の和船に警衛せられたるが一日ヒ
 ツドルは日本軍船の内部を見た一とて端艇にて漕付け軍船の側より攀登り今や
 舷門に足を入れんとしたるとき一人の士やにはに彼を突戻せしかば端艇に落ち
 て手足を傷けたり老提督は此侮辱に大に怒り直に軍艦に漕戻し發砲して和船を
 粉砕せんとていきまきけるが其艦長は徐よ提督を慰め先觸もせずして行れたる
 落度もあればとて押宥め事なく濟みけるとぞ

第三回

却説も我榮力丸は十月廿三日に品海を解纜してより浦賀にて荷積の爲に四日餘
 りを費し二十六日に出帆せり數日の間は未申の向ひ風なりしより相模伊豆の沿
 岸を縫ひて船かゝりし多く進むを得ざりしが三十日に至りて追風吹ければ真帆
 打揚げて進行し日没に至りて天候の變りもなく日和續くべく見へしかば船頭は

遠江灘の難所を乗通さんと決心し伊勢灣に入らずして進みたり夜の八時とも覺
 しき頃辰巳の風吹き出し雨さへ加りて一時間の後には疾風に變ぜしかば次第に
 帆を下して終に帆柱のみ高く残りぬ予は此時迄眠り居りて事の様をも知らざり
 しが船の動搖に目覺れば風に怒れる瀟の音檣のうなり凄じきに眠り全く醒めた
 れど如何なる位置に船はあるにやと恐々ながら船室より首を出せば山かどぞ見
 る大浪に目先つ暈眩き胸つぶれ早や病人とならんとせしが氣を取直して考ふれ
 ば若みて悟る親々の諫め海上の生活は今ぞ知る不幸のものよと頻りに辭く折し
 もあれ船頭初め水夫楫取口々に稱名唱へて我寢床の傍を行過るを聞ては予は恐
 怖に氣も魂も再ひ身に添はず嵐は烈しさを加へ浪は愈高し登るときは天に到ら
 んかと思ひ降るときは奈落の底につくかど疑はる予は心痛の中に幾度か思ふや
 う神の恵の深くして再ひ陸地に足を踏むを得ば二度と船には乗らじ生涯海を渡
 らじ黎明近くなりて雨は止み風も稍凪たれど浪は尙ほ荒れたり夜明て見れば數
 多の船風に捲れて我と運命を全くするもの早や檣の無きも亦り危難信號を上る
 もあれを救はんとしてもかなはず否我船も沈没を防ぐが手一杯にて其さへ今は

疲れて爲し難き危険に陥るなり七時頃になりて風全く止みたりしかば船頭は水夫に命じて帆を擧げしむ水夫は萬力に取掛ると見ゆる間もなく(戌亥)の風は前に倍して復も吹き荒れ初めたり帆を巻卸して帆桁諸共に緊と胴の間に結び付け吹きさらしるゝを防ぐ間も忙しく舵を辰巳に轉じ風のまに／＼流しけるが櫓長く重きため風の當り強く上下左右に動揺せり此時は最早帆なき船なれども半响に三四海里へ流れたり正午に至りては船の重量を軽く一櫓を全からしむる爲め二百梱の麥豆を海中に投げ棄たり動揺の爲め浪は打込み垢汲み出すにも數多の手はかゝれり午後三時とも覺しき頃右舷に當りて陸地を見たるが土佐鼻ならんと思像せり此時は最早帆柱も持堪へ得されれば日の暮ぬ内切倒さんとして二十分餘も必死に働きて難なく海へと倒したれば船足も軽くなりて動揺も減じ表師も樂になれり風は吹き續けしが夜の十一時頃に至り全く風ざしより表師と見張の外は皆一先休息にとて退きたり予は此時初めて甲板に立出れば風何時吹きしといふ顔して星の煌き渡り波も平なり前日來の心痛も漸く解けて四方を見れば帆柱は斧疵ある株に名残を止め帆は裂けて其處此處に散亂して見る影もなし此有様に再

び胸塞かりしが氣を落付て先つ手を洗ひ口嗽ぎ船玉の神に感謝して胴の間に退き眠に就きたり

明れは十一月一日雲の影さへなく海面滑らかに晴渡れり水夫共は早くより立働きて帆を繕ひ假の帆柱を作りて取付けたれを見渡す限り陸なければ何れを指さんあてもなし前日より南に流されしなれば北に走らばよからんとて一向に其方向に走りたり九時半頃遙彼方に一艘の船を見たりしかば其近付くを待て危難信號を掲げ救ひを求めんと言出すものあれど其船の船艙食料さへ知れざる者を我船は食料さへ數月を支ふべく船艙も新造にして堅牢なれば寧ろ此船にて陸地に達するの運を待べしとの説多數なるより危難信號を掲げざりきされども帆少くして思ふ如く進行し得ず日没頃には風さへ止みて詮方なし夜半に近付て空又曇り風稍吹出ければ帆を遺放し風と波とに任せて三人の見張を残し皆眠りに就きぬ翌日の空晴れて西風吹くと前より同じく波稍高し晝に至りて行手に陸を見たれば何處とも知るよしなし兎も角も之に志して進み行き翌朝其陸地に近き見れば炊烟の立昇らず全く無人島と覺えしが水夫の内よは現在の有様にては到底故郷

へも還らるまじく此處を何處と知るよしなければ一先上陸すべしといふものあれば又一方には此處は無人の境と覺ゆ又若し住む者ありとて名も知らぬ島あれば食人鬼の住家ならんも知るべからず後に此島は伊豆七島中の一をが島なることを知り食料も水も充分にて數ヶ月を支ふへし其内には船にも遇はん亦知れる陸地に達しせん上陸は危ふしと言ひ争ひて果しなく船頭に此由語れば船頭は言ふやう上陸せんと思ふ者は上陸すべしされども己れは此貴重なる船を洋中には見捨難し運よく再び故郷に乘返らん運拙くは此船にて終らんのみと言放てり水夫の一人船玉様の神圖を戴けば上陸と出たり又一人再度神圖を取れば此度は上陸すへからずと出たり神圖の衝突は一同の争論となりて果しなれば親方は最後の神託を伺ひて上陸と事定まりて其支度に取り掛るとき船頭は出來りて予は前にもいへる如くなれば上陸はせまじされどいまし等上陸せんとならば止めはせじといへば船頭の甥なりし表師も船頭にして上陸なさずは予も彼と運命を共にすべしと言ひ出し再び評議區々なり其間に西風吹き出て、船は島を離れ沖へ沖へと浮び出れば予れ人共に上陸の念を絶ちたり此くして船は風に任せ

て走りしが其日没には大日本の端なる此島は當時は之を知らず霞の中に見へずなりぬ
翌日の朝疾く起き出れば風は増し波は稍高し帆一枚張らず風に任する船のとなれば常に三人は舵に掛らねばならずされば大舵を引上げて表に二つの錨を入れ船をして風に立たしむるに如かすとの評議に一決して夫々執行ひしかば是れより舵の音軋らず船は錨の重みと舳の碇に支へられて風と波とに立ければ人々も稍樂とありて其邊片付け洗手にて打揃ひて船玉に暫く所念を籠たりけり日は暮たり波は滑かに風もなし此夜ばかりは始めて枕を高ふしたり明れば十一月九日天氣朗なりしかば假櫓を立て帆を張りて南の風にて十二日まで走りたり十三日には西の風強かりければ帆を放し再び風に流れ行ぬ時々霰さへ降來りて怒濤は船を飲込むかと疑はれ船足今は重しと見へたれば積荷の内四百捆の豆麥を投棄たり寒さは日に増して加はり打込む開迦を掻出しては船玉も所念を懸け休む暇さへ荒仕事になれし水夫等も昨日今日疲勞は顔にあらはるれば予も辭き初め先日の疾風以來此日ほど悪しき日はなしと思ひたり點燈頃には風は止みたれど波

高ければ復も舵を引上げて船を波に立たせおき断念をなして後眠に就きたり十五日は晴天なり鯉魚さわらなどを漁りて食し残れるを乾して貯藏食料とせり鴨は遊び燕は舞ひ其他の陸鳥も船の周圍に飛來れり翌日も又晴天なりしがなすべき仕事のあらざれば退屈を覺ゆ一人の水夫船口を開き積荷の一箱を開けバ二分金一分銀天保錢出たり又胡桃を數多見出したれば船室に持運ひて之より油絞りて日を暮しけり次の日も又朗らかにて仕事なければ海水を蒸餾して飲水を作れり固より蒸餾器のあらざれば大釜に海水を容れ十字の溝を付たる木を蓋とし其溝の端に猪口を付けて十時間に六合五勺の清水を得たれども薪炭の多量を要して其欠乏を告るの恐おればとて此事も止みぬ此月も二十四日となれり其晝頃より西風稍強く吹出せり數多の鐵船の周圍に集りければ恐しき事あらんと恐れたるものありしが彼等は磯部の神の使しめよて我船を護るものあれば恐るべからず吾等の断念の屈きしならんと喜ぶ者ありたりけり十一月は無事に過ぎ月は變れり退屈限りなければ胴の間に集りて彼の貨幣を賭物として賭札引はじめたり半日餘りに渡りて熱心に我を忘れて勝負を争ひしが懸てゲームを終れば洋中

漂泊の身を思ひ出し魯西亞に懸軍せし那翁の兵にあらねども金錢財寶何にかせんとて皆其儘に打捨て願みるものさへなし

十二月五日は又も厄日となりけり前日より雨は朝霧と共に晴れたれども西の風強く吹出し見る間に疾風に變じ船に波を打上げ前船も浸水せり總員ホンブに取掛り開伽を汲出し損所を修めたれども年老ひたる水夫共は寂早船は助らむとて覺悟したる者さへありたり餘の人々は之を勵し必死となりて働きぬ予は邪魔にならんを恐れ手出しもなさずありけるが今此有様に力足らざるも打忘れホンブに取付き働きたり正午頃には稍風きて日没には全く風となりしかば人々初めて蘇生の思ひをなし所々の破損を修むるの暇を得たりしかば充分の注意を以て之を繕ひ碇綱もすれたれば取換へて互に無事を祝し神の救を感謝せり此疾風は去月十三日に比すれば烈しかりしにあらざれ共波甚高く船の動搖強くして船體の軋る音も凄まじ次の日は晴天にて風ありたれ共恐るへき程にもあらねば皆胴の間に打寄りて談話に時を移す折しも轉げるばかりにかけこひ一人の役人ヲヤシ南無阿彌陀佛の稱名を前置に船の船水中に入りたりと報ずれば事は總

立にて先其箇所に往見れば何の異状もあらざりけり人々は先つ喜び且は呆れて先の役人を詰責すれば面目なしとや思ひけん下の間に退きて晚餐にも出ざりけり

十二月十九日は第三の心細き日となれり前日より南の風雨を吹送りしが其朝十時頃に雨ばかり止みたれば予は甲板に出て天候如何にと伺ふ内見れば強風吹荒れて船の進行甚疾く舳に立ちし二ツの碇は浪の面に浮びて曳れ山なす浪は打寄る毎に我船を嘸まんかど疑はれ恐ろしと言はんかたなし皆々稱名唱へつゝ祈念息り無りしが日没に至りて風風ぎ星耀き嵐の名残止めず碇綱のすれ取替へ損所も繕ひたり

二十日は晴れて明ぬ朝風快く吹きて海面水晶を延べたる如しされど船舳の関む音日に増し烈しかりければこは必常數十日間大洋の怒濤に揺られ釘のゆるみたるならんと水夫の面々惣懸りにて麻繩にて船舳を横縦十字に纏ひて萬力にて巻んたり此仕事にて全一日を費したりしが夜に入りて皆胴の間に集りて語るやう漸く一年を経し新造の榮力丸なれど此有様にては最早長く波濤に耐ゆべくも見

へずさりとて之を救ふべき道なし此上は神佛の加護を願ふより外なし唯願へ南無金毘羅唯頼め彌陀の佛力

此願此頼み忽ち神佛の納受ありて救ひを得たる予等の境遇其行末の思ひ寄らざる奇しき話は以下順序を逐ふて説解くべし

第四回

十二月二十一日は晴天にて夜明けたり水夫の一人盥水にて身を洗ひ清め西の方生國に向て神を祈念しつゝある時しも船の舳に當り遙かに白きもの見たり恰も雪を頂く巖石のごとくなれど島か岩か見定難しとて吾人の集れる船室に報告せり人々は急ぎ甲板に走り出て見れば島にあらず岩にあらず高き帆柱に白帆擧たる巨大の船漸く我に近かんとしけるなり太陽は今や水平線を離れて出たれば白帆は美しきまで輝きたり何處より來り何處に向ふ船なるやと見詰る間に其黒き船舳は我船にすれ違ふまで近きたり此時初めて其船の形ちを明白に見れば數多の帆桁を有する三本の長き帆柱ありて數知れず張れる帆に三角帆も交れり乗組人皆甲板に立てるを見れば予等が未だ見聞せざる異様の風をなせり予等は今恐

しきまで大なる黒船に此等人間とは見へざる動物の乗り居るに多少の恐怖を懐
 きたれど此機會を外しては再び助る事あるべからずと思ひしかば語の通否も思
 へばこそ救助を呼びつゝ棹の端に古き布を結付て危難の信號を表せしかば彼等
 は是を認むると均しく手眞似にて來れど招くものゝ如しやがて黒船は吾艦を廻
 りて舳を北に向け三百間程の距離に止まりたり此に於て予等は榮力丸に永久の
 離別をなすの用意に取掛りしが中には異人が物語本にある如き人ならんには如
 何に辛き目見んも知れざればと言張りて乗換を拒むものさへありしや乗合の一
 人にて嘗て長崎にありしものありて黒船は荷蘭船にて長崎へ出入の航海中のも
 のならんと説明したり多數の人は聞も敢へず其等は無用の心配なり我頼む榮力
 丸は最早一週日を俟たずして沈没の不幸を見ん荷蘭人も何も問ふことかは只此好
 機を運として乗轉るに如くことなしと集議此に決せしかばいかに豪氣なる性質
 も難船以來五十日の辛酸苦痛の経験は此救助を振棄さすべき其責任を死して全
 ふせんとする我慢不撓の船長も終に我を打ち端舟を命じ先づ余を連れて降立た
 り此時は着の身着の儘にて囊中數箇の貨幣あるのみ親方なりし船頭の甥は伯父



の爲に寝具と衣服とを持來れり水夫の中には船に入りて手當り次第に集めつゝ
胴の間に散亂せし彼の貨幣を出來得る丈身に纏ひ慾に手間取る未練の劣情纏ひ
し端舟は波に搖れ親船に身を打付て我から碎けんとするに乗込みし人々は口こ
に彼等を急がし早く來らずは取殘さんといきまきければ彼等は倉皇て衣服寝具
を擔ぎて端舟に乗轉れり此に於て名殘惜しくも榮力丸に永訣して黒船に漕付た
り黒船は之を見るより上手回しをなし端舟の近付しとき綱を卸し繩を結びしか
ば我等は黒船の風下に寄り添ふたり此時黒船は躊躇法を行ひしかる廣き洋中に
全く靜止したりけり此運轉の巧妙なるには予等一同皆舌を捲き其後までの話草
となりぬ予等は一人ツ、本船に乗轉れば黒船の船長を始めとし役人(メーツ)は舷
門に出迎へたり予等は言語ころ通ぜざれ跪きて首を下げ其救助の喜びを謝した
れば船長は我等を下甲板の一室に導きて榮力丸の積荷に貴重なるもの金額のも
のを殘せしやを仕方にて問ふと見へしかば數多積みある旨を仕方にて示し歸し
ぬ陸ならぬ陸の仕方咄彼は分りしと見へ二人の水夫に一人の「メー」を付けて端
舟にて榮力丸ふと漕出したれを三四丁も行と見へしが馴れぬ和船の船押切るこ

と如何でなし得べき行も歸るも自由ならざる有様も船長はもどかしく思ひけん
 本船を其風上に廻して彼等を乗らしめ船と板子を取上げて端舟を其儘遣流し
 ぬ今はどて針を東に取り追風に真帆あげて黒船は走り出たり此船は數多の積荷
 を載せ船長「メート」二人水夫六人及び調理人とホーイ乗組居りしが皆鬚を貯へた
 んぶくろ「扮装」にて執れをそれと見分兼る如き容身なり船長は長靴を穿ち其他は
 短靴にて中には此寒空に裸足なるさへありたり船長は瘦せて丈長く赤き鬚を生
 し着服は他の乗組と異ならず口よ何やらくわへて絶へずふかし居り時に煙を吹
 出しつゝ櫓を彼處此處と逍遙せり事務長は身の丈六尺餘にして髪は毛も黒く鬚
 なく白舌紅唇にして年は三十四五ならんか顔の清きこと一見婦人のごとし船長
 と同じ服を着け之も口に何やら含て折々唾を吐きつゝありたり事務副長は赤鬚
 を生し年の頃四十餘なり敏捷に立働き親切にして人付のよき人なりし船室よ一
 人れ若者あり年十七位にやあらん予等の眼には娘かと思ゆるばかり櫓架を渡る
 有様猿に似たり此船よ一人の調理人あり頭毛衣服他の乗組と異り其容身我國人
 に似たるか長袖潤跨髪を剃り上げ頂に長き毛を残し之を網みて巻付け言語も他

の乗組と異れり

此等の人々の形容の奇異なるに予等は多少恐れしが开の全く取越苦勞に過ぎざり
 し彼等は總てに心を付け親切に予等を待遇したり黒船は定の航路に登り救助の
 騒ぎも稍静りしかば船長は調理人打連れて予等の室に來り筆と墨とを携へて漢
 字にて書かしめたるを見れば金山「ト」記しあり又も書き與へらるゝを見れば米利
 加の字のみ解するを得たれど其頃の船頭風情怪しき拾ひ讀に米利を加ふとは何
 たる事じやと口走りぬ

第五回

料理番の支那人は金山と記しつゝ船を指さしたれば必常船名にあらんと思ひ桑
 港に着するまで此船が有名なる金山を有する「カリホルニヤ」に向ひて航行しつ
 ありしとの意味なりしを嘗てまらず
 去程に船長は予等を導きて船に往き其蔽を取除かしめて食料數多を貯藏するこ
 とを示し料理部屋に連往きて水飲む真似して飲料水も充分なることを諭して類
 笑めば予等は其注意の厚きを悟りて禮を施せり夫より再び船室に歸り來り榮力

丸の運命に後髪曳るゝ心地して思ひ廻せば五十日餘も洋中にありたれば數千里も漂流したらんに日暮れば黒船も陸地に到着すへしと誰いはねと皆内心に想像したり船長は予等を其船室に招けり愉快氣に見ゆる小室の四方は花麗なる嵌板にて光彩眩きまでに張り長き腰掛には天絨の蒲團を敷詰たり船中に此る綺羅なる室あらんと思はざれば皆驚ける様なるを船長は笑しげみ先椅子に憑るべしと勸むればころばゆげに腰かくるおれば板の間に蹲るもあり裝飾に見惚れて立てるもあり少時ありて運轉手は海圖を開き其處此處と指さして教へたれを唯耳に止まりしは亞米利加といへる語のみ嘉永の初浦賀に入りし米國軍艦のこの肥廳にありしを以てなり運轉手は亞米利加の圖を示して頻りに船を指さしたれば此時始めて黒船ハ亞米利加船なることを知り得たり次に連れる點を指して「ジャパン」シエドなどいひたれども「ジャパン」は何處の國ならん江戸といへど我大日本は斯る小さな國にはあらじと疑さらしに晴れず次に彼は大なる陸地を指して「チャイナ」なりといひたれど開を唐なりと知らず又も其南の方なる群島を指して「グアム」に住へるものは食人族なりと仕方咄にて教へられ予等は呆れ感ひ此黒船の人

々其族ならばいかにせんと復も怖れをなし早々船室を出て甲板にて評議となれりされども貯藏の飲食物も夥多なる黒船の乗組何條食人鬼ならん五十日餘も漂流し不日に陸地に到着すべし其時は爲す術ありと皆僅に膽を握ぬ
却説も予等は黒船に救はれてより見る物毎に新奇にして殊に此偉大なる黒船に乗組僅ま十一人を數へ一人舵柄を取れば船は自由に動くを見て先づ驚きたり其のみならず和船にては一本櫓に覺束なき帆桁に帆を擧るなれば風荒き日は取扱ひに困難なるに黒船は數本の櫓を立て數多の帆桁ありて帆の形も色々なるを取つけ二三人にて自由に之を扱ふに予等は再ひ驚きたり予等の一人舵柄取れる人に近づき仕方にて何日を経ば此船は其定め地のに着するにやト問へば彼早く之を悟りて手真似にて指折數へ四十二回寝りに就かば港に入るべしとの意を示せり山を見ずして航海すること知らざる予等は思ふやう五十日間漂流して故郷を離るゝこと數千里ならん此黒船は其近海を航行中に予等を救ひしものとすれば亦も四十日海中に山を見ずして渡海すると怪むへき限りなりとて更には各照行かず是より先樂力丸の姿は全く見失なひぬ晝少し前船長と運轉手は器械を携へ

櫓より出来り其器械にて南の方を眺め居れり少焉して運轉手は舵柄取れるものに話し掛れば舵手の小鐘を鳴らすこと八回之に應じて表にありし鐘も亦八點を報したり聽て船長等は器械を携へて船室へ退きたり予等の其何事を爲せるにや分らず器械にて陸地を眺めたるならんといふものあれば否必常太陽の距離を定め時を測りたるならんといふも有りこれぞ「セキスタント」にて太陽の高度を知り經度を測りたるものなるが當時の總て知るに由なし舵手は交代し船員は食事に就けり

正午稍過ぐる頃「ボーイ」は予を招きしかば予の伴れて其食堂に往きたり油の如きものを塗れる菓子様の塊を與へ黒き砂糖を添へいざ食ふべしと吸物さへ出したれば予は一禮して之を食はんとすれば何ともいへぬ臭氣に胸悪くなりしかば人しれず袂に投こみ吸物を吸へば甚しき臭氣無くして中に蚕豆鹽肉と賽の目に切りたるパンとありて香はしきこと限りなし「ボーイ」の再ひ來りて皆食せしやと尋ねたれば知らぬ顔して僅に頷きたり予の急ぎ甲板に走り出て人の見ぬ間に袂より彼の胸惡き食物を取り出し海中へ投棄たり櫓に來りて人々に食事の模様を

語れば一人傍より其吸物の内にありしものころ四足獸の肉なんめりといひぬ斯る不淨のものと知らば口にすまじきものをと悔れども及ばず洋中の墓より救ひ賜ひし神の恵も謝すること協はぬ不淨の身となりしこそ淺間しけれ如何はせんと聞ゆれどもなし果たるとの今はしも詮なく良心に責らるゝまゝ色々と考へ身勝手ながら諺にもいふ如く知らぬが佛神ならぬ身の獸肉と知らずして食したる其罪は神も許し給はんと自ら慰め海水にて嗽ぎ大日本の神々に祈念して罪を謝し其憐みを願ひしもあはれなり

船長は予等に船室を給し夕食には堅きビスケット、バター、鹽肉、珈琲など與へられたれど榮力丸より携へ來れる米飯ありたれば予等の一行は此に會食を開き肉一片手にだに觸るゝものなし其夜は數月以來初めて快く眠に就きたり翌朝船長の復も器械を携へて甲板に出て東の方を眺め居れり予等は彼の器械こそ兼て聞く蘭人の用ゆる眼鏡にして數千里の外も見得べきものなれと思ひて見てありしが聽て何やら饒舌りたるを船長室なる人に「ボーイ」が取次けば其人同じ聲音にて答へたり三度も同じ事を繰返したる後船長は器械を持ちて船長室に

退き版本を取出し算用するものゝごとし其後他の本に何やら書付けたり予等は
 何をなせるにや知らずこは全く天測をなしたるにて「セキスタント」にて高度を
 測り「デツキウオツチ」のなきより船長室に備へある「クロノメーター」に合せん
 爲めホーイに取次がーめ航海曆にて算用し緯度を知り船の位置を確めたるにて
 ありき船長船員は測量をなし終り石版に何やら書付つゝありしを予等の一人は
 張番中の波の形を記し止むるなりと思ひたるは横様に書く英字の波紋に似たる
 を早合點したるも可笑し
 翌日より事務副長は暇ある毎に予等を招きて地圖を指示して仕方咄ゝを爲せり
 予等も數日來之に馴れて了解することも早く領きて通せしとを示せば彼は己の
 いふ所を理解せらるゝを嬉しくや思ひけん満面笑を含み船の行方を指して「カリ
 フホルニア」と呼びたりしかば此船は「カリフホルニア」といふ所へ往くものな
 ることを承知せり事務副長は尙も解出んとしたる時呼れたるを以て其日の教課
 は其にて止みぬ
 翌日になりて朝飯に向へば先の日予が四足を食したりと詰りて甚く予を譏がし

めたる其人が膳に登りたる牛酪を取りて頻りに食ひしかば皆々呆れて其顔を見
 詰れば彼いふ様郷に入ては郷に従へといふことあり不淨なる四足の肉我國にて
 食したらば悪からんなれども此にては聊拂ふ所なしとてひたぶるに食したれば
 予は初めて安堵をなし敵の圍の内に味方を得たる心地して良心の責稍解けたれ
 ども其後とて久しく獸肉を食せんとせざりけり
 晝少し前事務副長は愛嬌を満面に滴らし一着の古き洋服を持來り予の日本服を
 脱がせフランチルの編絆を着せ洋袴上衣を纏はせたれど固より體に適べくもあ
 らぬを白墨にて丁寧に印を付け部屋に持去りたり其翌日裁ち直して縫上りたり
 とて予に着せたり不思議にも能く體に適ひたるを見て笑ながらにオウ、ユー、アー
 ル、ヤンキー、ホーイ(汝は今亞米利加の少年となれり)と叫び出せり予は何事をいふ
 にや解せされども其音を記憶して後に其意味を知り得たり予は初めて洋服を着
 たるなれば窮屈言ん方あければ日本服より暖かにして動作に便なるを覺へしか
 ば深く其恩を謝したり彼は予の肩を撫で、「フールライト」といひつゝ伴ひて船長
 室に到れり船長は事務長と頻りに書物してありしが事務副長の談話を聞き二人

一度に椅子を離れ予か傍に来り握手して何やら語りたれども少しも解らず只終りにベリー、ナイストいへるを聞しのみ
 次の日子は櫓にて談話をなす折しも副長は入來りて予の頭を指し己れが髪を毛を曳きつゝ頻りに何事をかいひたれど予は之を解せずされども我髪の彼髪より黒く且異様なりといひたるならんと思ひしかば僅よ領きて挨拶す彼は其言ひたることの手に分りしものと思ひけん其部屋に走り去りしが懸て剪刀と腰掛を持來りて憑るへしと命ぜしかば予は之に従ひて腰を掛れば彼は剪刀にて予が鬚を切らんとす予は一度は驚きたり前日難船の折若し生て郷里に歸るを得ば鬚を切りて神に奉納せんと誓ひ一を今茲に切り去らるゝことを思へば悲しきこと限りなければども言語の不通にて此誤解を引出したるなれば強て之を厭はゞ其意を知らざる彼れ如何なる憂目を見するも知れじと口惜しながら抵抗せず彼は予か鬚を切り放し髪を短く剪りて香油を塗り刷毛と櫛にて美しく搔撫でたり目前に鬚を破りて予の心平かならず獨り胸を痛めしが亦詮方のあらされば淨手して神々に心の外なる罪を侘ぬ

十二月廿六日午前九時半ども覺し頃怪しき叫聲の聞へければ何事の起りしにやと慌しく往き見るに恐ろし恐ろし料理番の支那人が豚を屠るにてありけり我邦にても西の陸なる薩摩の國さては琉球あたりにては豚鼠の類を食ふと聞つれども目に見るは今始めてなり中國に育ちたる信心深き我等には慘らしなんといふばかりなし悲劇に愕する予等の一人若し今より尙長く洋中を航する内には我々も豚と同一く彼等の腹中に葬らるゝに極りたりと言放てり

廿九日の朝十一時に至りて南西の疾風となりしより躊躇法を行ひたり其運轉の巧妙なるに予等の一行船の生活を取るものには最も面白かりしかば意を注ぎて見物したりありゆる帆は捲收められ大櫓の帆架の下に三角帆を擧げ船嘴帆を巻縮めて船を風に立せたり一人舵柄を取るのみ餘の人々は皆な船室に退きて眠るもあれば讀書するもあり風何處を吹くといふ有様なり船の軋る音もなく波のまにまに乘せゆきて安樂に覺へたれば和船の苦辛思ひ出して其手際よきに驚たり二月二日西風を眞帆に受けて船足軽く走りしヶ午後三時頃一人の水夫陸地見ゆとて告しかば船長は望遠鏡を携へて大櫓樓に立出たり陸地近しと聞きて予等

の喜び飛立つといふも中々なり

第六回

二月三日朝疾く起出て熊鷹眼にて陸地を探せり遙に見ゆると思ふ間に港口は目
眈に迫り右往左往に走る漁舟點々たる間に二本の帆柱に三角帆舉げて疾走する
小舟漸く近けりこれろ水先の舟なりけり金門數里の内に來れば水先は喇叭にて
何事をか合圖すれば我オークランド號の船長は之に挨拶し案内の舟よりは端舟
を御して一人の紳士乗組み我船へと漕付たり我が船長は出迎へ握手の禮をなせ
ば彼紙の束を出せり新聞紙なりしを其時は知らず船長は其室に退きて之を閱讀
す紳士は代りて船の職務を行へり今其服装を見るに黒き服を着け胸に燦々た
る金の鎖を掛け黒き桶とも見ゆるものを頭に戴き厚き黒髪を貯へ丈高く風采殊
ま勝れたり喇叭にて號令を傳へ折々櫓を逍遙せるは知らぬ眼には此船の持主と
見ゆ午前十時頃テレグラフ、ヒルの號なる北濱に碇を入れたり數多の小船は漕寄て
予れ先にと本船に移れるが皆水夫の服装にて煙草を吹くもあれば嚼むもありて
粗暴の容貌は先予等を驚かせり少焉して又も一艘の小舟に五人の水夫二人の官員

らしき人乗せて來れり其船は白赤の段だらに鷲を染抜きたる旗を立てたり此役
人は税關吏にして積荷の員數を取調べ船長事務長と船室にて酒飲み居たるが一
人のみ残りて皆上陸したり船長も上陸すとて予等に別を告げたり鬚を剃り黒き
服に着換へ金の太き鎖を胸に輝し黒色の桶を頭に載せれば見違ふまで立派に
なりて船長とは知らざりし程なりき其後一週間は彼を見ず午後二時頃一の端舟
來りて予等の上陸を勧めたれど其乗組の水夫等の容貌の恐ろしげなるに予等の
一行顔見合せ誰一人之に應ずるものなかりしが一人進み出て若し二三人連れあ
らば上陸して町の有様見て來るべしと言出で遂に一行中の三人は水夫に伴はれ
て上陸したり後に聞けば此水夫は荷上人足なりしと二時間も過し頃三人は菓
子生麵鮑などを貰ひて歸り來り町の美麗なりしこと市人の親切殊に荷上人足の情
厚きことを物語れば一行は上陸の念切なりしが船頭萬藏は急きては過ちあらん
とて止めたり四五日は碇泊の内に過ぎたり其より長波土場に繩を入れ換へたり
其日は朝より霧深く數尺の外は見へずされど予等の健康は入港以來生肉を食ふ
ゆへに愈壯健となれり午後には税關の官吏と見ゆる人帽子には金線を入れ上衣

には黄銅の鈕子を着け一人は劍を帯びたり一人は税關の看守長なりとそ事務長と談話を爲せる折しも又端舟にて税關副長グリーン氏來りて予が仲間の一人の手を握り丁寧にあてつけし「ハウ、アー、ユー」といひたるを早合點に可愛と聞たれば彼能く日本語を解することよと思ひ頻りに話し掛たを彼日本語を解すべき習なければ唯笑ふのみ何の答もせざりけり聽て立去らんとして一人の紳士予を招きて何事かを手真似をなせと予は其意を解せず紳士は事務長に由を語れば事務長は予に向ひ此紳士と上陸せば靴を買取らすべしとの旨を仕方にて示されたり予は始めて之を會得し古き草靴を皮の靴にはき換へんことの嬉しけれと初めて逢ひし人に連れられんこと心細かりしかば事務長にして同行せば伴われんと手真似にて示せし事務長は早くも悟り衣服を着換へ税關副長と三人連れ立ち上陸せり數ヶ月間漂流の身此時初めて土を踏みたるは數千里外の異國なり其光景も先祖以來名さへ知らざる否有るか無きかさへいらぬ此地の有様播州小宮の寺小屋にて逞せし予の想像にも嘗て浮ばざる大廈高樓を列ね石造ならずは煉瓦造り道幅は廣く石にて敷詰られ人道と車道を分ち玻璃窓の中に商品を列ねたる商估

軒を井ぶれば數層の階を具ふる旅店料理屋盛大を極め馬車の往復絡繹するが如きも予をして一驚を喫せしめたり往來人も忙しげにて市街の活氣其繁盛年行かぬ予も感心しぬ
 波土場より市街へと進み行く途に鎖にて足を繋れたる人夫其數凡五十人に餘りて丘より土を堀りて車に積みて運び居れり其力役の烈しきに悩む様見るも哀れなり囚徒の役に服するものなりとぞ其時予が傍を過る貨車を見れば恐ろしき黒奴馬を御せり紺色の股引に赤き縋絆を纏ひ長靴を穿ち首には赤き襟巻を巻き頭に毛の帽子を戴き顔の黒さを漆とも見れば齒の白きは白聖に似たり厚き唇に朱を澱ぎ恐ろしなんといふも愚なり予は思ふやう此は人間にあらずして鬼の類にはあらざるか手長足長は話にも聞たれど斯る惡相の者聞たることさへなし地獄にありと聞く赤鬼青鬼なんといふは此等の類にやあらん重き罪犯せる囚徒が苦役に悩む此地の有様より考ふれば此處は地獄かさもなくば此所より程遠からぬにやと身の毛もよ立ちて恐ろしかりしかば事務長の手を堅く握り身を縮めて其行過るを待居たり

其より繁華なる町より往き靴店に到りて紳士はあれかこれかと靴を取寄せ一々予に履かして適合しものを買與へられたれば予は之を穿ちて此を出て酒店に誘はれて菓子數多を船に殘れる人々への土産に貰ひ受け紳士に別を告げ事務長共に歸船したり初めて穿ちし靴に心煩しくこれ見よがしに甲板を履みならし予が一に行に誇りつゝ其日の事をも落なく語り黒奴の恐ろしかりしとは第一の話柄となりぬ

第七回

其翌日より荷揚に取掛りしかば予等の仲間も船員を助けて一週間に大船付きたれば藏船の船長は甚だ喜びて舞踏會に予等を伴ふべしと約して出往ぬ二三日過ぎて再び來り予等に日本服にて上陸せんことを請ひしかば夕食後いふが儘に日本服にて上陸しカールネー町の角なる二階建の大なる舞踏場へ伴はれ二階の一室の廿四疊敷もあるへき處に案内せらる天絨毛氈にて包みたる椅子長椅子に美しき窓掛など予等の目を驚かすもの多し壁には大なる鏡を箱込たる其前面の椅子に憑るべしと勧められ皆夫々に座を占めて不圖見れば予等より先に多く

の日本人席にありこは如何にとばかり嬉しさと懐かしさにさてころ讀めたり船長が今日態々日本服にて來れといひしは彼等に遭せんがためなりしよと勇み立ちてはや話し掛んとすれば南無三々笑止三日本人と見たるは大鏡に映れる予等の像三餘りの馬鹿しさと失望に少時は呆れて隻語なし
 次の間は樂屋と覺しく顔を書るもあれば假面を着るもあり女にして男の如く男にして女のごとく装へるも見へたり廳て室の外面に當りて鉦太鼓の音喧しく恐ろしきまで耳を貫けば之を異人の音樂と知る由なく中には喉しきに頭痛打出せりと顔皺めるもあり其時船長は予等を誘ひて舞踏室とも見るべき大なる室に導き長椅子に憑らしめたり正面は幕ありて數多の人談笑せるを聞たれど予等は靜座してある内に氣早き人々はこれこそは船長が予等を賣りて見世物とし錢儲けせんためなり無殘々々と其甘言に掛りしころ口惜けれと席を蹴立て外面に出んとす船頭萬藏は徐に之を宥め予等は異國の人の厚き情にて今日まで生を保てるものを其恩に酬ひんと思へ見世物よせらるゝさまで怒ることやあると戒めける内前面にありし幕一度に引かるれば幾百とまらぬ人此方に向ひ居并びて予等が

風俗の異なるを見て嘲るが如きもあれど予等は静肅に座し居たり船長は群集に何事をか告たる後予等を舞踏室に誘へり物見高きは都城の常群集の男女は今日を晴と着飾れるに晝を欺く燭光は燦きまでに照り渡れば室内の光景は宛然一幅の天上樂土にさも似たりと見れば給仕人は例の黒奴にして其白き襟巾前掛は顔の黒きに反射して冥廂の獄鬼かと思見る群集の人々は予等の風俗の異なるをよく見たしとてにや予等の仲間は一二人宛彼處此處の群に誘はれ好奇の目的物となり終れり九時より假裝舞初まりしかむ予等は餘念なく見てある内一人の若紳士予を誘ひ一室の中央に丸卓子の數多据付て廿歳許りの乙女の守りける處に連れ行き二十五錢の貨幣を出して予の好む所に置かしめ卓子を廻せば其に仕掛たる棒は廻りて予の貨幣を置たる向きに止まれば少女は予に五十錢の貨幣を與ふ紳士は再び試むべしと教へたれば貨幣を卓子の或所に置けるに此度も針ハ其處に止りぬ少女は壹圓を予に與へぬ三度まで試みて皆當りたれば命ぜらるゝ儘に貨幣を懐に入れ休憩所に入りて茶菓など饗應せられたり此紳士誰れなりしやを知らず

此夜予等一同は贈物を受たり予は衆に勝れて此會合の愛者となり殊も數多の贈物を受たり貨幣十五圓五十錢懷中小刀七挺金銀指環十一、嵌接の自由なる止針三本まで貰ひぬ其内一本は金剛石入りなりしが予が持てる貳朱金貳分金を珍らしがりて交換せしものなり午後十一時予等は階下の食堂にて晚餐の饗應を受け愉快の裏に本船へ歸りぬ

次の朝予は前夜貰ひし貨幣を珍らしきものに思ひ數へ居る時事務長來りて予が衣服と金とを指さして何事かをいふに予ハ此金にて新しき服を買ふため濱へ行べしとの事ならんと思ひしかば了承の旨を頷きぬ彼はヲールライトといひつゝ出去りけるが夕景に至り再び來り上陸せんと促すに予は心嬉しく伴はれて市街に往けば彼ハとある酒店に入りて予に菓子など與へ獨り興じて酒飲初むる見る内に若き女二人出來り戯ながらに饒舌り居りしが聽て酒屋の主人琵琶彈初れば事務長の手を取りて舞ひ狂いぬ舞ひては飲み飲ては煙草吹かして其嬌態に見惚れ居れり夜は十二時となり予は睡くなりて何が面白きやら分らず丹を氣の毒どや思ひけん一人の女は菓子珈琲など持來りて曝り立つれど少しも分らず只睡

たさにたわいなし事務長は予に金を求めしかば予は言ふまゝに彼に渡せば其にて此家の勘定を済したり予は新らしいき衣服を調へんとて來りつるに金は酒料となり終り不平言ん方なれども詮方なく酔へる彼を急がし立て午前一時頃船に戻りぬ予の歸りの遅きを氣遣ひ居りし予が仲間は見ると均しく其事由を尋ねたれば予は逐一事務長に欺かれたるを語れば皆其不都合を憤り翌朝仲間の内の二人は予を伴ひて事務長の處に往き貨幣を返すべしと實付れど彼は其意を悟らざる真似して空嘯居る面憎さに予等は愈憤り手真似身振にもどかしながら金を返せと迫りしかば彼は漸く溢々立上り其船室より支那製の縮緬の夏衣を持來り之を着るべしと渡したり六尺二寸の大男の服十四歳の日本少年に何かせん此古服が十五圓五十錢の抵當とはさても口惜し腹立たし予等は此時より事務長に不信任を置けり

第八回

數日を越て帆船オークランド號は再び航途に上らんとしたれば予等は税關長キング氏の監督の下に來れり氏は華盛頓政府に向け予等の處分を伺へば政府は予等を税關の船に居住せしめ充分の保護を與ふべしとの指令をなせり思ふに政府は予等の漂着を奇貨とし予等を厚く慰りて軍艦にて日本に送り和親條約を結ぶの機來れりとなしたるなり此時より予等はホルク號といふ税關附屬の船に移り此港にて政府より厚き手當を受けて一年餘を過すことゝなれり

ホルク號は厚さ八分の鐵船にて櫓の周圍に八大砲手銃など裝ひ乗組の人々も嚴めしき服を着けたれば予等は之を軍艦と思ひ乗込の士官が親切に待遇すにも拘らず予等は多少の恐れを抱きぬ之に乗移り先士官及び護送し來れる人々に敬禮を施しぬる内に水夫は予等の荷物を運び呉れたり

予等は士官公室と水夫室の間に室を授けられ糧食掛なりしトーマストロイ氏は臥蓐ケットなど持ち來りて親切に取扱はれしかば愉快なる居室となれり其處片付て甲板に出て船の構造を見るに磨き立たる金物は光るまで美しく六百噸の鐵船にて堅牢氣なり船長「ハンター」氏に五人の士官主計醫官コック執事ボーイまで揃ひ五六十人の水夫は予等に親切にして船具の名を一々に教へたり翌日は予等に一々正服を渡しぬ萌黃の上衣に金鈕子付たれば之を着たる予等一行は一見亞米

利加役人となりし心地して上陸の折は得意氣に皆之を着たり其待遇の厚きに過るを思ひ中にはこは必常予等を肥して後取食はんとするならんなど無教育なるもの、常として口走るものあるを萬藏は且怒り且諭すやう口善惡なきも事にこちよれ斯る善良慈愛なる人々に對し不敬とやいはん異國萬里に漂泊して言語は通せず最も便なき予等を悲み憫めばこそ斯くも情深く惠むなれざるを無下に僻めて疑はんこと冥加も恐ろしと含る如く教へられ其後かゝることを口にすることも絶てなし

予等は日夜爲すこともなく退屈に腕痺れ足膨むこゝ地すれば何がな仕事あれかしと吾人共に思ひ若き者共は此船の水夫の勞力を助け親切の萬分の一をも報ひなばいかんどの評議に忽ち一決し「トローイ」氏に掛合ひ船長に此旨を通ずれば船長も甚く喜び早速承知せしかば其日より士官室にて働くも亦り甲板にて水夫を助けて仕事するも亦り予は船長室の給仕となりて甲斐なくしく働きたり船長等も予等に目を掛け使ひて折々は種々の物を受ることさへあり一月と経る内には一かど仕事にも馴れたるより從來の執事「ボーイ」は船を去りて予等は其後任とな

れり

「トローイ」氏は殊に予等を慰れみ暇ある毎に來りては予等を集めて英語を教へ自ら日本語を覺へんとせり氏は地理書に就き又はセントフランシス、サビエー名書を讀みしより日本の事を知り常々其の國に遊び未々は其土とならんを願へり物語り殊の外なる日本思ひなれば予等も嬉しく彼の請ふまゝに日本語を教へたれども當時は我本國にて鎖港の議論しく外國の事を知り外國の語を口にするものは忽ち牢獄に繋がる程の國禁なれば一日も早く歸國せんとする予等は英語を學ぶことを好まず或る日大尉「トムソン」氏は綴字書を携へ「トーマス」氏は讀本を持ち來り其より日々之を教へたり我が一行の年老株は之を知りて予を諫るやう再び日本に歸らんとせらば外國の語など學ぶへからず其方獨りの爲に我等一行の迷惑となり國に歸るも忽ち入牢の身とあらば吾々の難義ありと嘆きければ子供心に予も恐しくありて親切を無にするハ多少嫌からざれどさりどて一刻も早く日本に歸りたきは山々あれば「トムソン」氏「トローイ」氏に此旨を告げて課業は其日にて止みぬ後にて考ふれば愚らしきこといはん方あし

船中の住居上陸より外樂なれば日曜日毎に町に往きぬ或日丘の上に一軒の荒たる家を見付て往き見れば殘酷なる土人家畜を屠り居れり家畜の悲鳴に予等は目を閉ぢ耳を抑へ息はしき蠻人の所業かな彼等には慈悲も情もなきか酷らしき事知らぬにやと口々に罵りつゝ今は心地悪しくなりて町よも得往かず逃歸りぬ

第九回

明れば千八百五十二年三月合衆國軍艦セントマリ―號桑港に入りぬボルク號の士官は予等に告るやう今セントマリ―號は御身等を日本に送らんため來れるなりと思ひ掛ぬ突然の報に予等は喜び勇み故郷への土産にとて玻璃の空罎の溜置けるを集めて荷造りも品無れは無造作なり纏てボルク號の船長「ウエプスター」氏は「トローイ」氏の稍日本語を解するを通辯として數日の内セントマリ―號に予等に移し先づ香港に送り水師提督「ペルリ」が日本への使節として往くに伴るべしと命じさて言ふやう今別るゝは名殘惜けれど御身等の故郷に歸りて家眷朋友に相見るを思へば喜ばしき限りありと厚き挨拶に予等は其恩の深きを謝したり午後には士官水夫は交るゝ來りて一年餘り一家族の如く馴染重ねしをとて名殘

惜しめば予等も丁寧に其情の厚かりし禮を述べぬ

三月十一日は兼て定たる日とてセントマリ―號は二隻の端艇にて予等を迎へぬボルク號の船長を始め士官水夫は甲斐しく予等を助けて荷物を積載せ呉れたれば予等は盡ぬ別れを告げてボルク號を見捨たりセントマリ―號に昇り來たれば銃劍を肩にせる番兵砲門より面出せる廿二門の大砲は威嚴を示して軍艦の名譽を保てり

萬里の異域に唯一人の友なるトーマス氏は予等を送り來り予等と別るゝと悲しければ同行して日本に往きたければ如何せん勤め帶る身は自由ならずさりとて自ら費を出して往かんともし難しと思ひ込みたる面貌して打恭るゝに予等も今更に其熱情に絆され名殘惜しきこと限りなかりしが斯ては盡じと交互に行末を祝しつゝ袂を分てり

セントマリ―號は都合ありて出帆を一日延したれば再びボルク號を訪問するの機會を得たりウエプスター船長に面會し軍艦に乘移りてより艦中に日本語を解する者なく予等は又英語を解せず加之馴染なき人々なれば予等の便なきと心細き

までなり「トローイ」氏と同行し得るならばいかばかり幸ひならんかと打叩てば船長は不便とや思ひけん「トローイ」氏を招き同行するや否やを尋ねたり「トローイ」氏はいふやう同行は望む所なれども自費にて行く丈の資力なし若しセントマリ―號の艦長が普通水兵の給料を支給して使ひ呉るゝとならば勞役は厭はじ日本まで行かんと赤心見へて決心を示せば船長は直ちに手紙を認め艦長の許へ委細を言ひ送りけるに艦長も容易く之を許せしかば「トローイ」氏は身支度も倉卒に予等と共にセントマリ―號に乗り移れり

予等は櫓に集りて談笑する内艦長と先任大尉出來り喇叭一聲の下に水夫の手足は一齊に動き碇は鰐にて巻上られ次の號令にて帆は展げられ南西の風に孕みて桑港を出發せり實に三月十三日の早天なり半時も過る頃ボルク號の纜し傍を過れば「ウエプスター」氏を始とし總員甲板に出て手巾を振りて發途を祝せり予等も之に應じて禮を返し見へずなるまで見送られ見かへる内に金門を通過したり水先に離れてセントマリ―號は「サンドウィッチ」島に向け疾走し四月三日かぶてんクツクが虐殺せられたるオウアイ島を横に見て午前十一時ヒロ灣に投錨したり

予等か最尊敬せる船頭万藏は六ヶ月以前より病氣にて惱みしが六十三を一期として朝日をまたぬ露のもろくも消へて空しく異域の鬼となれり闇中の燈滅して予等は霧中に彷徨する思ひ嘆き悲めども及はずさてあるへきにあらざれば船が錨を入るゝを待ちて棺を調へ晝過る頃少尉補の指揮にて端舟にて上陸せり土人は面白きとに思ひしにや黒山の如く集まり來りて予等の列に加はり共同墓地に導き呉れたり予等は此處に万藏を葬りて大なる石を標となし懸ろに回向し其より歸途町を歩き見るに多くは小屋の如き家に住ひ戸數も多からねども地味は甚だ豊饒にして野生の菓實は有餘りて採る人さへ無く沿海又魚類多し容貌黒く裸體なる土人は見掛こそ恐ろしけれを性質温和にして親切なり耶蘇教に化せられてより英語を解し多くは教徒となりしものとそ一週間碇泊の後香港へ向け出帆し五月廿日に着し二日の碇泊の後塙門に向ひたり

塙門に到れば東洋艦隊の旗艦なるサスケエハナ號は水師提督オーリックの將旗を擧げて碇泊するを見たり翌朝セントマリ―號の艦長は提督を訪問したるが午前十一時頃提督はサスケエハナ號の艦長士官を率ひてセントマリ―號に來りたり我

艦長は之を迎へ大砲訓練を見物せしめ特に提督と其幕僚は予等の室に來り、トロ
ーイ氏を通辨として色々尋ねぬ夫より艦長室にて休憩し旗艦へ歸り去る時十
三發の祝砲を放ちてセントマリイ號は彼を送れり元とセントマリイ號はフロッ
島の土人に對し米人虐殺の談判をなさんどて發したる船なれば其途の序に予等
をメルリ提督の船に引渡すべしとの命令を受たるなれど其軍艦未だ來らざれば
餘義なく予等をサスクエハナ號に移したり

第十回

六月上旬セントマリイ號は旗艦より祝せる三度の歡聲に送られて本國さして出
發せりサスクエハナ號の人々は粗野にして不親切の事のみ多く予等に與へし部屋
も不愉快なりしかばポルク號セントマリイ號のこと思ひて今更彼に別るゝこと
恰も良友と袂を分つ心地して悲しかりき其のみならずサスクエハナ號は再び香港
よ來り碇泊せしが熱帯近き場所の暑氣に堪難く煩悶を覺ゆるに付け艦員の冷遇
に不平遣る方なしトーマストローイ氏は予等を慰めていふやう抑も此旗艦は常
に支那地方に居り打擲されても錢ほしといふ支那人と交わるより御身等をも支

那人と同種のものと思ひ違へ斯くは無禮に扱ふあらめと予等は初めて事の由を
解したれど訴へんとして語を知らず拙なることとして藪より蛇を出すなどトーマ
スにへ危めば詮方なく涙を飲で日を過しぬ餘りの暑さに偶々甲板に出て水夫の
眠れる傍に往き寝轉んで涼を入れれば士官は囁付く如き聲振立て、靴にて蹴り豚
などを扱ふ様に予等を下甲板なる豚小屋にも劣る居室に追込めり餘りの事、腹
は煮かへれど如何とも詮様なく其儘に打過るのみ其後は甲板へも出ず呻吟せり
或日曜日のことなりき予等は許を得て上陸せり支那街の社堂に到れば社僧は予
等の外人たるを欺みつゝ社内に来れど誘ひて茶煙草など進めたり素より言語通
せねども筆談は爲し得へし予等は之に便りを得て此處より南京まで陸路あるや
と尋れハ社僧は記すやう道程いと遙なれど平坦なる陸路あり若し行かんとなら
ば旅券を渡さん程に持行くべし途中安からんと教へ呉れしかばそれこそ望外の
幸ひなれ艦中にて冷遇されんよりは其道を行くに如かじと旅券を乞ひしかば社
僧は直ちよ朱唐紙に大きく認めて渡したり予等は厚く禮を述べ尙其頃香港に力松
なる日本人あることを聞しかば其家に尋ね行き其處にて若き者八人陸路を行き

残り八人と「トーマス」氏は「ペルリ」提督の着艦を待つことゝし孰れにても早く日本に着せしものが無事を家族に迄らすべしと約束し其夜力松の家に一泊し翌朝は陸行の八人を見送らんと起出れば雨降り出て便悪けれども思ひ立ちたる八人は少しも厭はず小船を雇ひ向ひ岸に渡り忽ち見へすありぬ
 予等は「サスクエハナ」號に歸り來れば士官は餘の人々は如何にせし昨夜は何故歸艦せざりしと尋ねたれば予等は「トーマス」氏を通辯とし昨夜は知人の許にて晚餐の饗應受け夜深けたれば歸艦せず餘の人々も追付け歸り來るへしと誠しやかに事解れば士官も疑ひ晴れしにや將又予等を軍艦の邪魔ものとし多少の厄介拂ひせしと思ひしにや其餘は強て問はさりけり予等は虎の頭を免れたる心地して下甲板に降り來り上陸せざりし人々に昨夜來の一伍一什を物語れば彼等も大に喜びて陸行者の無事安穩を祈りたり
 夕食後喫煙せんとて上甲板に立出れば南無三本艦に漕來る小舟に今朝立ちし陸行者四人まで下襟は片々に裂け襦衣一枚にて見るも哀れなる有様にて乗來れり何事の不祥ありしと來るを遲しと問掛ければ面目なげに答ふるやう今朝出立して

社僧の教へし道を辿り沿道の村人に旅券を示しては道を聞き難所を厭はず五六里も走りどある谷間を通りけるに其處此處の樹陰より手に手に得物取たる土人走り出て身に纏ひたるもの褌がんと袴きて拒まば命奪はるゝこと明なれば詮方なく望むが儘に奪ひ取られ命からく通れ來れりと語れる内に残れる四人も色著きまで憎讐して此處に集來れり後に聞けば其街道は支那全土にても有名なる強盜海賊の棲處なりしと社僧の親切も畫餅となりて旅券の利益ハ仇とあれり士官等には只對岸の町を見えとて往きつるに衣褌に遭ひて斯の通りと披露したれば彼等ハ事の實を絶て知らずされど其後冷遇は以前に變ることなくいよ／＼其度を増したれども今は如何ともせん方なく「サスクエハナ」號のいふせき室に呻吟するより外なし

第十一回

其後二週間を経て「サスクエハナ」號は香港を抜錨し澳門に近き一港に碇を入れ水兵の上陸を許せり此處に碇泊中「トーマス」氏は「ペルリ」提督の艦隊の遲きに倦や一けんカリホルニヤの金礦熱去らぬ内に一儲けせまほしければ今は軍艦を辭しさら

まぐすどて予を招き懇ろに言出るやう費用万端賄ふべければ予と同行すべし左
 すれば英語も充分に教へ二三年の内には日本も開國すべければ其時は相伴ふて
 公然渡航すべし外國語に通じ其國土の智識を得たらんには獨り御身一身の爲の
 みならず日本政府の便宜多からんなど親切に問尋れど予は尙年行かず其邊の利
 害に疎く且は萬里郷を離れて同國の人々に分れて行かんこと心細く兎角の答も
 せざりしに彼其心を推しけん再ひ語を繼て御身若し日本人の遠あらば予に伴ふ
 やと諮り問へば予は之に力を得て然せんには伴はるべしと領けば彼大ひに喜ひ
 て予に次ぎて一行中の年少者なる龜と呼べるを撰定したり傍にありし虎といへ
 るものも共に行かんと乞ひければ「トーマス」氏は快く之を許し繼て「フーリック」提
 督の許を得て塙門に上陸せんとて小船に乗る時予等一行の内之を嫉しと思ひけ
 ん故障をいふものありしかば予等は又も躊躇したりしに見張の士官は一旦提督
 の許しを受たるなれば是非に出去るべし猶豫は叶はずと氣色ばめば予等は一行
 の止むるを振り切て澳門に上陸し葡萄牙人「フランク」の旅館に投じぬ其より便船
 にて香港に出て旅費乏しければ安宿に泊りしに其主人は亞米利加人にて「トーマ

ス」氏より予等のとを聞知りて不幸を憫みいと親切に待遇したり一週間程滞在す
 る内英吉利船なる「サラ」フーバア號が桑港に向ふとの廣告ありしかば此便船に
 打乗りたり一人五十弗の船賃を拂ひしが四百噸許りの古船にて下等なる船室の
 外あることなし船足も遅く五十日間を航海に費し十二月初めに桑港に着船した
 り「トーマス」氏は直ちに虎龜の二人を連れて出去り予は荷物の張番となりて残り
 三時間を経て彼等は立歸り税關船「フロリック」號にて舊知己に遇ひ予等の到着を
 告たるよ大に喜びて充分に保護し呉れべき旨を約したりと物語れり打連れてフ
 ロリック號に往けば嘗てボルク號にて馴染を重ねし大尉「カーソン」「ウオルキンソ
 ン」の二氏予等を迎へて以前に増して厚遇せり「トーマス」氏は適當なる地位を探す
 まで予等を保護せんことを兩大尉に依頼すれば彼等は快く諾ひて親切面に表はる
 れば「トーマス」氏は安心して又も虎龜兩人を引連れて地位を求めんため出去れり予
 は故郷を出しより此時初めて全く獨り殘されて話相手もなかりしかばフロリック
 號の士官等の舊識にして親切なるにも拘はらず心淋しきに裏悲さを覺へたれ
 ど氣を取直し思ひ廻せば予も支那にて一行の止むるを振切りて此地に來りたる

上は斯るめ、しきことにては協はじ今日よりは最早大人となりて力の限り立働
 き相當の資産を作り歸國の時を俟つべきなり懐しと思ふ故郷にも兩親はあし其
 外にも身を委ぬべき親族もあらざれば兎ても角ても自力より外頼むべきもの更
 になしと思ひ極めて自ら勵し艱難に當るの覺悟をなせり實に此日は予か世海の
 怒濤を凌ぐ初乗なり目前の必要は發明の母なりと聞く予が此決心の自ら悟りた
 る處世哲學の關鍵あり否終世の方針なりき

第十二回

寢床の予が默思を破る頭上の足跡號令一喝帆は鳴り出し船は傾けるに何事なら
 んと跳起て甲板に出ればフロリック號は碇を抜きて今朝過ぎし港口近く來れるな
 り今税關長よりの命令にて密輸入監視の爲め沿海を航してモントレーに向ふな
 りけり翌日は其處に一宿シカトリナ島サンヂエゴに各數日を送り再ひモンテレ
 ーに歸りしは十二月廿四日なり
 翌日は耶蘇降誕日なり雨降出したれど船長は釣床を刷淨めよと命じたれば水夫
 は掃除手早く濟し上陸して疾くや遅しと駈込むは酒店數人は忽ち酒に飲まれぬ

日は西に光線を止むる頃皆歸船すればさても笑止早くも雜糕の取合ひも喧嘩初
 めぬ稍遅れ走せに來れる一人千鳥足踏しめ、捲舌の呂律なく雜糕渡せと罵れ
 り料理人は持余し笑止遅かりし料理の品々人々がはや携へて上陸せり跡追行
 きねと教ゆれど彼益々哮り立て陸は陸船は船吾が分渡せと怒鳴たて所嫌はず荒
 れ廻れば早く就寝せる人々はいかで睡らるべき氣早の一人靜にせずば辛き目見
 せんと制付れば相手ほしやの生酔一語に及ばず組打始め兎角する内士官も出
 來り生酔は手鎖嵌られ其日より桑港に着せしまで堅き麵包と水のみ與へて窮命
 しける之ぞ彼が貰へるクリスマス雜糕の分前なりしよ
 桑港に歸り着けば待兼し「トーマス」氏は早くも來りて新聞にフロリック號行衛を
 失ふどの記事ありしより今日まで案じ暮せしに無事なる顔見て安堵せりと喜べ
 ば予は又サンヂエゴの途中にて小船の不快を覺へたれば上陸したしと強て請へ
 りしに彼領きて慰るやう今暫く耐忍すべし早く上陸せしめんとすれど未だ好位
 置を見付得ず支那よりの船賃其他に財布をはたき差當り詮様なければと頼むが
 如く論さるゝを如何で辭むとを得べき予は其四月までフロリック號に止るとど

なれり斯くて日を過す内予が給料のことより船長と士官の間に一場の葛藤を生
 たりたり開を如何といふに士官は予が米人と同しく能く働くゆゑに相當の給金を
 與ふべしと主張すれど船長は一かな聞かず言葉能くも通ぜずして仕事もなし得
 ず少しの勞力は食事賄ふて報ゆれば別段給金を支拂に及ばずと堅く取て動かず
 二人の士官は稍激したれども詮なければトーマス氏を呼寄せ予の上陸の事を談
 じ若しトーマス氏にして困難ならば賄費は士官にて取すべしとすれば頑固なる
 老船長も餘義なく相當の給料を拂ひても予が手替りを雇入るべし船長への面當
 に一先上陸するころよからめと評議を定めトーマス氏は再び予が日々の入費を
 荷ふに至れり當時トラ(本名治作)はヒニシアの小帆船アルグス號にて其船長ビ
 ス氏に備入られ月額七十弗の給料を受け龜藏は同しく測量船エウイング號に備
 はれて六十弗の月俸受け居りしかばトーマス氏の重荷も多少は減ぜられ居りし
 なり予はフロリツク號を立去りてアルグス號の虎吉を尋れハ船長ビース氏は予
 の來船を喜び地位の有るまで船内に止まるべしと親切に勧め呉れたりトーマス
 氏もアルグス號の食糧掛を命ぜらるることとなり予も亦ビース氏の世話にて月

俸廿五弗にて旅店に使役せらるることとなりしが十五歳の少年には勞力に骨折
 れて堪ゆべくもあらず店主と其子息は偶々手を貸して助け呉れるとあるも料理
 人なりし支那人は汚穢なる仕事をも手傳はせんとしたりしかば一日も此に居る
 ことの忌はしかりけり船長ビース氏とトーマス氏は亦も心配して今度は女主人
 一旅店に予を住替させたり月給は前より五弗を増し仕事は樂にして下宿せる
 客も五六人のみ皆上流の人なりしかば予は喜びて此に使はれ居たり
 一夜店主の許を得てアルグス號を訪へば折悪しく船長は桑港に用事ありて出往
 たる留守なりしかばトーマス氏と虎吉とに遭ひ甲板にて過去の話などしてあり
 し内船長は一人の外人を伴ひて歸船せり予は今來りし外人を監視するに早や胸
 轟きて止まず此人こそ日本人にして其衣服は勿論膈差まで横へ布呂敷包を抱へ
 居たり虎吉は予が耳に口を寄せ予等三人仲間の止むるをも聞かず支那より分れ
 て此地よ來りしが今更思へば悪きこととしてけるよ必常仲間の者ハ日本に歸り
 て官府へ事の始末を訴へ出てたるより予等三人逮捕の爲め此役人が來りしなら
 んうたてき事になりけるよと共に恐れ感ふ内船長は予等に告るやう又も南洋に

て難船に遭ひし一人の日本人ありしかば予等に引合せ詳しく難破の模様を聞かんため連來れりと聞きて予等は初めて胸撫で下ろし直に新客の傍に行けば予等の日本人なるを知らぬにや丁寧ていねいに挨拶せるのみ一語をも言はず予等は邦語にて話し懸れば彼れ審かしんか一氣に目を開きしが聽て其處に跪き偏ら助けを請へり予等が米人に救助せられし時を思ひ出されて其心根を察し懇に彼を慰め船長が頻りに遭難の模様を聞かんとを望む旨を告れば彼初めて生きたる心地やしけん座り直して其不運の伍什を語り出せり

千二百石積の船の乗合となり新潟より箱館に航海し再び新潟に歸らんとて十二人の水夫に已れも加はり津輕海峽つがるかいせきに來りしに全く風となり潮に流され沖合遙とほふ出たりと思ふ内風吹出たれば山近く沿はんとして骨折る内船は折れ如何んとも詮様なく風と波との玩弄物となりて只浮くばかり取つかん島もなく四ヶ月は際なき洋中の捨小舟船貨とては鹽魚ばかり食料の貯へもあらざればはては乗込も病ひに犯され或ハ餓に斃れ僅に生残れるは已れ一人氣を失ひ魂銷て主なき船は沖の浪に任せたり何時とはしらず已れば人々に救はれて此異國には來れるあり

と事落なく物語ればトーマス氏は之を筆記し船長に渡せしが其後桑港の一新聞に此事を載せられたり

予は其夜旅店に歸らんとせしに船長は予を通辨に頼み此新客の處置に就き税關長に申請すべければ旅店より五六日の暇を受け桑港まで伴ひ呉るゝ様との求めに予は直に旅店主に請ひ暇を貰ひトーマス氏に伴はれ千八百五十三年六月二日桑港に着しトーマス氏トーマス氏は予と重太郎じゆうたろう新漂着者しんひょうせきしやを携て税關さして急ぎたり其途中にて予は洋服店に入りて紺のフロックコート三ツ物を購ひたり其價卅二弗なり思へは予の月給より高し去れども已れの頼の汗にて衣服着たりと思へば心竊かに満足して給料不相應に高ありしも苦にならず直ちに古服脱き捨てゝ之を着れば見違へる迄立派になれり予此時口の内にて呷く様ア、馬士にも衣裳よ

第十三回

税關に到れば税關長サンダース氏自ら迎へて一室に案内し重太郎に遭難の有様を聞かし予は其が通辨を爲せりトーマス氏トーマス氏は傍より予が英語の不順序を補ひて漸く事由を税關長に通せしかば請るゝ儘に衣服を給し日本に歸るの

便宜あるまでアルクス號に止まらしむるとなれり

予等は用果たれば立出んとしたるに「サンダース」氏は「ピース」氏を呼戻し予を指さしつゝ何事かを語りしや難て「トーマス」氏に由て税關長は其家に予の來らんことを欲する旨を告られたり加之予に去て其旨に従へば學校へ通學させんとの親切心「ピース」氏も傍より是ころ上なき幸ひなれ思案に及はず従ふべしと懇に勧められたれば予は今の主人にして暇呉るゝとならば其意に従ふべしと諭りしに「ピース」氏は其は必らず容易に聽るゝを得べしと勢付られたればアルクス號の歸航を待兼ね急ぎて他の汽船にてベニシアなる旅店に歸れば主人は約束の日限より早く歸りしを喜びて彼是と尋ね問へば予は有し一伍一什を物語り改めて永き暇給はれど申出れば主人は今更らに予を手放すを惜み給料に不足あらば四十五弗まで増額すべし曲て此處に止まれと頼まれて予は辭することの辛けれども一旦思ひ立ちたるなれば此機を失はじと思ひ主人には數多たひ禮を述べ決して給料の不足などにて暇を乞ふにあらず斯々云々にて教育を受けん爲めに桑港なる税關長の許へ往くなりと意中を曲さに語りて一向に請ければ店主も漸く得心しざる

上は暇を出すべし能くぞ正實に勤め呉れしといひて予が願ひも許容されたれば六月十五日に「ピース」氏と「トーマス」氏に伴はれて桑港なる税關長の許に往き予は其日より税關にて給仕をなし手紙を纏め用紙を折ることを勤めしたりされば予は忽ちに一紳士とされる心地して下等なる職業より一躍登龍門にも登りし思ひ心ばかりは誇顔なり

其日午後丈高き半白の老人の燕尾服着けたるが來りしに主人は予を引合せ指指出して示せしかば予は其の軀幹の大なるを謂ひしものならんと思ひぬ紳士は予に握手を施せば予が手は其掌中に包まれたり頻りに話したれども只英語を話し得るやどの問のみは解りたるが其餘は少しも解らず此の人ころ有名なる元老議員「カリホルニヤ」の「ゲイン」氏にして「サンダース」氏の擗指出せるも其の故なりしよ三時に至れば「サンダース」氏は机の上を片付けよと命せしかば其如くなし相携へて二階を降れば門外には馬車待ち居れり「サンダース」氏は「ブラナム」氏と組合ひて私立銀行を有せしかば税關の退後日々銀行に通ふなり予は銀行に伴はれて「サンダース」氏の子息に紹介せられ其より番頭手代に引合されしが予の日本人なり

しと彼等の好事に適しけん皆親切に予を待遇せり四時半過ればミツション通り
とカーチー町の隅なる氏の邸宅に馬車を驅れり家は華美よして前に廣き花園あり
氏は予を伴ひて内に入り家婢に引合して予の世話をなすべきとを命じたり
七月上旬バルチモノアに於けるサンダース氏の本邸に伴はんといはれしかば予
はトーマス氏虎吉に其旨を語りて別を告んとて往けば彼等は甚く予の東行を好
まず御身今サンダース氏方にて何程の給料を受け居るやと尋ねたれば予は別段
の約束はなし唯教育を受けるが予の目的なりと答へしに彼等は开は馬鹿らしき限
りなり此州にての金儲け時も今暫くの間なり勉めて金を儲くるには如じと且つ
諫め且止むるに予は金儲けも固より善けれと予が今サンダース氏方にて働くは
何の事なし遊び居るも同じ事なり食費は勿論洗濯代さへ賄ひ呉れ折々は小遣さ
へ與らるゝこと予の仕事には善き報酬とやいはんといひ争へと彼等は尙予が東
行に不同意なりしかば予は上陸して事云々と手代に語れば手代はサンダース氏
に之を告るに氏は直ちに手代をトーマス氏の許に送りて其拒否の理由を尋ねし
にトーマス氏は予が支那よりの船賃及其後の費用を辨じたりしこと聞終り手代

は其費はサンダース氏より之ヲ支拂ふべし今サンダース氏は予を教育する爲め
本州へ伴ふなりと詳さに語ればトーマス氏も容易に予の東行を諾したり此等の
行掛りを予は少しも知る由なくサンダース氏の寛大なる嘗て莫大の金拂ひしこ
とを予に語ると無りしかば全く後まで此辨償をなし呉れしを知らずありけり
其月中頃サンフラン、デル、スーを経て紐育へ向ふ汽船に乗り込み八月五日無事紐育
に着船直にメトロポリタンホテルに投ぜりサンダース氏は最早此より二百英里
より隔てされば予等は明日郷里に到着すべし兎に角此處に無事に着せしを家眷
のものに報ずべし二十分間にして其返事を得べしと語れり予は是そ一場の滑稽
にて予が屢見馴れぬ物に驚くを知るものから又も予を欺くならんと思ひ迂濶と
は信ぜず唯笑ひてありしに伴ひ來れといふが儘に其跡に従ひ行きぬ
階下よ到れば彼は器械に取付きて手を働かせば憂々として響く予は何事を爲すにや
と近く寄りて見るに唯彼の指の動く毎に器械の憂々響くより外あし予等は再び
階上に出てサンダース氏は新聞紙読み居る内に予は彼處此處の室を廻りて其額

面など打眺め居たり帳場の書記忙はしく昇り來りて封じたる書狀を出せばサン
 ダース氏は封押切り讀下し今方出せし報知の返事にて其中に氏の義弟明夕、バル
 チモアのステーションにて出迎ふる旨を言越せりと告れと予は尙之を信せず
 飛鳥の速きはあれど使ひが線金に沿ふて鳥より速く走らんこと思ひも寄らず、サ
 ンダース氏の予を欺きて黷るに極りたりと獨り打笑ひぬ
 紐育府は北緯四十度十二分西經七十四度一分に位し合衆國中最盛の商業市にし
 て世界一等市府中に數へらるべきなり紐育市部はハドソン河とイースト河の間
 なるモーハツタン島に在りて兩河合して良港を作り市の繁盛の基をなせり島の
 長さ十三英里半北はハーレン川に沿ひ面積凡そ二十平方英里あり繁華なる町は
 島の南部にありハドソン河は沿岸二百餘英里繁盛なる地方に沿ひて流れエリー
 溝渠及西部諸州の商品を浮べて此に來り海峽を過ぎて大洋に注けり英吉利、佛蘭
 西、葡萄牙、和蘭、西班牙、瑞典諸國の汽船帆船引きも切らず出入せり
 大西洋より紐育港へ入來れば左りにニューザージーの青山を一陣に集め北にはス
 テーテン島突兀として起り東にハロング島の濱白沙長く見渡すべし兩島の砲臺

咽喉を扼し瀬戸内の景色宛然一幅の畫圖に似たりステーテン島を過ればニュー
 ザーシーの濱遠く連り右に名に負ふ長島相連りて續きサバーナス、アイランド
 の砲臺を横に見て遙に帆檣林立せるは紐育港なり塔棟砲臺の森の上に浮ぶは名
 手に成れる彫刻にも似たり市は廣小路を頂上として砲臺より次第に高く成れり
 早く開けし町々は區畫正しといふを得ざれどもさりとて不快なる町にあらざり
 又は煉瓦造りの宏壯なる倉庫立並びて商賣町の繁榮を現はし邸宅とては一家も
 なしウォール町は商業の中心に在りてイースト川より廣小路への道に當り銀行商
 店兩替屋軒を并べて土一升金一升の土地柄なり道路の幅員八十尺石を敷き詰め
 たり
 市に名高きはクロートンと稱する水機なり世界無比の大仕掛にて工費も少から
 ず貯水機の面積四百エーカー一エーカーは我四段十八步周圍凡五英里容積五億
 五千ガロン一ガロンは我二升五合餘なりとぞ
 市の人口千六百五十三年には僅に千二百人なりしが千八百五十年には五十一万
 五千五百四十七人を數へたり其進歩の一端を窺ふに足らんか

翌日午前七時紐育を發し「デポー」に向ふ途中「サンダース」氏は是より一時間に二十
五里四十里乃至六十里を走り得へき蒸氣車に乗りて往くべしと語れば予は氏が
復も戯るゝと思ひて取合はず雖も「デポー」に着せしに氏が言ひしに違はず蒸氣鐘
を付たる列車あり予等は其一車に乗込たるに瀛鐘は息吹出し煙突は煙を吐くと
見る間に車は動き出せり始めの程は徐なりしが暫時にして目に過るもの何たる
を見分け難きまで疾走し列車は水中を行く蛇の如く地上を匍ふ蚯蚓の如く蠅々
として動搖しつゝ走り去りけり

午後六時ホルチモニアに着せしに前日「サンダース」氏の言ひし違はず馬車を以
て氏の義弟は予等を迎へたり直ちに氏の邸に到れば予を遠來の孤客として一々
に其家族に引合されバルチモニアに始めての日本人なれば皆面白きことに思ひ
親切に慰りけり

第十四回

一週間を経て「サンダース」氏は華盛頓府に用事ありとて予を伴ひ首府へ翌日着せ
しが氏は今より合衆國民の首長の許訪問せん同行すべしとありしかば予は首長

とは誰なるやを知らざれと言ふが儘に例のフロツクコートに身装し二頭立の馬
車にてペンシルバニア通りに來れば鐵柵を繞らせり大理石造の宏壯なる二階建
の家あり御者は其玄關に馬車を横付にすれば「サンダース」氏は降立ちて呼鐘を鳴
せば取次の者出來るに名刺通じ一室に通りて待つ程に取次のもの再び來りて此
方へと案内するに導かれ廣き書院に出て尙其奥なる廣き室に案内せらる「サンダ
ース」氏は予を顧みて「首長は此所に在すなり」と囁きぬ

打見遣れば彼方に書物なせる一人の紳士あり年の頃は三十八九色蒼白く瘦肉中
丈にて温和なる容貌洒落なる風采威ありて猛からず黒服を着て椅子に憑り態度
優に氣韻あり予等の入來りしを見て案を離れて先づ「サンダース」氏と握手の禮を
あし寒暖の挨拶終れば「サンダース」氏は此少年ころ日本より來りしものなれ今カ
リホルニヤ州より當地へ伴ひ來りし序を以て閣下に謁を請ひしなりと紹介すれ
ば貴紳は予が手を取りて挨拶し側ある椅子を指し憑るべしといはれたれども躑
なりと思しかば之を受けず丁寧に辭儀をなして稍退きて立居たり「サンダース」氏
は貴紳と對談を始めたれば予は窓ある處に往きてホットマツク河の風景を眺めつ

獨り考へ始めたり予が其時の胸中を寫せば彼の貴紳が國民の首長なるか此場の光景より見れば實らしく思はれず建物こそ壯麗なれ日本には見るべからざる鐵柵は立派なれと門とても嚴重ならず番兵も無れば巡邏も見へず室内とても絹の窓掛椅褥などは美麗なれと其外には此大國の頭領たるべき人の住居とも見るべきものなし服装とてもサンダース氏と異なることなき黒羅紗のフロックコートなり之を此國の一人といへるサンダース氏の言葉とても不審し果して斯る貴紳ならば従者も數多あるべきに門を守る兵士もあるべきに傍近く青侍もあるべきによしやサンダース氏は税關長を勤むるとも此くも膝近く交へて然も同輩と語るが如く談話のなるべきや我國にては代官にて斯くは心安きものにあらじ威儀嚴しく應接するに其制度其政府を知らぬ予は更に合點行かざりけり「サンダース氏は用談を終り退出せんとて予を招き貴紳に暇を告げたり予は再び彼と握手し口軽くさよなら！
歸途の馬車の内予は再びサンダース氏に向ひ今日面談せられし貴紳は誰人にて在すやと問へば氏は片頬に笑を含み彼の貴紳こそ此國の百官の長として國民の

支配者なれ大統領と呼びて御身の國の皇帝と均しく最も高貴の人なりと教ゆれども予は猶疑ひ晴れず合衆國の如き強國の臣民に君とし臨む大統領が斯くまで質素に儀式なく威嚴なくありけるよ外に守る兵士無れば内に侍する従者なし我が日本には端役にては役人と名の付くものは出入に伴人あり人に接するに夫々の作法あり大君の事言ふも畏し大名とても容易に近づくを得ず予を燕居の室に引て面會せる人が此廣き亞米利加の幾千萬の蒼生を統治する大統領ならんとはさても訝かし！

今日始めての都入り心に残る米國國都の風光筆の序に畧記せん府は北緯卅八度五十三分西經七十七度一分に位しボトマツク河岸に立ち前に港を擁してボトマツク河アナコスタ河合して此に注ぐを以て巨船も繋ぎ得べく商業隆盛の衢をねば雜鬧の塵なく市街清潔なり聞く國父ワシントン自ら此地を相して政廳を開き街衢も其設計に係りて邸宅樓臺丘岡の間より連り山紫水明風光の快活なるは此上なき心地よき土地なりけり市區井然七條の大路を開き四通八達の便となし大統領官邸を中心として五條の道路あり官邸と省廳は小高き丘の上におりて一英

里餘も距たりペンシルハニヤ通り其間にありて第一等の市街とせり道の幅員廣きは二十七八間狭きも十間に下らざりき

第十五回

明れば千八百五十四年十月サンダース氏は公用にて魯西亞に往くことなり予を招き此度官用にて歐洲に赴くお付き其方を伴ひたくはあれど折角學問させんとて此所まで連れ來りしを又更に旅寐に月日を費すこと其方の不利益と思ふゆへに予は獨り赴くべきに御身は今より學校も通學すべし歐洲より歸り次第カリホルニアに連れ歸らんと懇ろに諭されて予は父とも頼む其人に暫時の別れも哀しけれとさりとて止むべきにあらざれば予は其日より舊教主義の學校に通ひ始めぬ教科は聖書の講談綴字習字算術等なり教師「ウーターズ」氏は老實勤勉の聞へありて親切に教へ呉れ學友とも親しくなり遊歩の折は皆予が傍に來りて語學を教へ課程を助け習はしければ予は客裏の憂きも忘れて日々怠らず學ぶ内月日に關守なく其年の半ば過ぎて夏季休業となりしかば「サンダース」氏の養母の君と令息に従ひ市より七里程隔りたる別荘に送られたり別墅には丈夫に苦勞氣なき四

十人餘りの黒奴ありて耕作に従へり只さへ其風俗容態の可笑しきが毎夕仕事終りて跳り狂ふて遊態は得もいはれず興ありげなり

別荘に着せし翌日母君は搾取所より牛乳を取寄せ砂糖と氷を添へて下婢に持せて手に與へられたり始め何といふものならんと下婢なんどに問へば家婢は牛を指して其乳なりといふ不淨なる四足の乳と聞き見るも厭なりと飲まざりしかば下婢は主の夫人に之を告たりと見へ夫人自ら出て來りて牛乳は健康に最も宜しきものなれば只得飲むべしと勧められ人々の手前據なく少量を飲めば思ひしに似ず旨かりしかば只一口に飲干し世には旨き物ありけるよと舌打す夫人は其れ見よといひたげに打笑ひぬ

今日は此に來りて初めての日曜日なり皆會堂に往かんとて予には馬を與へられ一人の黒奴を馬丁に添られたり予は始て馬に乗り恐しさと面白さ相半して無事に會堂に到りぬ予は此日より馬の味をしめ此別荘にありし間日々乗り試みしより其面白さ忘られず日本に歸りて後も乗馬には忙はしき中にも貴き時を費しぬ一月餘り銷夏してホルチモアに歸りたるに數日を経て「サンダース」氏は歐洲よ

り歸り來り亞米利加西海岸に於ける魯國海軍主計官を命せられたる旨を語り予を伴ひ行くべければとて學校は退學せしめたり

其年も十一月となり出立に餘日なしサンダース夫人は宗教熱心の人なりしかば是非予に洗禮受くべしと勧めたれば予は其意に悖らはず夫人に伴はれて寺院に往きしに牧師出て閉切りたる小室に導き神の存在信仰の事など問ひたる後種々の名を呼び上げて好めるを撰べとて繰返して數多呼びたれども予が耳には皆同音に聞へて耳障りよきはなし最後に「ジョセフ」といへる名を呼びたり其聲聞きよかりければ其れよけれといひしに寺僧は頷きて先に立ち禮拜堂に入り此處にて洗禮の式を行ひ予は信徒となり終れり

二日を経て出立し紐育パナマを過ぎ十一月廿八日無事に桑港に着し再び學校へ通學し翌年十一月まで勤學しけるに時しも商業社會より一大恐慌起りて桑港の銀行多く破産しける内に「サンダース」氏「プラナム」氏組合銀行も同しく破産の不幸に遭ひ閉店することとなりしかば予の學校行も一時停止せしが知己の一人に親切なるありて再び學校へ入れ六ヶ月は通はし呉れたれど其人も亦此恐慌に巻込れ

失敗したりしかば予は止むを得ず廢學したり

第十六回

杖と頼み柱と思ふ「サンダース」氏の破産に思ひ込みし學問もなし得ず心残り也詮方なく此桑港にて何か職業を得て恩人の肩を輕め且は修業もせんものと「サンダース」氏に何卒知己の方々にも話されて好き口見付給はれと思ふ旨を語れば氏も快く承知して「マコンドレー」會社に雇はるゝことよ取定められたり此會社は四名の合資にして依託販賣を業とし一人の支配人に數多の番頭手代を置き手廣く各國の依託品を取扱へり予が此に雇はれしは實に千八百五十六年四月五日のことなりし予は商業見習として地位の低きも厭はず正實に立働居たりしに一日議官「ゲウイン」氏は「サンダース」氏と新主人なる「ケーリー」氏に使を送りて予を華盛頓に連れ行きたしと言ひ來れり兩氏も初めの程は斷りしが度々の使にて切に求めければ兩氏も據なく手紙にて予を國都に伴ふの目的を問合すれば「ゲウイン」氏よりの返書に

華翰を領し御問合せの趣拜承仕候拙者日本人ヒコを華盛頓府に召連れ候は政

府にて雇ひ入れ早晚日本に歸る前米國政府の組織を知らしめば一には歸國の後彼我人民の交通上にも好都合と存し二ツには彼一身の爲め立身の道相立可申と存し候尤も政府にて雇ひ入るゝ運びに至るまでには時日をも要し殊に彼は米國市民ならざることも多少の妨礙とならんかと存候得共是とて打勝ち難き程の障礙にも無之と確信致し候敬具

千八百五十七年八月三日

ウィリアム、エム、グウィン拜

桑港にてサンダース貴下

之を見て兩氏も尤もと思ひけん「グウィン」氏に隨行すべしとて暇を呉れたれば予は九月廿日桑港を發し十月七日紐育府に着し都ホテルに投宿せり或朝「グリン」夫人は一人の紳士と共に入來りて此紳士と共に往きて晴着を誂へ來よと言付たれば予は立派ならねと垢付かぬ衣服數着を持居れば當分は新調せずも事足れりと辭めば「否」と御身の着せる衣服は今流行のものにあらず都に行かば鄙びたりとて笑れなん新柄なるを誂へこよといひつゝ紳士の方を振向き御苦勞なれど此少年を上等呉服屋と靴店とよ伴ひ彼の爲に注文し給はれといへば紳

士は領きていざ行かんと促がしたり予は心の内に夫人が斯く深切に言ひ呉るゝは良人より予への贈物を命ぜられたるならんと思ひ本町通りに出て名高き呉服店にて服を注文し靴は或店にて上等のものを買取れり出發の用意略整ひし頃予が注文の服も出來上れり裁縫も申分なし「グリン」氏夫妻に厚く禮を述べ洋服の着心地よしと思しは之ヶ始てなり予が華盛頓に着せしより一週間を経て「グリン」氏は嘗て「サンダース」氏より氏に送りたる手紙を新聞紙にて世に公にせり其手紙には予の來歴を詳しく記しありしかば之にて先づ府民の注意を惹き後に新大統領に謁見のこゝを取計らはんとしたり此手紙一と度新聞に載せられて好事は大都の風習或は晚餐に或は夜會に予を見んことの一日も遅きを悔み予の華盛頓府の流行兒となれり十一月廿五日「グリン」氏は予を伴ひ馬車を驅て國務省に到り國務卿「カッス」氏大輔兼書記官長「ウィリアム、ハンター」氏に予を紹介し其より大統領官邸に到り大統領「デキヤナン」氏に謁見すれば氏は親しく握手の禮をなせり「グリン」氏は來意を述べ予を國務省にて雇はん事を請ひ予にして此國の政體を知りなば早晚歸國すべき

日本と此國との和親上にも利益尠からざるべしとの旨を演説すれば大統領も頷きて「予も素より同感なりされども國務省にも空位のあからんを恐るゝのみ予が就任より數ヶ月を経たれば書記に至るまで皆塞り居らんされども卿自ら國務省に就て空位の有無を問合されよ若し有らば直ちに任命して差支なしと言へば」グ・井ン氏は閣下の仰までもなく前刻國務省に参り相談致したれど空位なしとのことなりしかば無據閣下に直に願ふなり何卒出格の恩命にて特別の地位を與へんことを望むと請へば大統領はさりとは力なし人の爲には官は作れず次期の國會開けなば又相當の地位も得らるべしと言ひ放てば「グ・井ン」氏も言ひ争はん語なくして止みぬ予は問答の間大統領の風采を見るに黒羅紗のフロツクコート優に着流し小首傾けて應接する態度迫らず年古稀を越へたりと聞けども氣色壯者に異ならず當り難き威ありて而も温顔なる風采あり

十二月國會は開けぬ予が役付の事議に上らず沙汰止みとなりしものゝ如く予は翌年千八百五十八年二月までは「グ・井ン」氏方に止まれり其間彼處の夜會此處の晩餐に招かれて知己朋友を得たる中ハ海軍大尉「ジョン・エム・ブルーク」氏は殊も親し

く交はれり氏は支那日本の海岸を巡航し太平洋中暗礁の所在を確めんを企て専ら奔走中なりしが若し此企成りて遠洋航海を爲すことゝならば其船に備入れ日本に歸着し得る様計ふべしと約したり

此企圖も拙々しく行かずさりとて「グ・井ン」氏方にて毎日諸方より來る手紙の始末をなし或は返書の代筆に日を送り得ることとてハ皆無あれば予は一日「グ・井ン」氏に國務省に備入の事も沙汰止みとなり政府も或位置を與ふべくもあらねば兎も角も暇給はれど切出せば氏は卿カリホルニアに往んとなら還し遣らんといいひければ予は「ブルーク」大尉の約束もあればカリホルニアに歸るは得策にあらざと思ひホルチモニアには知己朋友もあれば先づホルチモニアに送り給はれど請へば氏は頷き然らば紹介狀を書ければ其地の税關長の許に持往くべし一時雇には使ひ與るゝべしとて左の手紙を與へたり

拜啓愚札持參參堂仕候少年儀は日本人にて小生が政府の雇と爲さんためカリホルニア州より連れ來り候者に御座候然るに今日まで政府部内に適當の空位なく荏苒日子を費し候も不都合に付御地には朋友も有之候由申候間一先貴地

へ遣し候若年には候得共敏捷にして勤勉致し殊に正直なることは拙者の保證致す所に候貴關に於て御雇ひ被下候は、萬幸不過之候敬具

千八百五十八年二月十五日 元老院に於て ウイルアム、エム、グ井ン

バルチモア税關長シエー、チー、マシヨル閣下

「グ井ン」氏は此書狀を予に渡せしかばカリホルニア州までの旅費を給すならんと待てども其氣色なし予へ彼に之を請求せしに彼は左の計算書を出し旅費とては與へず後に聞けば予のカリホルニアよ歸らば其旅費は彼の懐を痛めざりし故にカリホルニアに往かんを問ひしなりと

一金百五十弗 九月五日より翌年二月迄の給金(一ヶ月卅弗の割)

内 金五十五弗 臨時正金渡

殘金 九十五弗

此書付と共に前年紐育にて調へたる服代七十五弗の受取書を出し此の内より引去りて精算したりとて二十弗を渡されたり
氏は豪富の聞へありて南部諸州には數多の田地を所有し使役する奴隷も數多あり

り都にても或は夜會或は晚餐會を催して交際場裏の立物たるにも似ず哀れ便りなき異郷の少年を遇するに薄く言はゞカリホルニアにて好位置にありし子を程遠き都まで伴ひ來り約せしとも整はず去るに臨みて旅費を給せず給金の精算に好んで調へ呉れしと思ひし服代を差引き勘定とはさても惜しろふな二十弗の貨幣手離の悪るさ！

第十七回

ろもバルチモア市は華盛頓を距る四十英里バタプスマ河の北岸にあり丘陵相連る間に市街を建て前には屈曲せる港を擁し高塔紀念碑の樹林を縫ひて聳ゆる景色得もいはれず市區端正に於て家の構造は一般に華奢を厭ひて堅牢を旨としさりとして富める人の家又は公の建物は格別にて結構をさし、大都の豪華に劣らぬもありて合衆國第一と稱せらるゝ紀念碑の建てるよりバルチモアを呼んで「紀念碑の市」と稱す人氣も甚だ穩和にして義侠心に富み外國人に親切なるは他州に其比を見ず當時人口十七萬ありて合衆國中第三の密度を有せり
却説予は此市に到着し直に税關長を訪ひ「グ井ン」氏よりの紹介狀を示せば彼讀終

り氣の毒顔に今税關には空位なき故予の許にては雇ひ難しといふ予は一禮し、さよならの一語を残して立去れり元老議官「グリン」氏の紹介狀に三文の價値なし予は其より「サンダー」氏の本邸に尋ね行き草靴を脱ぎぬ五月雨降り初し頃「サンダー」氏はカリホルニアに於る商店の殘務整へ終りて歸り來り予が出迎ふるを見て大に喜び一別以來の寒暄を述べ「グリン」氏方より此に來りし一伍一什を物語れば氏は苦笑しさることもありしならん彼も政治屋の一人なり約束をして履行せざるは今日政治に遊食するもの、常なり口のみは伶俐にして心は紙の如く薄し頼みしは此方の不覺なり我家に來りし上は大船に乗りし心地にて心置なく卿の家とも思へかしと懇ろに説出す何時も變らぬ氏の親切便りなき身の一人に肝に銘じて禮も出遅れて戸迷しぬ拾ふ神鳴呼予は又一人の慈父を得たり斯て人々の厚き情誼に慰められて今日を暮し明日と明け徒らに月日を過す内「グリン」氏より受取し金も残り少なくなりて今は二弗の貨幣を餘すのみ寄宿料は拂はずも身の廻りさては日々の雜費は自辨すべきに唯二弗にては何とせん「サンダー」氏も一夜危き商家の常とはいへ今は疇昔に引替へて哀れ果敢なき失敗商其

不運に遭ひながら變らぬは義侠心名利に走る世の中に類は絶へて嵐ふく八重の夕路に舵を絶へ辛き憂世を啣ちながら予を愛しみ優しくせらるゝに何とて此上に尙具助力を請はるべきされば知人の限り書を寄せて奉公口を頼めども去年の商界恐慌の影響にや其口もなく思ひ惱めど詮様なし斯く思ひ沈みては物憂き月日を重ぬる内或朝一通の郵書來れり差出人は「チー」氏「キエリ」氏ホストンよりの來狀なりマコンドレー會社の「キエリ」氏の父君ありと名は知れども一度も逢ひしことなければ何事の書中にあらんと封押切りて覺束なくも讀下せば嘗て予が主人と仰ぎし若主人は今商用にて支那より遠く其親父に書を寄せて予が起居を問ひ來り若し資本を要しなば其資産中より給與あらまほしと言ひ越せりと認めて尙先方より日本書籍一包を予が許に送り届け給はれと言ひ來れり其方へ送るべきやとの旨を記せり予は讀み終り押戴き有難き人の情義に喜び餘りて茫然たり此時の予が心の中如何に嬉しかりけん主従の縁薄くして勤めし間とては僅なるを心に掛けて遠く問合せ加之書物を贈り資力を貸さんと言ひ來れる厚き情は忘れがたき親切なり嗚呼神は予を捨給はず思へ

ば恐し予は多幸の人なりしよ

予は時を移さず返書認め先づ厚く禮を述べ書籍は當地へ送り給はれ資本の恩借は他日必要の砌り願ひ出で御厚情を拜すべき旨言ひ送れば老主人は其後數日書籍を贈りて又も様々に慰め來れる親切心書外に溢れて芳ばしき人の情の花なりけり

此日より予は稍心勇みて五月雨の鬱陶敷も氣にせずして過ぬる内六月一日となり此日海軍大尉「ブルーク」氏より飛書ありて支那日本近海測量の爲め愈近日發途すべきに定まりたれば兼ての約束の如く遠航艦の書記に雇ひて本國に送り届くるやう周旋すべしとの文面なり之に接したる予が驚喜を寫し出す筆欲し今は唯情に富める讀者の推諒に任せんのみ

斯て旅裝を調へ且つは支拂ひを要する者ありしかば「キエリ」氏の許に手紙を出し愈歸國の運びに至りし事由を記し今迄の禮をも述べ兼ての御言葉に甘へるにはあらざれども此上の御親切に金貸し給はれと言送れば老紳士は快く承諾て速に銀行手形を送り越し尙不足ならば遠慮なく申來るべしなど書きたる筆の跡一

字一句も仇疎かに讀まれじ

「サンダース」氏は日本は今開國の物議騒然たる折柄なれば米國人となりて行く方得策ありとて歸化を勧めたれば予は之に従ひ合衆國地方裁判所に往きて判事「ギル」書記「スパイサー」の署名せる歸化認可狀を得て合衆國市民となれり

六月十六日「ブルーク」氏より書狀來り左の辭令書を封入せり

茲に海軍卿の命を奉じて船長付書記に任用す七月五日發の郵船にて紐育を経て桑港よ來るべし尙着港せば直ちに届け出らるべし此段進達候也

艦長合衆國海軍大尉

シエー、エム、ブルーク手記

マリーランド州バルチモニアニ於テ

シヨセフ、ヒコ貴下

之に添へて一通の私書ありて士官以下を率ひて六月廿日の船にて桑港に向ふよしを記し尙紐育税關に奉職する舍第に予が到着の折萬事世話致すべき旨依頼し置けりと詳かに告げ來れり漂着の日より一日も忘れ難き故郷播磨瀨の風光は其

夜より早や夢に入りぬ

第十八回

旅装整へ終りて出發の日に餘時あれば親しかりし友に暇乞ひせんと六月廿二日午前八時發の瀛車にてリーディング府に向ふハリスバラに着きしは正午なり乗替に二時間を待合す筈なれば是れ幸ひと市中見物と出掛けぬ此地都城を去ること百十英里サスクエハナ河の東岸に沿ひてペンシルベニア州の市府にして前に平原を隔てハツクストンの曲浦に連なれる高地に市街を開き州會議事堂より瞰めば丘陵起伏し巖石を嚼む急流其帶となれりサスクエハナ河に架する橋は其長さ一英里に達し有名なるカンパード鐵橋にも劣らじ流れは名に高き急流にて舟運なく筏のみは下るべし

市は本街左街右街の三條より成りて家屋は悉く遊園を繞らしアイオニック式の柱の列を揃へて建てられぬ市の中央に間口三十間奥行十三間高さ十一丈の大伽藍ありて四方は廣く樹木を植へ鐵柵を繞らして路を付けぬ銀行監獄會堂寺院の建築をぞ見るべきもの多し交通機關には鐵道運河四通して諸州の産物輻輳せり

市内はサスハナ河より上水を引き鐵管にて配水せり

古記に因れば此市は傳導師「ハリス」が創説にして土人なりし亞米利加印度人彼を捉へて燒殺せり爾後此市を名けてハリスホルグといふなりとぞ市民ハベンシルベニア訛りの獨逸語を話し容貌粗野我農家の小作人に相似たれど人氣温和にして正直勤勉なるもの多しとぞ

發車の時近づきぬ群がる人を押分けてリーディングまでの切符を購ひ能くも見ずして短衣の囊子に入れ乗車せり午後二時煙突の吐息荒く瀛車は進行を始めぬ市中巡覽に疲れたるにや睡氣催して夢はいつしか華胥に入りぬ車掌の來りて切符拜見したしと呼ぶ聲に驚き覺め囊子搔探りて切符差出すを車掌は打見遣りて次の車に往けといふ予は訝しく思ひ弁は何故次の車は透き居るやと問へば其切符にては此車には乗られずと不愛想なる返答予は初めて此線路には上中下等の別あるを知りしかば面を和らげ内地の旅に馴れぬ者の此線路も幹線と同じく等級の區別なしと思違へたるなれば賃金の相違せる額は直にも償ふべし枉げて此處に居らしめよと求むれば車掌は頭を左右に掉り今更にさる取計らひはなし難し

速に次の車に移るべしと懸なる挨拶予が誤解より出しこととて論争せんも流石にて言ふが儘に他車に移れば泥に塗れたる床の足踏込まんにも爪立にて腰掛の堅き板に臂の痠痺切らして何の事はなしリーディング迄運搬せらるゝとはなりぬ呆れて顔皺むれば車掌は尙も濫面造り卿の誤りなれば詮方なしとはさても小面憎さよ

午後二時發車四時半頃リーディングに着しぬ手荷物肩に掛け市街へと志し路傍に立る人に旅店を尋ぬれば應と答へて手荷物を取り荷ひマンションハウスといへる旅館に導きぬ予は若干の勞銀取らせ此旅館に一夜の名を留めぬ
浴み終れば今は空腹に耐へず食事を命ずれば館主は不審顔今日の食事は早や終りたり六時半の小食の時まで待給ひざるべからずといふに今更に驚きたれど此郷の習慣ならば是非なしと掻初めの旅の耻腹を抱へて千松が忠義を知りぬ
されど鄙に稀なる旅館の清潔館主の注意周到にて客待も親切なり食事を報する鐘の音に腹の虫雀躍して一先に食堂に入りぬ館主食卓の一端を占め番頭ハ下手に居直りて二十名の旅客席に就けば佳肴冷かかれど其味の美なるに舌鼓の音の

み高し給仕のものも禮を守り一座静肅は波打たらん様なり
腹膨みたれば煙草一服の後身仕度して「パンリード」氏を訪問せり翌日は晚餐の饗應に招かれ名所の案内なんと款待至らざるなし
市街は「ペン」氏の子孫の創設にして山と水との配合書よ書きたらんごとき間にあり道正しく家錯らず住む人も勤勉の性質に富みサルメホツケン江シユイルキル河の水力にて工業場の車音絶へず帽子製造盛にして他州へ出す年額も夥しくユニオン運河サスケエハナ河は船の往來頻繁にしてリーディング鐵道も貨物の列車絶ゆるなし官廳學校裁判所銀行取引所會堂まで宏壯を極め潺々たる泉流を市に引きて給水の配置巧なり

三日を此處に費して六月廿五日の朝厚き待遇を感謝して此地の親友と袂を分かちて發途して正午時フィラデルフィア府に着し一時發の瀛車にて「ニメンスピル」に往き舊識なりける元ボルク號船長「ウェプスタ」氏を訪へば氏は大に喜びて珍客待ひに遇され三日は暑短くして過ぎぬ盡きぬ名残を惜みて廿八日バルチモニアに向ひて見送られにき

七月に入りて出立の日は迫れり彼處此處より送別の爲め招かれたれど倉卒の際一々に應ずる能はず厚意を空ふせしも勢からずされども一々に回禮して告別の辭を述べて之を謝し三日の夜は愈發途と定まりたり其日午後「サンダース」氏は慈父が愛子の初旅を送るが如く懇ろに將來の必得を諭して後語を繼ぎ「予は卿に背く多し充分とは行かずとも一通りの教育は授けんものと思ひしに不測の失敗に遭ひて半途廢學の不幸を來せり予にして早く彼不運の來るを知らば大統領「ピエルス」に謁せし折彼の謀りし如くウエスト、ポイントに卿を送りて官立の學校に入るべかりしを其時は予の手許に置き私立の學校にて充分に教育し得べしと思ひ且つ其便宜なるを覺へ一かば大統領一切に乞ふて連歸りしなり今にして思へば面なき業なりし過にしことは悔とも及ばじ今は卿此國を去らんとす饋として贈るべきものなり僅に一書を載して卿を送らんとす瀛車に乗らむ開封すべし予の心事は其にて知らん

談話の内に四時半とあり發車の時刻に近づきたれば今はとて家族の人々に長く

世話になりし禮を述べて別を告れば皆名残を惜みて異口同音に予が航海の無事を祈る旨を語りて袂を分ち「サンダース」氏のみ停車場まで見送らんとて同乗し車中にて密封したる手紙を渡せり

瀛笛一聲五時を報ずる時計に和して煙突は煙を吐けり氏は熱心に予の手を採り「神よ此少年の前途に幸福多かれといへば予は父に別るゝの思ひありて悲しさに口重く僅に教養の恩を謝し其繁榮を祈りて瀛車の徐かなる半分時彼尙ほ上場に佇立して手を振りてありと見る内に彼の姿を見ずバルチモアは煙雨の中に隠れぬ

車中にて讀めどの手紙氣に掛りて封切る間も急かれて讀下せば

桑港に税關長たりし時巡邏艦長「ピース」氏の紹介にて初めて卿に逢ひしより茲に星霜を重ねる事五年半嗚呼なる申分ながら爾來卿を見ること子の如く教育も充分になさんものと思ふ折柄歐洲行となり思ふ程には届かず僅かにバルチモア市の學校に於て就學せしめ再び桑港に來りて引續き通學せしめしに測らざる商界の恐慌に脆くも資産を傾けて廢學せしめし時の心中人こそ知らね

斷腸の思ひに沈みて不覺の涙に袖ぬらせりされども卿が學び得たる所は卿の
 恰例の働きて商業上に用ゆる所あるべきあり卿がマコンドレー會社にあり
 し日短くして經驗を積みしこと少けれども同社にての卿の信用甚重かりしを
 見ても予が言の詐ならぬを知るを得べし
 「グリン」氏の言を輕信して會社の暇取らせしは予が淺慮今更に百度悔ゆとも及
 ぶなし這度「ブルーク」氏の盡力にて測量艦の書記として故國に向ふ今日の發途
 は予の最も喜ぶ所聞けば國會は日本國との通商條約案を議決せし由されれば日
 本は愈開國して交親國となり米國使節派遣とあらば卿が名譽の地位を得ん爲
 には予は周旋の勞を厭はざるなり
 卿と予と六年の長き一日の如く相親み今にして卿が終始謹直にして能く勵精
 人の信用厚かりし榮譽を思へば別るゝに忍びざれども又卿が榮達を思へば今
 日の離愁は何かあらん往け多望なる長少年卿の繁榮と幸福を期す望むらくハ
 自愛せよ

バルチモア市に於て

千八百五十八年七月二日

ヒバーリー、シー、サンダース

親愛なる

シヨセフ、ヒコ貴下

讀去り讀來れば赤心紙上に湧きて予は覺へず泣かんとせり嗚呼氏は至誠の人な
 りしよ此く迄に予を慰みしなり氏は厚情の人なりしよ此く迄に予を愛みしなり
 此至誠此厚情の人にして不測の災禍に遭ふ天何ぞ無情なる氏にして不幸倒産の
 こと無んば予も充分の教育受け名譽の地位に進まんことも期すべかりしを思へ
 ば悲し!!! 嗟へし巻煙草の灰冷かにして車窓を過る風景も物思ふ身には淋しげに
 見ゆ予は思ひ疲れて夢路迷りて居睡りぬ
 其翌早朝紐育に着しメトロポリタンホテルに投じ朝食を終りて直ちに税關に往
 きて「ブルーク」氏を訪へば氏は自ら出迎へて兄なる大尉よりの言ひ付もあり日々
 予の來着を待居たりと懇ろに挨拶し政府よりは旅費手當として三百弗を給され
 たれど桑港までの船賃上等は三百弗中等二百弗下等は百五十弗なり奈何にする
 やと尋れば予は中等にて往き餘る百弗を以て雜費に充んと言へば氏は領きて其

も去ることながら一應會社長に逢ひて事情を打明け中等の賃金にて上等に乗らるゝやう掛合ひ見んと言ふに予は「サンダース」氏より社長に宛たる書狀ありしを思ひ出し氏に示せば氏は其れ屈強なりとて其午後相携へて「ピー、エム、エス、エス」會社に赴き社長に面會し「サンダース」氏の書狀を渡せば社長は讀み終り「卿は桑港に向はるゝか瀛船賃は上等三百弗中等二百弗下等百五十弗なり」「ブルーク」氏は透さず予が事情を語り何卒社長に於て中等賃金にて上等に乗るゝやう御助力ありたしと求むれば社長は冷淡に御氣の毒にはあれど社の定めは是非なし誰人にもあれさることばなし難しと膠なき返答諄々いふとも口には風ひかす丈損と思ひ忽卒に別れを告げたり道すがら「ブルーク」氏は社長が己が勝手のよき時は屢之を許しながら今日の苦々しき返答心得ずと憤りたり

七月四日會堂の歸り道にて知友なる「セントジョン」氏に遇ひ其招きに任せて第五街なる氏ヶ北堂の家に到りぬ此街ハ貴紳の邸宅門を井べ四層樓豪華を競へり道幅も廣く人道は煉瓦敷詰め車道との境に柳植へて日避とせり紐育市の銀座街とやいはまじ

「セント、ジョン」氏の母堂の家も此中にあり予の到着を喜び氏の養父義妹と北堂は交互に予を慰め待遇疎かならず懸て美麗なる食堂に誘はれ山海の饗應を受たり五日出發の見込なりしに前日は日曜日なりしより此日に建國祝祭を行ふとて便船も出帆を六日に延ばせり予は一日の閑を得れば「ブルーク」氏とホテルにて會食し打連れて觀兵式を見物せり其夜は「セント、ジョン」氏の勸めに任せローラキン座に往き始めて滑稽演劇を見て散々に願を外されたり

六日は來れり「セント、ジョン」氏「ブルーク」氏共に予を送りてモセス、テーラー號に乗船せり甲板にて語ふ内マリ―ランド撰出國會議員代言士「メー」氏も訴訟用にて桑港に行くとして此に乗込み來れり兼て「サンダース」氏の紹介にて相識れる人なれば互に寒暄を述べ「ブルーク」氏等にも紹介し團座して語る内出帆の鐘鳴りたれば「ブルーク」氏「セント、ジョン」氏に別れを告ぬ予は「メー」氏と共に甲板を逍遙しつゝ話し居けるに船長は聲を掛け卿は「ヒコ」にあらすや折よくも予の船に乗込みしよ東部に在りと聞きしかど今此處にて相見んとハ思はざりし先づ船出して後徐々語らん暫く待ちねと言ひ棄て舳の方へ走り去れり船長は「マックゴウアン」と呼びて元ボ

ルク號にて「ハンター」氏に次きて艦長たりし人なり今は此船に長として紐育州の片田舎に土地を持ち豊かに日を送りぬ號令と共に船は棧橋を離れて精力を得たり「マックゴワン」氏は船長室にて其子息を予に紹介せたり年相似たる少年親むこと早く其卒業せし學校の有様を語り予が經歷の面白からんを聞せよと請ふ予はホルク號を去りより今日まで踏み來りし概畧を言語短く物語れば彼或は感じ或は悲しみ熱心に聞居たり其内に船長は主計を呼びて子息の船室の傍なる上等室を予が室と定めしめられたれば予は厚く謝して船室に退きたり聽て五時となりしかば會食せんに船長室まで來れといふ予は云々の事ありて中等の切符を得たるなれば去る食事に至るべきにあらずと辭めば船長は否とよ卿は中等の乗客なることは其切符を事務長が持來りしにて知れり卿は普通の船客ならず予が友にして今日は予が珍客なり兎角の心配無用にして予が船室に來るべしといふに辭み兼て從ひ行けば食卓の左側の上席に座せしめて貴紳と見ゆる夫婦客の向ひに置れたり此厚き待遇は上等客にも優りて紐育にて社長に冷遇されたる予が船長の友義に依りて海上も愉快にアスピンウォールに着したり

旅客は悉く上陸し「メー」氏と予のみは船長の室にて又も朝餐の饗應受け其より船長は親切にも予と共にバナマに往き桑港通ひの船長「ホーピー」氏に就て予が行路の世話を頼まんとて打連れ立ちて地峽鐵道に乗移れり
バナマには「エム、エス、エス」會社のソノラ號繋り居れり予等は挽船グワタマラ號にて時を移さず「ホーピー」氏を訪ひて「マックゴワン」氏は予を紹介しソノラ號にて桑港に向ふ者なれば萬事の世話を頼む旨申出れば「ホーピー」氏は快く承諾し一見舊識の如く予を慰れり嗟矣世に人鬼の無りけり寄る邊なき身の異郷にて受し情の嬉しきは言ひ現はさん言の葉もなし
斯て「マックゴワン」氏は告別して出れば「ホーピー」氏は予を主計に紹介し「メー」氏と予に快き船室を給し食事は主計の室にて上客扱ひにせられ此航海も又愉快に果しぬ

第二十回

七月廿九日桑港に着したれば「メー」ア島にある「ブルーク」大尉に其旨を言送りけるに艦裝整ハ、桑港に廻航し乗艦せしむべければ先づ其迄ハ其地にて相待べしと

の返書を得たり

予滯港中英船カリビアン號が十二人の日本遭難者を救助して着港せりと虎吉と「バンリード」氏は早くも來りて予と共に往きて遭難の有様を聞亂さんと促すに予も辭まじかりビアン號に行きて彼等に逢ひ遭難の模様救助の手續などを詳に聞きて米政府の助を藉りて日本に送り歸さんものと周旋したれど許されずカリビアン號は再び彼等を載せて香港に向ひ總て英船の助けを得て本國に歸りしとぞ九月廿日「ブルーク」氏より測量艦「フェンニモア」號は一兩日中にメーア島軍港を抜錨して桑港に向ふべければ乗艦の用意あるべしと申越され廿二日に同艦着港したれば予は時を移さず乗組の一員となりぬ

測量艦は元紐育港の水先船なりしを數年前政府にて買上げ旗艦の付屬船として提督「リントンゴールド」の麾下にありて東洋に航し歸航の後メーア島軍港に繋かれしを此度測量艦とはなしけるなりスクーナル形にして九十六噸の小艦なれど測量機械は悉く据付け二十一のクロノミートルを具へ彈藥食料飲料水に至る迄船足深くなるまで搭載せり乗組定員は艦長大尉書匠艦長筆記よ水夫厨夫役僕にて

十七人總て四十二本の手は艦中にて働けり

九月廿六日船嘴接木に少許の損所ありたればメーア島に立寄りて之を修繕し午前十時解纜し午後四時金門を過ぎて水先に離れ洋中へ走り出れば折柄南西の風強く怒濤天を衝き船を手玉に取て疾跳甚しく事に馴れし艦員も數日は酔へるが如し

十月一日信天翁一羽を捕へたれば艦長は錫の板に經度百三十度八分緯度三十度五十分と印して其首に結び付け翌朝放し遣りたり三日に至りて風は凧たれども空尙曇りて浪高し船を風に立たせ「ブルーク」氏が見習士官たりし頃發明せし測量機にて大平洋の初測に着手せり午前九時機械を投ぜしに十時十五分に至るも海底に達せし手心なし此時は既に二千六百尋の綱を送れり初の二百ヤード許は強速力にて沈みしが綱の重さの妨げしにや其後は徐かに降り行きぬ海底に達せしとも見へねば十一時十五分手繰り始め二三百ヤードも牽上げしと思ふ頃拉張強き爲め索は捲車を離れて第一測量は徒勞に屬せり
正午時復も索を入れしに一時間を經て海底に達せしと覺へしかば直ちに繰上に

掛り三時間半を費して重測鉛は上り来れり大平洋海底の土質標本を得たるは開
 闢以來初めてあり索の長さ二千八百匁を出しぬ
 標本の土質は輕黄を帯びたる砂色の粘土にして美しき柔面質分子より成れり顯
 微鏡下に置けば碎かれたる陶器質に似たり
 測量の間折々北西より東南に向ひ其長さ二百乃至五百ヤードの大浪十五分毎に
 襲ひ来りて船を動搖せり艦長は其高度を測れば二十乃至二十二フートなり嘗て
 知られたる最高の浪なりと稱しき

十月八日までは風に任して走り此日風を得たれば午後五時測量に掛り六時十二
 分測鉛海底に達し八時三十分線上げたる測機の脂肪には前と同じ粘土付着し來
 れり深さは千九百匁を數へぬ翌朝も復二千二百尋の海底より同種の粘土を得た
 り艦長は端艇を卸さしめ自ら玻璃にて作れる機械を携へて乗り移り本艦より六
 百ヤードを距て、海水の音響傳速力を測りたり
 十月廿一日第四回の測量をなす此度は二尺半の玻璃管を鐵棒の一端に取着けて
 海底の水を採り比重を測りしに海面の水の比重と異ならざるを見たり

十一月六日にはサンドウィッチ群島中のマライ島を見九日にホノル、港に着船
 せり日を費すこと四十三日其間幾度か止まりて測量し桑港より布哇に到る大平
 洋の中央は陸地附近に比すれば却て淺きを發見せり

測量艦ダイアモンド鼻を廻る頃一艘の蒸氣船來り我艦を挽きて入港せり錨を
 入るゝ間もなく布哇王國檢事總長「ベーツ」氏新聞記者「デンマン」氏英佛の海軍士官
 相踵て訪問し皆無事の着港を祝し桑港を發したる報知を得てより四十三日安否
 を審にせざるため遭難せしにあらざやと危み居たりといふ「ブルーク」氏は一々挨拶
 して早速なる訪問を謝しぬ

檢事總長「ベーツ」氏は碇泊中其邸に滞在せずやといふ予は此招きに應じぬ
 今日十一月廿日となりぬ朝餉終りて市街を散歩し其より艦に歸りて有りしこ
 と々も物語るに艦長は鯨船が救助したる日本人此港にありと聞く郷往き見ずや
 といふ端艇を卸して尋ねゆきしは帆船ホボマツク號なり逢ひて様子聞けば助け
 られしは二年以前尾州と江戸の間に通ふ船に尾州生れのもの五人水夫楫取とな
 りて航海中暴風を食ひて吹流され數ヶ月か程は波のまにまに漂ひけるを鯨漁船

チャールレス、フイリツピ號に救はれて間もなく此ホホマツク號に出遭ひ人手少な
ければとて兩人は其雇となり此地に来れるなりと語る船中の待遇はと問へば船
長事務長を始め水夫に至るまで珍しき親切卿も序々禮いふて給はれといふに予
は卿達の故郷へ歸りたくいなきかと問へば宣ふまでもなし歸る方便あらば教へ
給へど一向に乞ふも憐なり

予は再び上陸し「ベーツ」氏に諮れば日本箱館最寄まで遠航する船長に舊識あれば
問合し見んとて翌日ハゲデアン號と呼ぶ船を訪ひ船長に日本人貳名箱館まで送
り届けんこと承諾を得て來りしかば予は「ベーツ」氏を導きて再びホホマツク號
に到り船長に日本人解雇のことを申出しに船長は兼て彼の日本人は能く働き呉
るれば一層の憐みを催し遠航の折末らは箱館に送り遣らんと思ひしにゲデア
ン號が連れ行かんは好き都合なり彼等も喜び申さんど快き承諾予等は厚く其厚意
を謝し二人を伴ひて上陸し航海中の食糧にと米何俵かを購ひ二人のものをゲデア
ン號に送りたり

其後數日を経て復も一人の日本人鯨船の救助を得て此港に來れり予は此報に接

し直ちに往き見たるに彼は淡路の者にて三人にて紀州へ向ふて乗出しける途中
舵を損し進退自由を失ひて沖へ〜と吹流され糧盡きて二人は斃れ己れも既に
精盡きて幽明の境に彷徨ひしを鯨船に救はれしと語りつゝも予が常服の金鈕子
と帽子に纏ひたる金線は甚く彼を恐れしめしにや日本語にて親しく問ふに彼忽
ち跪きて尊敬一方ならず予も卿と運命を同くするものにして今米國政府の船に
て日本に歸らんとするものなりさのみ敬ひなせ先づ立ち給へといへば彼之
に勇氣を得て伴はれんことを望みしかば兎も角も論り見んとて別れクーパー號
に歸り來て「ブルーク」氏に事云々と物語れば伴ひ來りて苦しからずといふに予は
時を移さず鯨船に往き其船長に由を告げて暫くの暇を乞ひ伴ひ來れば「ブルーク」
氏は面會して下炊きとして月十二弗にて乗組ませ日本に送り遣らんとし予は
之を通辨して彼に語れば龍の題の玉得たらんばかりに喜びけり
再び打連れて鯨船に往き永き暇を船長に乞へば船長は快く承諾し「チム」鯨船の水
夫々彼に與へし名なり政吉といひしものなりしが後阿州侯より帶刀を許され天
毛政吉の名字を賜はりたりは從順にして能く働き船員水夫にも甚く愛せられ居

り己れも不便と思ひしかば望に依りては米國に歸りし時教育をも授けんと思ひ居たれど今の談話にては米國に往くことは望むまじ然も得難き機會なれば故國へ歸る方宜しからんなど親切に語る厚く禮を述べて「テム」は翌日よりクーパー號の見習水夫となり千八百五十九年に無事に横濱に着せしとぞ

第廿一回

ホノル、府滞在中下院議員ハスキル氏に譲られ十二月の開期中其紹介にて下院の傍聴に赴きぬ上下兩院并びて一棟の家に開かる議事は總て邦語にて議せらるれど法律勅令の公布は英語を式語とせり下院議員の半數ハ布哇國人とし他の半數は歸化に由て被撰權を得たる歐洲其他の外國人なり上院は此國の貴族と國務大臣其議席を充しぬ

十二月廿九日再び海圖指定の淺洲暗礁を探らんため解纜す沖へ出てより予は吐瀉を催し數日は船室より出も遣らず呻吟せり一ヶ月餘洋中を探り廻りし内二回までも颶風に遭ひ疾風に襲はれしこと幾回なるを知らざりしが物馴れたる艦長の巧なる運轉にて損所一ツなく千八百五十九年二月五日ホノル、港に歸航せり

予は待兼しといへばへに上陸しソエケケと呼べる處まで馬を驅り歸途に米國領事館を訪ひ日本の事載せたる新聞やあると數種の新聞紙請ふて歸艦し閱讀するに渴望せし日米間の通商條約締結されて三箇所の新貿易港は此七月より開かるべしと記載せり予は今更の如く驚喜せり天下晴れて故郷の地は踏むべくなりぬ二月九日は布哇國王カメアメア三世の誕辰節とて港内の船舶は旗飾を爲し正午には碇泊軍艦より打出す廿一發の祝砲砲臺より百一發相和して轟き渡り勇ましきこと限りなし陸には男女金巾の服を着け皆馬に跨りて市中を練り行くさま花やかなり

其後間もなくクーパー號は復も其航路に向ふこととなりぬ予は船量に心結ばれて氣進まず殊に日本開港の事を聞きては一日も早く歸りたしと思ひ出ては心短くクーパー號は今より馬尼刺に往き香港近海を探り琉球に出で其より日本に着するなれば日數積らねば故郷へは到るべからず一層クーパー號を辭し香港若くは箱館を経て直航の船にて行かんには如かぞ開港の上は軍艦にて行かずともよしと思ひしかば「ブルーク」氏へ意中を告げて其許を請ふに氏も船體の小にして予

か甚く量ふを憫みけん香港或は箱館を経て直航の船あらは便宜に従ひて往くも
苦しからず香港を経て往かんとならば幸ひ支那にある東洋艦隊の傳令使に消息し
て卿のため悪からぬ様取計はしめんと飽まで親切なる言葉難言こねる子に甘き
菓子取らすが如し

懐郷の念に驅られて斯くは言ひ出たるものゝさりとて艦中の人々の多からぬ親
切に別るゝも心弱くして厭なり囊中も豊あらず充分の節儉をなし船待せんにも
便風なくば如何にせん一心の緒も右を思ひ左を考へては掻き亂れよき分別も出
ず思案に餘りて困じたれば布哇駐在なる「エフ、ハンクス」氏の親切を見込みて相談
に及べは船待つ間其家に止まらんやといふ嬉しき問ひに予は心定まりて「ブル
ク」氏に宛て永き親切を謝し辭職の事を願ひければ氏は快く諾して左の返書を
さへ送りぬ

卿が健康を思ひ其永く小艦の航海に堪へざるを察し茲に卿が辭任を聽許す予
は安穩に日本に伴ひ政府派遣の軍艦の名を以て容易に卿が郷里に送らんこと
を期したれど今日日本の局面變じ開港の事ありしと聞く上は最早卿一人にて

往くも氣遣ふべきにあらす否寧ろ數年前支那より卿に先立ちて歸國せし遭難
者に比すれば事渉り易からんと信ず
聞く足下既に鯨船「ミリシア」號に搭じ箱館に到るの準備整ひたりと航路は却て
平穩なるべし「クーパー」號日本に着するの日再び相見ることとを期せん
別に臨んで卿が誠實なる勤務を謝し其間卿が健氣なる舉止を稱し將來卿を用
ひんとするものに推薦し充分目を掛けて使はんことを求むるなり殊に卿が如
き萬里の異郷に永く辛苦して成行きを案じつゝ歸國の航路中終始渝らざる勤
勉は予の最も満足する所にして又敬する所なり
予は卿が恙なく郷に歸り家眷に逢はんことを望むや切なり卿にして予の助力
を要せば何時たりとも予が力の及ばん限りは盡さんと欲す卿幸ひに諒せよ

布哇國「ホノル」港碇泊「フエンモア、クーパー」號艦長

千八百五十九年三月八日 合衆國海軍大尉「ジョン、エム、ブルーク」手記

合衆國軍艦「フエンニモア、クーパー」號

艦長筆記「ジョセフ、ヒコ殿」

クーパー號が出帆してより一週間を経てメリシア號は北洋遠航の途に上らんとす予は其船長に就て乗船のことを申込み箱館まで送らんことを請へり然るにメリシア號出帆に先立ち快船シーサーメント號ホアイトモア氏を船長として桑港より香港に向ふ途次此港に寄泊せり乗客の中に兼て親しきイー、エム、ヴァンリド氏乗込みて支那を経て日本へ行くべければ幸ひに同船したしといふ予も固より望む所とて一先づハンクス氏に相談せしに氏は屈強のことなりホアイトモア氏は相識なれば船賃なども取定め得せんと告ぐ予が囊中僅に百二十弗を剩すのみ其にて事足るべきやと問へば氏は其にてよし兎も角も己れに委せよとて別れしが翌日氏は上等券を持來りて出帆に間もなし之れ持ちて早く乗船せよといふに予は其價拂はんとしけるを氏は堅く止めて其心配無用なり親しく船長に掛合ひて萬事済みたりといふ此上辭まも無禮と深く其厚意を謝し端舟に乗り移りシーサーメント號に往きぬ

三月十二日出帆し二十三日を費して四月七日午前零時三十分香港に投錨しぬ昇る朝日は檣の林を離れて霧晴れ渡れば港も町も七年以前に見しよりは幾層の繁

華を増しぬ

旅客の内クラーク氏、バンリード氏、ジョーシ、グラバー氏と予の四人に碇泊中は船せられよと船長の求めに皆之に應じたり

兼てホノル、府の「ベーツ」氏より紹介狀を添へられたれば予は此朝上陸して香港駐在合衆國海軍倉庫委員「スピーテン」氏を訪ひしに親しく面會して四方山の話の末香港に滞在中は其家に寄寓しては如何んと懇切ある尋ねに予は其厚意は辱なけれども今は斯々の有様に於てサーメント號に宿泊すればといふ這度印度より水師提督「タットナル」氏々支那駐劄公使を伴ひて當港に來る管其より提督は北洋に航すべきこととなり居れば其便宜に因りて卿が歸國の願ひも成就すべし兎も角も心置きなく予が家に滞留して其來港を待つべしと勧められ辭むべくもあらずさりとして「バンリード」氏の思惑如何と心一ツに決し兼て重ねての來訪を期して袂を分ちぬ

四月十七日船長「ホアイトモア」氏に伴はれて廣東に往きしに七年以前サスケエハナ號にて別れし同じ遭難者の一人なる岩吉此地にありて英國領事「オルコツク」

氏方に寓せるに邂逅しぬ同郷羈旅の孤客相見て舊時を懐へば今昔の感轉多し彼一語我一語先づ問ふは現時の境遇這度日本開國して「オルコック」氏は日本駐在英國總領事を命ぜられたるを幸ひ従ひて歸朝することをお約束せりと告ぐ予も別後の運命要を摘んで物語り再會を期して袂を分ちぬ

予の香港に歸りし日より二週間を経て岩吉は着港し予を訪ひ直ちに「オルコック」氏を訪はんといふに任せ同行しぬ彼先づ領事の通辯「アルウィン」氏に紹介せり氏は蘭語を能くせしかば日本へ伴はるゝなり其より「オルコック」氏の官房に誘はれて紹介されたり領事は懇ろに予を導きて座に就かしめ種々の談話の後通辯として領事館に備はれ呉れまじきやとの懇談受けたれど七年の長日月を米國政府と其人民の情義にて過し這度の歸國も其親切にてなし得るを無下に之れを擲ちて英國領事の雇ひとならんは徳義心ある者のなさざる所加之岩吉が領事と土従の關係あるを其職を奪はんことは快からぬ業なり兎ても角ても身に羈束なくして歸國し先づ合衆國公使に見えて新國交上の不便を除き通辯なりともなさば一には故國の爲め一には今日までの厚誼に報ゆるを得んと思ひ定めて丁寧之れを辭

しぬ

却説も「スメイデン」氏は其後も屢書を寄せて來寓せん事を求めければ其厚意黙止難く船長其他の人々に由を告げ受け愛顧を謝して出帆に先つこと二日五月六日といふ日別れを告げて上陸し「スメイデン」氏の家に投ぜり氏が父なりし人「嘉永の初年」メルリ提督の艦隊主計長となりて日本に來りしとぞ

第二十二回

五月十日の朝霧を破る砲聲は旗艦「ポーハタン」號の入港して各國軍艦と相祝するにてありき「スメイデン」氏は時を移さず訪問にとて出往きしが二時間を経て歸り來り支那駐在合衆國公使「ワード」氏も公使館員と共に乗艦し居る旨を語れり午後同行して同艦に到りて「ブルック」大尉の手書を提督に呈せしに親しく讀み終り丁寧に告るやう承知の如く支那派遣の公使と館員を載せて空室とては一ツもなく酒風症にて健康ならぬ己れさへ船室を明渡す始末なれば今はしも詮方なし加之本艦は日本への廻航せざれば足下を送らんにも便を思ひ悪しくな思ひそと言ひつゝ復語を續ぎされと急がずは尙一の便宜あり這度全權公使「ハリス」氏日本駐劄を

命ぜられたれば早晚予の率ゆる艦隊中より一艘の軍艦を装ひ公使を送る筈にて公使は今上海にありと聞くスベイデン氏は士官室の士官に就きヒコ氏の爲めに乗艦の出来る様掛合ひ給へさすれば上海まで伴ひ公使と同行して歸國することを得べしと論るに「スベイデン」氏は一語に及ばず予を誘ひて士官室に導きたり此所よは士官五人軍醫三人提督秘書機關長の人々控へ居りしが予を見るや席を與へて快く談話せり艦で先任士官は口を開き幸ひに這度一艘の蒸氣船を本艦附屬として雇入るゝことゝし士官一人其指揮の爲め乗組ますれば船室に空間出来たり开を卿に與ふべしといふ予が此時の喜び涙出んばかりにて最早故郷を目前に見る心地せられ今は七年一日の如く待付け一歸國の望は確と極りぬ

其十七日予はボハタン號に乗艦す大尉「センム」氏は附屬漁船トヤワン號の指揮を命ぜられて退艦せる其船室を給せられ待遇殊に厚し翌日解纜し寧波を経て上海に投錨せしは廿七日なり碇泊せる軍艦ミスシツピー號は挨拶の爲め士官を送り來りぬ

二十九日予は士官に伴はれてミスシツピー號の士官に紹介せられ一には公使に

謁せんため訪問しぬ艦長「ニコルソン」氏初め乗組士官は喜んで予を引見し日本に廻航の時には必ず伴はんと諾したり

公使も打解けて渡米の由來を問はれたれば予は要を摘んで演説す公使は歸化證書を一見したし且つ日本到着の節は何かに付けて入用あれば抄一枚取りて手元に差出すべしと求めたれば予は一々其命を領しぬ

次にカリホルニヤ州の人「イー、エム、ドル」氏に紹介されぬ氏は横濱開港の日同港駐在の領事たるべき旨公使より命ぜられ居りし折柄なれば予を見ると均しく領事館通事たらんとを懇ろに依頼されぬ兼ての志願なれば公使に一應の相談をなして快く承引すれば氏は甚く喜びて直ちに合衆國政府の官吏を以て予を稱しぬ

艦長は都合次第乗艦せよとの嬉しき挨拶士官は公室にて會食せんと誘ふ予は望悉く足りて唯出帆を待ばかり多望なる孤客復北行の鴻雁を羨まず澹泊なる少年の眼界を遮る雲霧漸く晴れて漂茫たる日本海も一葦帯水の思ひあり

今日は公使の命ぜし如く歸化證書と其抄を携へてミスシツピー號に往きぬ公使は披見して神奈川に着しなば其地の奉行に之を示し尙江戸に到りなば公使の役人

へ差出して足下の米國に歸化し最早日本人ならぬことを證すべしと告げぬ
 午後にはエー、ハー、ド會社に滞在せる「ドル」氏を訪ひたり氏は予の來訪を喜伏幸ひ
 の折柄なれば通事の俸給をも定め出發の準備をも整へんとて頗る満足なる條件
 を與へて諸事を取極めぬ
 暇を告げて立出でつアト會社の手代を勤むるものに日本人あるを聞きしかば
 其許へ行きぬ元尾州の人にして予が遭難に先だつこと十餘年之も亦水難に遭ひ
 しを英國商人に救はれて一旦其船にて日本に近きたるよ折しも攘夷論の囂しき
 頃なれば外國船と見るよりも發砲す上陸は思ひも寄らず詮方無くして再び上海
 に取て返し宣教師の手に助けられて教育を受け今は此居留地にて名を「ラットサ
 ント」と呼ばれ(本名音吉相當の地位を得たるなり交互に語る羈旅の情懷舊の涙に
 時の移るを知らず良やりて予は這度歸國の便宜を得て不日出發のことを語れば
 「ラットサン」氏は且つ喜こび且つ祝しざるにても七年以前卿とコンシンムーンに
 て別れし十三人の遭難者は豫期の如く「ペルリ」提督に從ひて日本に着したれど浦
 賀にて検査の節役人に遇はゞ辛き目見んと思ひける甚く恐れて提督が百方説諭

するも甲板に出ず提督も止むことを得ず復も上海に連戻りしを予も同郷の好誼
 黙し難く暫く予ヶ家に養ひ置き此地の支那官廳に請ひて船を仕立て長崎まで送
 りたりといふ予は始めて此顛末を聞知りて事の意外なりしに驚きぬ
 六月十五日ミスシツピー號は吳菘を發し十七日の夜長崎港口に到り明るを待て入
 港せり投錨すると同時に和船にて税關の役人三人來りて何處よりの船なりや用
 務は如何にとの尋ねに當直士官は一々に之に答へしかば手帳に控へて立去れり
 引違へて碇泊英國軍艦サンブソン號魯西亞軍艦等より各士官の來訪ありて着港
 の挨拶式の如し
 満目の光景は故山の形容昔見しに異ならねども之に對する今の我身は變轉して
 將に開けんとする新天地の住人ならず故園の情は忘れ難し更に愛すべき風景に
 對して幾層の感深く獨り思ひに沈む折柄船に骨董漆器陶器盆裁果實其他の食料
 を載せて本艦に漕付けて買はんことを求むるを見ては我舌は自由を得て今や彼
 等に話し掛んとしたるに艦長「ニコルソン」氏堅く止めて公使は江戸まで急行する
 を要す今此地にて足下の事の奉行に聞へて交渉など起らば「ハリス」公使とても米

國人なる足下の保護の爲めに黙すること成り難し思はぬ事に手間取る事の起らんも知れざれば努々此地の人と言葉交す可らず上陸もなさざる方然るべしと諫むるに詮方なく四面に聞ゆる邦語の談笑敵地にあらぬ楚歌の聲擔ならぬ我身人知れず腹膨れぬされば物賣りにと来る邦人も誰とて予が日本語を談すことを知らず否予が元同國人たるを知るものなし入港れ爲め雇はれし此長崎港の水先さへ見知らずして出で去りぬされども噎ならぬ我身邦語の珍らしきに耳は殊更に鋭敏に成ぬ甲板に来る土地の者集りて噂高しとて語るを聞けば此頃一人の佛人デント會社の所有船に乗りて此港に来り一人の日本少女を船室に隠匿し地役人の目を竊みて上海へ連行きたり奉行も略ぼ之を偵知し其船が出帆すると間もなく其少女の兩親を召捕り入半を命じデント會社に對しては解理人の手を経て談判に及びたり會社は佛人に諭して少女を送り歸さしめたれど彼れ事に托して奉行の方へも又兩親の許へも其少女を差出さずとて今も尙閑着中なり其成行は如何の者にやなと語りしが翌日も亦其噂さなり予は耳を澄して聽けば彼の少女は漸く奉行所へ渡されて一應

吟味の上入半の身となり其父母は直ちに構ひをしとて解放されぬ事を可恐と話し合へり十八日より石炭を積初めぬ十九日サンブソン號は英國領事「オルコツク」氏を乗せて神奈川に向ひ出帆せり二十一日は雨なりしかども石炭の積込みに忙はし其夕まぐれ水兵と日本人と鬭争し日本人は甚く傷けられたりとの報に接せしかば當直士官は時を移さず臨場せしに一人の日本人甲板に倒れて呻きつゝ土地の役人ならんと見ゆる士に訴つゝあり士官は傍に立ちし水兵に何事の起りしにやと問へば水兵は「己れ番兵として輪箱に立しに甲板に酒壺を持ちて来る水夫を認めたれば他處より斯る物を携へ來りしやと糺せば石炭船の輕夫より買取れりと答ふ其輕夫を指し示せと言へば水夫は此日本人なりといふ己れは直ちに之を捉へて貴官の許へ引致せんとせしに抵抗して従はざれば是非に及ばず蹴りしに吼面膨らして噪ぎしより斯くは日本役人は通事を伴ひ馳付たるなり其事の外は候はずと告ぐ士官は水兵の口拱を役人に通せんと勉めたれど通事は其英語を能く解する能はざるより役人は事

の要領を得ず迂かしがりて輕夫の片言を聞きて稍怒りし折とて今は烈火の如く怒りて事六ツかしくならんとせしかば「バツターソン」氏士官の名は此通事にては明らかと思ひ兎も角も本艦の機密で通事共々來られよといへば一議に及ばず従ひ來りぬ氏は予に通辨の勞を取らん事を求む

予は此に初めて再び故國に於て語を交ゆるの自由を得て先づ番兵なりし水兵に事の顛末を問ひしに前の如くに物語り且つ米國軍艦の水兵に酒と名の付くもの賣る事は條約の禁ずる所なりと理屈尤もに聞ゆれば予は石炭の積込にて喧しかりければ二人を喫煙室に伴ひ行き座に就くを竣ちて番兵の口供を日本語にて徐に演說せしに其音調なら訛言なら正眞疑なき日本人の遠ひあるべき筈なきを知らぬ兩人は甚く驚き役人は突立上り今は喧嘩の事件は忘れたる如く打棄て、一圖に予の生來を知らんとし足下は誰人そ何處より來ませし何處如何なる場所に斯くは日本語を學びしやと疊み掛けて問逼めたり

折柄「バツターソン」大尉はホイイにシヤンパン葡萄酒菓子を持たせて今此席に入り來り事解りしやを問ふ否談判は其地除けにて役人は予の素性を聞知らんとし

て種々の糺問此度は予が吟味受け居るが如しと打笑へば大尉は「して足下は何と答へしや予は宣ふまでもなし予は亞米利加人なりしといひしに彼不審氣に予を打贈りたり此問答の間も役人は默然として考へ居たり

聽てシヤンパン酒を薦めて役人の心を宥め互に打寛きて予は番兵の申立を説明せり役人は頭を掉りて开は大なる誤なり輕夫ども打集ひて酒酌む所へ一人の水兵來りて銀貨を出し酒賣呉れと求むれども其貨幣は日本通用のものにあらざれば輕夫共は之を拒み賣り與へざりしを水夫は無法にも貨幣を投げ置き酒壺を奪ひて本艦へ急ぎ行きぬざるを番兵に認められ何事か言ひ争ふと思ふ内に番兵は和船に降立ちて輕夫の一人を引立て、本艦へ連往かんとしたれば輕夫は大に恐れて往くまじと争ひしを暴卒に蹴倒したるより輕夫は驚きて叫びたり予は其聲を聞付けて馳來れば甚く負傷して甲板に仆れ居りぬ事の様は右の如し孰れにもあれ番兵か我邦人を蹴り又は虐待すること以ての外なり斯る權利なきのみならず假令日本人に非行ありとも开を取締の爲め出張し居る予の許まで通知するころ番兵の職務ならめ左にあらすやと演說一番予は大尉に之を通辨すれば大尉は一

々に領承し番兵の非行は幾重にも謝し屹度將來を戒むべし枉て宥恕ありたしとの懇談を役人に通すれば甚く満足を表して事容易に落着せり

役人は尙ほ立去らず予が日本語の巧なるを訝りて蹴られし輕夫の事よりは予の素性の探偵に重きを置き種々に言葉を設けて問落さんと試みぬ一言其疑ひを解かん事容易なれども艦長よりの堅き戒めを守りて予は神奈川に着するまでは明すまじと決心し兎や角と言紛らし來歴の事曖にも出さず流石の役人も物足らぬ顔に出往きたり此人は肥前侯の家中にて増田と呼へる人なりしが慶應三年予は長崎に於て再出會し此時のこと語り出て、打興じぬ

六月廿二日拔錨下田に向ふ東風吹通し雨強く殆んど四日を費して下田港に入れば上海ハーロ會社の持船ウォンデラー號繋り居たり

投錨すると間もなく合衆國公使館書記官ビュスケン氏は公使迎接の爲め來訪し引續きてウォンデラー號船長は乗客「バンリッド」氏と共に來艦せり

翌日公使は一艘の和船を備入れ荷物旅行行李を積み載せ準備に忙はし予は士官に伴れて上陸し其買物を助けん爲め波止場に登り來れば其處には數多の役人扣へ

たるに日本語にて挨拶すれば面白き事に思ひけん米國の風土米人の風俗を知らんと勤めたり

予が繼父と兄とは住吉丸にて屢此港に出入せしことを思ひ出したれば其名を呼びて土地の者に問へども誰一人知るものなし道理よ安政の大地震に搗て加へて嘯浪の爲に全港は殆んど毀れて昔の影は渚に寄する波も知るまじ住む人の變轉りたるも宜なり之を思へバ親戚の人々は今何處にあるやらんと今更らに心悸きぬ

三十日ウォンデラー號と和船を挽きて神奈川へ向け瀛笛の聲を跡にして浪に花を畫かせぬ浦賀を過る頃南西の微風ありしかばウォンデラー號は本艦を放れて帆打擧げ舳艫相含んで神奈川に入港せしは午後三時半なり碇泊せる英國軍艦サンブロン號は士官を送り來りて迎接の挨拶しぬ

第二十三回

開國の事始め横濱は互市港と定まりて家々の建築を進めて市街の形も遠からず見るを得へき景況を目前に望み觀ては心強さに獨り勇みぬ錨底砂に食ひ入り

しと思ふ頃二人の税關吏羽織袴に大小帶挟み本艦を訪ひ來り來意を問ふ艦長ニ
コルソン氏應接して本邦駐紮公使ハリス氏を乗せて今長崎より入港せり又去年
の通商條約に基き來る七月四日を以て當港に領事館を開かん爲めに領事ドル氏
も來任せりと告るに二人は領承して退艦しぬ
其後影見送りて領事は

公使には何と見給ふや神奈川臺の向ひの平地に建築しつゝある家屋は日本政
府が第二の出島にとて造營するに足らなきか去りとては迷惑なり引渡すども
受取るまじ

といへば公使も同じて

勿論のことなり卿か領事として手始めの腕前を示さんは之れなめり勉められ
よ

と訓令一番

七月一日神奈川奉行酒井隱岐守は新任公使領事へ挨拶にとて來艦せり公使は奉
行と寒暄を敘し終り改めて予を紹介し元日本人なれども今歸化して亞米利加國

籍を有し其市民なれば以後亞米利加人として取扱はれたしとの旨を述べ奉行
は手帳に控へ行きぬ其後今日まで公の事柄には常に米國の一市人の資格を有せ
り

午後には英國總領事「オルコツク」氏公使を訪問し同時領事「ヴァイス」氏は「ドル」氏訪
問の爲め來りしより四人船室に膝を交へて長評定議する所は何事なるや詳にせ
ざりしが領事館居留地の位置の撰擇に關する相談なりしことは當推諒ならぬに
似たり

翌日奉行再ひ來りて領事館設置の場所を横濱に卜して館舎を建てたりと告ぐ領
事は條約に定めたる如く神奈川に設置したし厚意は辱かりしが横濱は御斷り申
べし願はくは下役數人を貸し給はれ伴ひ行きて自ら見分し地を定めんとこふ奉
行も拒み兼ね翌早朝二人の小吏に通事さへ添へて遣しければ領事は午前九時上
陸し本覺寺は渡頭に近く丘陵の間ながら小高き所にありて近く横濱を眼下に瞰
み目を放ては灣の限り臨むべき勝地なるを領事館の位置と定め十一時半頃歸艦
しての手柄話

士官等は買物せんと予を伴ひて横濱に上陸し先づ税關に到りて貨幣を交換し町へ出でてつ畑を潰して街となし居る折なれば商家も壁未だ乾かぬあり建築中なるが十に七八居留地の郭内に到り見しに幅廣き道路の設計は出來居りて人道車道をも設け得べし

機敏なる商人早くも店を開き大方は此處にて整ふべし古物商あれば漆器商あり陶器を専らに賣る店あれば雜貨に店を賑はすもありぬ立昇る漁村の煙囪々として鵜犬の聲少なきは本村の開け始め外國人居留地と定められたる一區畫なりける麥園菜園の間に點綴する家屋の中に新築せる數棟の大なる館は中央なるを領事の官舎とし周圍にあるを商館となせり之と本町通りを隔て、運上所及び奉行役所あり税關の後に當れる所は一圓に役人の住宅を建列ねたり
購ふ物長崎下田に比して殊の外高し士官等は怪みて予に諮問しぬ予とても知る由なければ店主に説明を乞ふ店主は勿體らしく仰去ることなれども物價には變動なく長崎横濱と差別あることなしされど今支拂ひ給ひし新貨幣なる二朱銀ハ墨西哥銀半弗に當り舊貨幣は銀三分にて墨西哥銀壹弗と交換せしかば日本通用

の價に引直せば日本金貨の相場高き爲めさてこそ物價高しと思召たるなれ

予は其如く通辨すれば主計なる士官は嚮と手を打ち

「條約に金銀は日本分銅にて秤りて量目を定め計算すべし」とあるに基き日本政

府は新貨幣を鑄造したりと覺へたり

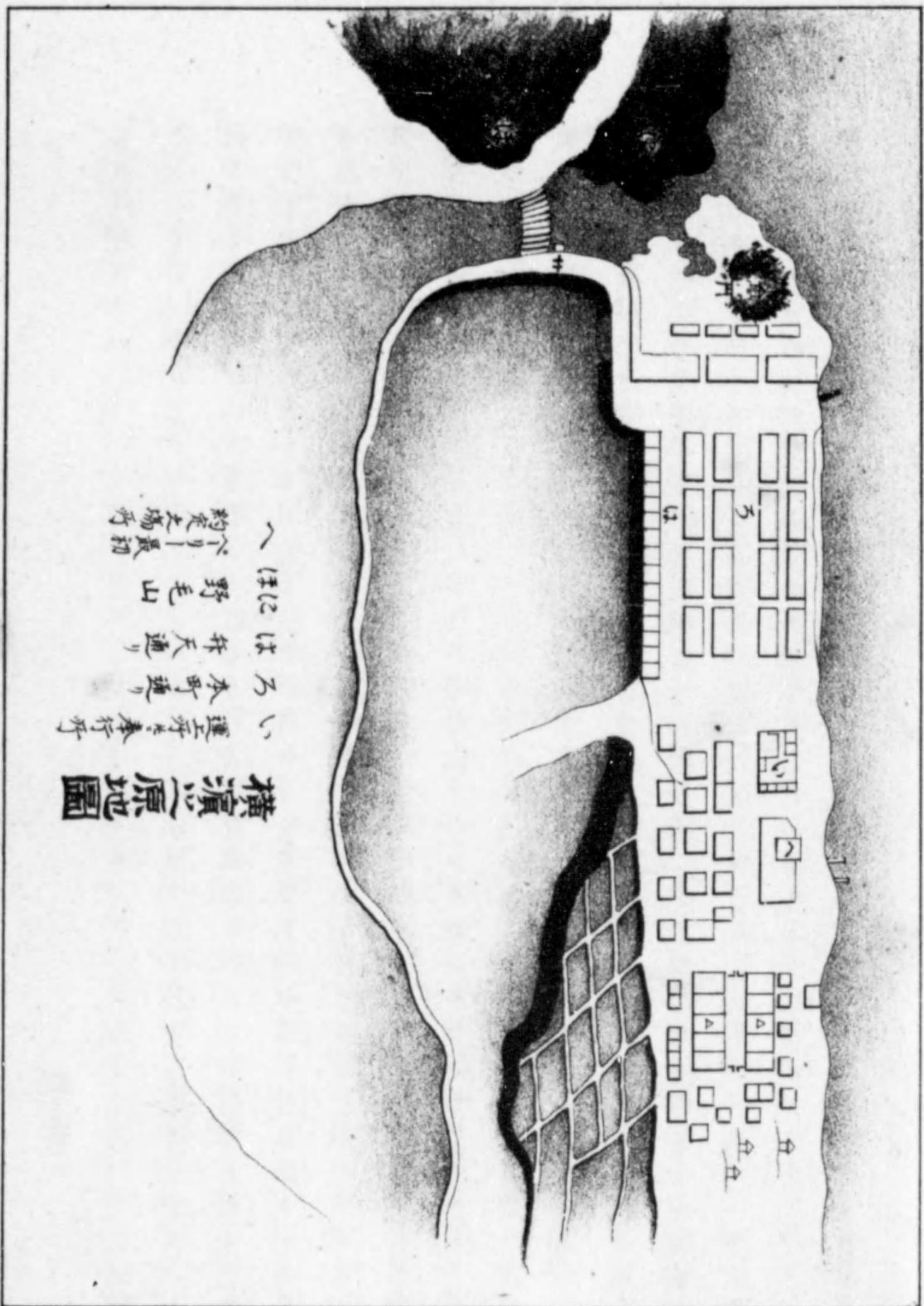
といひしが其よりは一物も買はずして歸艦し公使に告れば公使は江戸に入府せば外國奉行老中職へ申告して改正なす様談判すべければ其迄は可成物品購買はなさざる様致すべしと申されぬ

第廿四回

千八百五十九年七月四日(安政六年六月五日)は修交條約實施の日として神奈川は今日より日米間の新貿易港となりぬ碇泊の船舶早朝より一齊に滿艦飾をなし昇る旭と照添ふて和氣靄々の中に友呼び交す濱千鳥開け行く御世の千代萬代を祝ふらし初春ならぬ初日の出國旗の光りはいや榮ふなり

午前十時神奈川に上陸し本覺寺へと練行きぬ墓地にある大木の頂上に篋を結びて旗竿となせり公使「ハリス」氏領事「ドル」氏艦長「ニコルソン」氏乗組士官「パンリード」

氏及び予は大樹の下に集まり正午を相圖に米國國旗を百尺竿頭に懸へしシャン
 ペンを酌みて星光旗の歌を唱へ各杯を擧て合衆國萬歳を呼び星の光は輝きて山
 鳥の尾のしたり尾の長き榮へは際限なき波線に似たれと祝したり今日建國の祝
 節に和親の交縁結び初めて萬里比隣の國となり太平洋の底の眞砂は數ゆども兩
 土の民の幸福は幾千代かけて限りあらじな
 朝嵐に吹靡く外國祝旗始めて此土に懸りて大日本帝國の基は愈動き無き王政維
 新の曙に港の鎖開かれて慕ひくるらじ外國の有形無形の智識つみくる船入小民
 の電は煙り立添ふ
 祝ふ杯唱ひ收めて本堂に設けたる食卓に就きぬ列る人は公使ハリス艦長ニコル
 ソン傳令使軍醫二名パンリードと予も未班に入りぬ魚羹烹鳥野菜菓子葡萄酒の
 美酒佳肴はあれども牛羊の肉は勝に上らず其頃は山なす財寶積むども此地に
 ては牛肉とては得られざりし
 七月五日公使は江戸に到り麻布善福寺の公館に入りぬ
 家具什器の購入に厩の備入も直接になすを許されず皆神奈川役所の手を経るを



横濱(原)地圖
 い 運上舟奉行舟
 ろ 本町通り
 は 弁天通り
 へ 野毛山
 約定大場舟

要し往復の煩はしきに堪へず領事館員としては領事書記生バンリード氏と子の三人なれば繁忙言はん方なし料理人は上海より連來りしかば事欠かず備入れし日本人は給仕給料月二兩番人給料月二兩二分給仕見習月壹兩貳分料理方月貳兩貳分の四人なり其後程經ずして支那ボーイ逃走せしかば奉行所へ逮捕を依頼せしに時を經ず捕へて領事館へ引渡されしを直ちに解雇し其本國に送り遣はしぬ其後二週間も經たらん頃料理番なる支那人をも解雇し今は日本人のみ使ひぬ
ハード會社の帆船ウォンテラ一號は遠からず解纜せんとす領事は同會社の神奈川代理人なりしかば船荷積入の爲め購買方を予に依頼せしかば予は「バンリード」氏と共に横濱に出で、取引をなし一週間の内に積終れり其品は菜種油、蠟、海藻、鮑、乾海鼠等なり新開港の事なれば外國人と其貨幣に信用なく搗て加へて貿易貨幣も尙定まらずありしかば取引に困難なり予は據なく領事館の印を捺したる支拂手形を發行して交換相場の定まりし日を其期限と取極たれば内商も漸く満足して貨物を引渡しぬ

第廿五回

予か故郷の兄今江戸に來り予か亞米利加より歸朝の噂を聞き其實否を糺さんとて横濱へ來りしどの報を得たり予は之を知らせ呉れし神奈川の人に禮言ふ間も忙しく領事の處に飛び往きて暫時の暇を請ふも辭短かし

領事へ領きて心任せになすべし尙此處に連來りて予に紹介せよ

其許可を後に一禮して教へられし兄の旅宿へと急ぎぬ八年以來安否を知らず過せしかども見據ふべくもあらぬに懐かしやとばかりに挨拶もせず其居室に打通ほれば兄は凝視するのみ沈み勝なる眼に不審の眉予ヶ上を氣遣ひてにや憂の色顔に見へぬ道理よ別れし日より幾年の星霜を経て口鬚も生ふべき年となり頭に鬚なく風俗なら服装なら今は常時の面影なければ兄は予を視ても一个の外國人の思ひをなし己れか弟と識らす未だ一語を發せずして訝かしげよ見詰たり

予は進み寄りて一禮し養父は今何處に在す伯父叔母は健康に在すか隣家の誰某は尙健康なるかと親戚知友のあらんかざりを數へて安否を問へん兄は初めて予を其弟なりと識りて顔の皺の類の微笑に解け初めて予か問ひに答へつゝ過來し方の物語りに予か其弟なることの愈確なりしより手を取交はし喜溢れて涙滴の

如し暫時は互に物言はず旅店の夫婦が老實しく茶菓を持運ぶに驚かされて涙拭ひ去りて故郷の話と米國の物語りと交換しぬ枯柳再び春に遇ひて話は枝より枝と榮へて盡すべくもあらず

領事の勸誘もあればとて見物旁領事館に來り給へと相携へて道すがらも語り續けて早くも着きぬ領事に紹介すれば領事は愉快氣に手を出して禮を施さんどす六尺貳寸の大男の厚き鬚は書に書きたらん關羽の如きが潤き手を指出したるには兄は其意を知らずして恐れをなし予を顧みて何事をなすにやと嘖きぬ

予は辭短かく握手の禮のこと説明すれば可笑しき風習もあるものよとて心安居ぬといふ顔容にて手を取りて禮をなしぬ領事は侍童に命じて點心の用意させ書本寫真などを出して予に説明させて示しぬ外國事物の書とては壘の張紙より見しことなき當時の有様なれば兄は之を見て甚く驚きぬ

領事は銀貨銅貨の外國貨幣と新聞紙を土産にせよとて與へ尙二三日は領事館に宿泊しては如何んと勸むれば兄は深く其厚意を謝し此度は弟か歸朝の風評を確めん爲め來りしよ貴國人の厚情にて恙なき弟を見しこと此上の喜びなし一日も

早く親戚知友に報じたければ折角の御厚意なれども明日は勉めて早く品川まで
歸るべしといふ領事も止め兼ね然らば晚餐を饗せんとて食堂に誘ひたり給事が
運込皿に頼には手を出さず一々に其料理を予に問ひて小首傾けて味ひつゝ一箸
毎に妙なりといひぬ

袂を分つ時桑港出發前バンリード氏と共に寫したる硝子取寫眞を贈りぬ兄は歸
郷の後親戚知友に之を示して予が無事歸朝の話の榮どしたり半年餘りにして此
事が人より人に傳はりて終には大坂町奉行の耳に入り兄は开を携へて出廊すべ
き旨を命ぜられて大坂に往き六七週間は旅店に爲すこともなく過せしが懸て呼
出されて調べを受け寫眞は取上られて歸郷を許されぬ其後半年を経て復も呼出
され大坂下り町奉行の役所へ往けば奉行は勿體らしく寫眞を還付し爾後親類縁
者の外屹度他見せしむべからずと言渡せり其後再會の砌に寫眞一葉にて思はぬ
暇潰し其上に幾多崇りぬとて聊ち顔に打笑ひて語りぬ

第二十六回

「ハリス」公使は御老中に掛合ひて貨幣問題を整へ新貨幣の發行を止めて再び墨西

哥銀一弗三分替となしたりとの報ありしかば予は數千弗を携へて税關に往き兩
換し兼て約せし如く支拂手形を償却せり
貨幣問題整理するの間もなく居留地問題起りぬ英米蘭三國の領事は是非神奈川
に居留地を設けんと主張すれども貿易商は神奈川の水淺くして船舶を容るゝに
不便なりとて横濱の勝れるを説く

事の不便は夫のみならず神奈川は東海道の驛路なれば上り下りの諸大名攘夷鎖
港の餘炎醒めやらす勤王の志士東西に浪遊し幕府を倒さんとするもの將軍政府
をして外國交渉の煩に耐へざらしめ其虛に乗せんとし外國人と見れば之を害せ
んとすること瞭なれば奉行代官も居留地を神奈川に置くの不利なるを知れども
領事等は此等れ動靜を知らざれば奉行等の辭を用ひず却て邪推を逞ふし外國人
を横濱に居留せしめんとするは第二の出島往昔長崎に於て和蘭人の居留地とし
て埋立てたるを出島といふを此處に作らんとするものなりとし利害を説きて諭
せども此邪推が先入主となり頑として千八百五十八年の通商條約の本文の如く
神奈川に居留地を設くべしと言張れり今日は米國領事は神奈川奉行堀藏部正に

接見せり予も其席に列りぬ奉行は一應挨拶終りて神奈川に居留地を設くるとは
 異議なければども如何せん此地道中筋にありて往來繁く外國人保護の行届かざる
 恐れあり開國を喜ばざるもの此に乗じて外國人を害することあらば由々敷大事
 なり加之港灣水淺くして碇泊に便ならず能々思案ありたしと演説す領事は聞終
 りさりながら條約には神奈川を居留地となすべしとありて横濱のこと見へ申さ
 ず奉行職の御身も御承知なきことあるまじといへば奉行は言はるゝまでも
 なく承知致し居れり卿知らずや彼條約を締結せし「ペルリ」提督も横濱と神奈川の
 別をなして神奈川と定めたるにはあらざるを條約締結の際には向ふに見ゆる税
 關の傍なる艇庫に近き樹木の下を指して居留地となさんとしたるなり當時は横
 濱は名の示す如く神奈川の傍濱にして神奈川の一部をなし決して別地の名に
 らずと辨ぬれば領事も返す辭なく兎も角他領事と相談して重ねて見へ申さん
 とて袂を分ちぬ

ウォルシユ會社の「ポール」氏初めて横濱に居を占め(二番館)てより「デント」會社(四番
 五番)「シエー」エム、會社(一番)等日を逐ふて横濱に居留し神奈川には領事館あるのみ

皆碇泊の不便を厭ひて居住する者あらざれば領事も今は前説を擯すの止を得ざ
 るに至り終には領事館をも横濱に移すことゝなれり

七月下旬米國測量艦「フエンニモア」ク「パー」號横濱に入る「ブルーク」大尉は時を移
 さず領事を訪問せしかば領事は予を伴ひて翌日答訪し次の日の會食を約して辭
 しぬ

大尉は約束の時を違へず領事館に來れば領事と予は應接し四方山の談話の末話
 頭は予が在米中のことに及びしとき領事は予が米政府の保護を脱してよりの經
 歴を聞んと求めしかば予は税關附屬船の誰彼のこと語り出でゝ其船長は道知ら
 ず……と言續けんとする時領事ハ急に予を遮ぎり言ふまい「ジョセフ」其こそは予
 の親友なり再度其船長に對し道知らずなと予の前にて言ふて見よ此處には寸時
 も置き難し戸外に蹴飛ばして呉れんといきまきつゝ殊の外なる不興の體に予は驚
 き感ひ領事の親友ありとは知る由なく其船中にて飽まで不親切なりし船長の私
 評をなせしに甚く領事の氣に障りしは詮なしされど事實予に強面かりし人の人
 物評をなすが悪しきやといふ傍に聞居たる「ブルーク」氏は見兼ねて「領事さな怒り

そ付屬船の船長が卿の親友なるのよし、ヒコ氏が其私評をなしたりとて重ねて言はゞ擲き出さんとは勝手過ぎて聞苦し予はヒコ氏の親友なるを記懸せよならば予が前にて「ヒコ」氏を擲き出して見よと威丈高になれば領事は客なる卿が傍口出すは要なしといふ、大尉はこは怪しからぬことを聞くものかな予を客なりといふ卿が何故斯る穢はしき言語を客の前にて弄するや而も予の親友に對して無禮なるを黙すべきにあらざと爭論漸く花を咲せる折柄持來る豚頭膳に上るを領事は洋刀と肉刺を取りて切りつゝ何人にもおれ予か事をなすに干渉せんものは此豚頭の如くならんと嘲笑へは律義一徹の「ブルーク」氏は此一言を圓を挑むものと合點し一旦は顔に朱筋を催せしが其沈勇に怒を鎮めて平然として冷かに「オー大將ドル」米國にては常に人を呼ぶに大將大佐知事などを冠して稱す之も其一なり予は汝の招團に應ず武器は汝の勝手に任せん早々庭に降立てと言ひつゝ立てば差控へて居りし「パンリード」氏今は見兼ねて走り出で大尉を宥め頻りに仲裁す予も大尉に縋り予の爲めに事起りて怪我あらんには申譯なし大尉が熱心は謝すべき辭なし枉げて和解したまへと乞ふ領事も今は悔ひて前に言ひしは大尉に對し決

團を挑みしにあらざ全く戯れしのみと辨論しつゝ實以て愈決闘となりても家に一の武器なしといふ大尉は冷やかなる笑ひ顔にて先達てクーパー號に來訪されし節は帶劍せしにあらざや加之其節足下の懇望に任せコルト小銃を予は足下に贈りしを忘れしかと詰れば領事は笑ひ出し其詰問には一言もなし使ふ術知らねば無きも同じきなりと言ひつゝ立ちて席を改めて酌酒に怒れる筋も緩めば予は胸すきぬ

八月七日暴風荒みてクーパー號も果敢なく濱へ打上られ怒濤に嚼れて帆柱のみは見へぬ乗組員と器械は無難なりしは不幸中の幸ひなり其後二週間を経て船體検査をなせしが船肋三十九枚まで用に立たず修履届くべくもあらざれば競賣に付したり

八月廿一日領事と予は奉行より晚餐の饗應に招かる奉行酒井隠岐守水野筑後守予等を迎へて正膳の日本料理を賜ふ

第廿七回

當時魯國水師提督「ポポフ」は其艦隊を率ひて江戸港に入り品海に錨を入れぬ一日

食糧買入の爲め士官水夫を載せて端艇は横濱に來り購買を終りて今や波除材に到らんとする時日本人一名大刀を以て走り蒐りやには一人を切仆し數人に重傷を蒙らしぬ此報の奉行所より來りしは午後六時頃なり取る物も取り敢へず現場に駈付れば死傷者は大尉「ブルーク」氏の假宿へ擔ぎ入れられたる後なり往きて見るに殺されたるは見習士官にして後袈裟に斫られ一刀に最後を遂げたりと覺へて内臓さへ後部より見へたるは切手の業勝れたるにやあらん負傷者は頭と腕とを斫られたれど重傷にはあらずされども當時は外醫の此土地にあるものなければワルシユ會社の「ホール」氏濟急の手當施しぬ下手人は早くも影を匿して往處を知らず初夜提督は「コルベット」にて品川より廻航せり奉行所は下手人逮捕に上を下へと混雜し居留人は其處此處に集りて居留地の保護を談し横濱全港は鼎の沸が如く洶々として穩かあらず

其後三日海軍葬式を以て見習士官を葬りぬ此日は在港各國領事屬僚居留人會葬し「コルベット」よりは水兵上陸して警衛せり提督は奉行に此趣を報じ其參會を求めしが奉行は參會は望む所なれども葬儀が我國の風俗習慣に反するものなれば自ら

出席仕難し代理を差遣すべしと返答す提督は今日の葬禮奉行自身に參列すべきなり謝絶するは奇怪なりと言送れば奉行も餘義なく舊慣を破りて十二人の小吏を從へ行列に加はれり此時のみは警蹕の聲を止め葬儀の跡より距りて隨ひたり其頃京童が言囁すを聞けば奉行は國風に反したる葬儀に參列すること素より憚からぬを意に忤りて提督の求めに應じたるは此際に惡感情を惹起さば兩國の間事難からんを慮りたるか爲めなりとぞ

翌日「ボボツ」提督は傳令使を從へて領事館に來り會葬の禮を述べ領事は下手人は既に逮捕に及びしやと問ふ提督は未だ逮捕に至らず屢奉行に面接して促せども兎角通辨人に事欠きて互に充分の意思を通ぜず靴を隔て、痒きを搔く思ひなりと告ぐるに領事は予を顧みて提督の爲めに通辨の勞を採るべきやと問ふ予は敢て効ぐることなき旨を述べれば提督は甚だ喜び次回面接の節は迎ひを遣はすべければ必ず出席ありたしと請ひて歸り行きぬ

其後二日を経て士官は予を迎ふるため端艇にて來りぬ予は時を移さず「コルベット」に伴はれ提督に面會し其より傳令使通事「英佛語に通し稍日本語を話せり」都合四

人横濱なる奉行所に往き接見室に案内せらる間もなく水野筑後守酒井隠岐守は役人を後に従へて出て来りぬ目付御勘定調役威儀を正して予等に對して座を占め通事二人書記四人は傍に侍しぬ寒暄の挨拶終れば提督は今日も亦殺人事件に關して其意を得んが爲め来れりと告ぐ奉行は次の如く返答せり

本邦人が外國人を殺傷せりとの報に披し直ちに部下の捕吏に命して下手人を逮捕せしめんとせしに彼れ逸早くも影を隠せり爾來草を分けて探せども何地へ逃れけん行衛しれずされども逮捕に向ひしもの現場に落ち散り居れりとて刃の缺け鶯色の絹羽織の裂片を持来り又吉田橋の傍にて拾ひたりとて碎れたる錫の箱に貨幣の入りたるを持来りて注進せり之のみ手掛りにて候斯く言ひつゝ小吏に命して其品々を此に運ばし提督に示せば一々に之を檢むるに錫の箱には魯國の銀貨數枚あり一尺許ある刀の折れに血の斑痕ある羽織の裂片を細かに覽終り提督は逮捕の速かならんを求むるに奉行は手漏なく探索中にて一日も早く處分せんことを勤むる旨を答へたり是にて此日の用談を終りて席を改めて小食の饗應受けぬ

二三日を経て復も魯艦よりの使來り奉行との最終の會合を爲して江戸に上るなれば今一度通解の勞を取る事を望む旨提督よりの依頼を傳ふ予は直に同艦に行けば奉行ハ六人の屬吏と共に既に船室にあり提督は之に應接し永く此地に止まるを得ず依て過日の下手人は逮捕に就きしや否やを確めたし或は手掛りを得られしかを聞きたしといへば奉行は具事あり全力を盡して探偵すれども今日まで不幸にも何等の手掛りを得ずと語氣も力無氣なり

午後三時奉行は艦を去りぬ提督は予を招き甲板を散步して言ふやう卿は如何思ふや奉行等ハ眞實下手人逮捕に全力を盡し居るべきや予は軽く彼等は必ず甚だ勤め居らんと答ふれば提督は頷き予も奉行等の心配顔に言譯するは逮捕に思慮を用お居るものと見たれど卿の意見を聞きたるなりと言ひつゝ予が腕に其腕を纏ひつゝヒコ氏過日來の通辨誠よ御苦勞なりき何がな酬ひんと欲す試に卿の好めるものを示せ予が力にて得らるゝものなれば得させん卿の力に依らずんば奉行との用談も捗らざりしなりと最満足なる容子にて問はるゝに予は却て迷惑に思ひ些ばかりの勞をなしたりとて酬ひを得んこと思ひも依らず提督は其ではい

けぬよし、吾等に考へありといふ予は暇を乞ふて上陸せり翌日領事に従ひ奉
行同道にて神奈川へ宅地檢分に行きし不在に提督は上京の暇を以て領事館を訪
ひ「バンリード」氏に金時計を渡し「持料なりしものながら心計りの報酬に受納せよ
と」ヒコ氏に傳へ給へと言ひ置き歸りし處へ予等は歸館し領事は奉行に茶を勸
めて談笑する折から「バンリード」氏は以前の金時計を携へて出來り予に提督の傳
言をなせば領事は之を一見し奉行にも示し提督よりの贈物なることを奉行に告
げよと予に求む予は其略概を語るに奉行は眞に彼事に就ては數度卿を煩はした
り予等よりも何れ酬ひ申さんと言ひて其日は袂を分ちぬ

第二十八回

却説も提督「ポポツ」は江戸に著して後殺傷事件に就き御老中へ宛て三條件を以
て要求する所ありたりとの噂専らなり其條件に

- 第一 下手人逮捕に怠慢なる神奈川奉行等を退職する事
- 第二 樺太島の半を割て殺傷事件の賠償として魯國に與ふる事
- 第三 時を吝まらず金力の及ばん限り下手人を逮捕し之を處罰するに勉めらる

へき事且逮捕に及ばず速に魯國官廳に報知あるへき事

實に此事ありしや否確めざれども其後の事實より推せば或は無實にもあらざり。
しが如く巷説ありてより一週間を経て水野酒井の二奉行は其職を罷められ新見
豊前守之に代り大使として米國に遣さるゝまで職を奉じぬ

九月に入りて領事は縮緬と絹を購求したしと予に告げしかば予は土地に名高き
雜賀屋といふ織物商に命じて見本を取寄せたり主人自ら見本を携へて來り予の
來歴を略聞知りけん頻りに予が親しく見來りしものを語らんことを望みて其よ
りは舊識の如く親しく交りぬ四方山の話の序に予は領事館にて日々冷浴のみを
取り居れど浴場なきを以て温浴をなすを得ず不自由しぬと咄けは彼は開は容易
なり我家は廣きとにはあらねども浴場あり何時にても仰あらば準備すべしとい
ふに予は明日午後參るへし温浴を取らしめよと依頼すれば彼快く承諾しぬ
翌日午後二時態々息子を寄越して湯湧きしとの報知辭に應じて予が足は領事館
を出ぬ往き見れば吾より先に奉行所の役人一人座敷に控へたるを見れば覺へた
る顔なり思はぬ所の面會と辭儀をなせば役人は片頬に笑を浮べて今日しも卿が

此家に来ると聞き神奈川奉行より卿の護衛の爲め参るべしとの命を受け此の次第今は米人なりといへど生れは擬似なしの日本人なる卿を警護なすは近頃杞憂に似て可笑しけれと事の定めとありては是非なし以後も斯る事あらん御心得まで申置くと言ひて果ては交互に笑ひぬ
此月に入りて支那各港より入込む商人夥しく居留地も頗る繁華となり商勢漸く賑はし

七日に領事は神奈川奉行を始め重立たる役人七人を招きて晚餐の饗應をなしぬ奉行等は馴れぬ西洋料理に鼻抓ひやと思ひの外舌鼓打ちて遣て除けたり
數日を経て奉行は野毛山の邸に領事と予を招きぬ領事は大兵なれば駕籠の間に合ふべきなく別誂にて新調せり乗馴れぬものゝ龜の如く首を縮めて乗りしも可笑し駕夫六人にて荷上げぬ予は馬に騎りて従へばホーイと僕二人は徒歩にて護衛すべしとて特に購ひたる刀佩せたるにホーイの源藏は恐ろしがりて手にだに觸れぬを領事に叱られて最短きを帯びたれど足元危氣に歩みしは其刀役に立べしども見へず行列正しく練行けば町人ばら珍らしきことに思ひけん到る所に集

りて見物す勝負大刀に勇む子供も此くやとばかり源藏は領事の大乗物の先を拂へば二人の僕は駕籠となり予は馬丁を従へて殿しぬ
奉行邸には取次の侍式臺に出迎へ領事の駕横付にして立出れば一禮を施して客室に案内しぬ此處には奉行を始め重立たる役人居並びて予等を迎へ座を與へて懇懇に挨拶す茶菓式の如く出て後に別室に延きて本膳にての饗應給仕も羽織袴に威儀を正し殊の外鄭重なり奉行の邸に外人の招待受けたるは之を初めとす領事はいと満足の様子にて歡を盡して辭し去りたり
此頃より小判と刀劍の賣買は貿易市場に賑ひたり幕府は之を憂ひ禁止の布令を發し以後此を貿易するものは吃度重科に處すべしと制しぬ
狡猾なる内商等制禁を破りて夜に入れば羽織の袖に小判を隠して居留地に入り込みて賣買しぬ其取引價は小判一枚一兩二分二朱より一兩二分三朱にて洋銀相場一弗に三分換にて二弗十七錢より二弗七十三錢なり内商は此る利を貪りて外商に賣れば外商も亦支那に廻して小判一枚三弗五十錢より八十五錢に賣り骨董品として賣れば一枚五弗より七弗となり莫大の利を博しぬ

刀剣も三分か一兩の價のものを海外へ出せば十弗乃至二十弗に賣れ行くなりされど容積張るより禁を犯して市場に運搬すること難きと法も殊に嚴にして外國人に武器を賣るものとして嚴科に申付らるゝより其取引は稍衰へぬ

時は時雨する十月となれり帆船オンワード號數多の乗客を載せて桑港より入り來れり乗客の一人「ケ」氏といへる人予が舊主人なりシカリホルニヤ州の「ケ」氏ケの紹介狀を携へて予を訪ひぬ商業上の談話の序氏は予に組合員となりて商館開きては如何との勸告心あらば桑港には富商の知己あれば資本貨物を送らしめん卿が專賣の口を以て開店せば富貴は手に唾して得らるべしと棚から牡丹餅の話し出立の前二日氏は再び來訪し覺書を示しぬ之を見るに組合資本は總て氏より出すこと商館私宅共に當用の器具總て氏の手にて具ふべきことし予は只頼出して勤むればよしとし掘利益は山分けと記せり領事館の給料も多からず雇限も定めざりし折柄速に同意を表し約定書に署名しぬ明年三月を期し此横濱に商館を開くべしとて立別れり

第二十九回

千八百六十年一月公使「ハリス」は幕府と協議し日本使節を米國へ派遣することを定め往復の費用は米國政府負擔すべしとて所用の石炭數多を積送りしかば領事は「バンリード」を宰領として倉入に掛り幕府よりは「ヤククツイ」丸を送れり倉入も濟み今は米艦の來るを待のみ

年改まりて世は穩ならず浪士の徘徊日々多き折柄東禪寺なる英國總領事の居館に雇はれ居たる彼の岩吉は予が遭難者の一人にて素行修まらざるものなりしが「オルコック」氏に隨ひて支那より故土に歸り來り引續き氏に宿ひ東禪寺に寓し居り子供を助けて寺の門前にて凧を飛ばして遊ばせ居ける後より深編笠被りたる武士聲をも掛けず短刀の柄も透れと突込抉り廻し止めも刺さず足早に立去りぬ岩吉は悲鳴を擧げて門までは這ひ行きしが夥しき出血に精盡きて倒れて氣息絶たり館員は力の限り手を盡せしが其甲斐なし下手人は影を匿して今日まで逮捕のこゝを聞かず其頃の取沙汰に事ありし日より一週間前外國奉行は英公使館に行きて公使に面會し浪士が岩吉を覗ひ居れば當分横濱領事館へ預けらるゝ方然るべし彼に不測の禍ありてはよろしからずと忠告せしに「オルコック」氏は亦例の

虚喝ならんと思ひしにや之に答へて岩吉は本官の雇人にして英國國旗の下に働くものなり其保護の如きは本館にてなすべし近頃御挨拶過ぎたりとて構ひ付けざりしとぞ

待設けし合衆國軍艦ボ―ハタン號は月末に入港せり我軍艦成臨丸も此處に錨を入れぬブル―ク大尉は其水先となりて桑港まで行かんと申出たり幕府も快く之を諾し其周旋を頼みぬ

二月二日ブル―ク氏は日本人「チム」を奉行所に引渡さんとして予の同行を求む予は直ちに之に應じ三人相携へて奉行所へ行き漂流人引渡の爲め來りしと案内を請ひ奉行に面會しホノル、港にて救ひ取り此度連來れる旨を述べ語を繼ぎて此者は正實にして軍艦にても從順に働き得難き雇人なりしが今其故郷に連來り茲に貴官に引渡すに當り軍艦に職を取りし報酬墨銀二百三十弗此袋に入れあり貴官幸ひに之を通貨に引換へ當人に渡されたしといふ奉行は聞終りて甚く其厚意を謝し屹度仰の如く取計ふべしといひて其日本臣民に友義の厚きを感謝したり其後聞けば「チム」は數日間町役人に預けられ其後小吏に伴はれて江戸に上り阿波

疾領分の者なりしかば其家中に引渡されて一應君侯の吟味を受け漂流よりの經歷を尋ねられしが數月を経て君侯より特に帶刀を許され扶持さへ賜はりて故郷に錦を飾りしとぞ

二月五日奉行より大尉ブル―ク氏を同伴して出頭ありたき旨言來りたれば氏を促して參廳せり奉行は此度大尉に成臨丸水先を依頼致し候に就て柳營より其依托の印として目錄の通り賜る旨なり今之を付與せんため招きたりとて白木の臺に白鞘短刀一口緋箔絹三巻を載せたるを恭しく捧げしめて差出したりブル―ク大尉は深く恩を謝して退きたり

二月十三日は記廳すべき日となりぬ此日日本公使米國へ派遣の爲めボ―ハタン號に乗込みたり公使新見豊前守村垣淡路守目付小栗豊後守を始めとして下役人十五人通事僕等惣勢七十二人とぞ聞へし

其日は領事より同艦に行くべしと命ぜられて往き通辨の助けを爲しぬ稍整ひたる後成臨丸に往きブル―ク氏に告別したり此處にて海軍奉行木村攝津守と船長勝麟太郎事務中濱万次郎の人々へ紹介されぬ

此時ぞ徳川政府の歴史否日本政府の歴史上公使を西洋に派遣したるの嚆矢なり

第三十回

二月下旬予は領事館を退き商館開設の日を待ち居りぬさりとて全く領事館の事を爲さぬにもあらず永く彼地に漂泊して其國人の厚き情に浴せし我身の領事にして要さるあらば何時にても報酬なく通辨の勞を取るべしとすれば往年受けし恩義に報ずるを得へしと申出せば領事も満足を表し予は辭任を快く許しぬ
却説も予は領事館を辭してより雜貨委託販賣店を横濱に開かんとて其準備を爲し組合員なる「ケ」氏の歸着を待ちたるに三月十日帆船オット、チーア號にて「イー、エス、ベンソン」氏其他の乗客と共に着港せり同船は一萬弗の貨弊を積みしが貨物どてはなし予は着船を待付て之を訪へば「ケ」氏は「此船こそ兼て語りし如く桑港の某々氏の債ひしものなるが組合商會の手始めに先づ船と一萬弗の貨幣を携へて來りしなり」と告ぐ之と共に商店に供ふべき家具一式を持來りぬされど其外に貿易貨物も見へざれば怪みて聞けば何たる事ぞ一萬弗の貨幣さへ「ケ」氏の自由になるべきものならで之にて日本雜貨を購ひてチーア號の積荷とし桑港に送る

なりとされば商業を始んにも資本なく予が待設けしも全く目的外れとなれり「ケ」氏も上陸せしが一弗の身に付くものなき有様に詮方なく予は先づ商店を開くに要する金額を調達し税關所有の家屋を借り受けて漸く開店の運びに至れり予も神奈川より移りて此處に住みぬ
商店も稍整ひたればオット、チーア號の積荷購入に掛りたれども其頃は江戸銀座にて貨幣の鑄造間に合ひ兼ねしたため日本貨幣拂底し外國貨幣は下落し内商は定めの交換價格にては取引をなさずさればとて今一萬弗の貨幣を税關にて日本通貨に引換へんとし一日の交換高に制限あれば二ヶ月間掛らねば一萬弗は引換へ濟とならず其間船繋ぎ置も無益なれば香港へ向け貨物運送の廣告をなし日ならず積荷を得たれば出帆せしめ其日より日々交換をなせしが同船歸港すれども未だ五千弗は引換へず止むを得ず予は税關官吏に掛合ひ一時に五千弗を通貨に引換へんことを請求せり組頭柴田定太郎書狀にて答へ來る様は願の趣此後の先例を作り不都合からねば聽届難しされども足下は過般魯西亞人殺傷事件に關し盡力尠からず其勞に報ひんと兼て日本政府も心掛けらるゝ際一般外國人と

して許し難き筋なれど足下に限り請求に随ひ即刻五千弗丈は引換へ申べしとなり之にて漸くオロット、チーア號の積荷も間に合ひて桑港へ向け出帆しぬ運上所よりの書簡は左のごとし

亞米利加合衆國通辨官

エスクワイル

ヒコエ

去未年魯西亞軍艦當港碇泊之節通辨雇舌之儀彼是世話方相成右謝儀をも致度有之折柄此度洋銀兌換之儀に付申立らるゝ事情は其許おいて緊要之事之由に相聞ゆる間前書謝意を差含洋銀五千ドルラル分引替渡しぬ

安政七申年三月二日

運上所

第三十一回

千八百六十年三月廿五日朝より降荒む雪に氣色勝れず爐を抱ひて平臥してありけるに午前十一時頃領事館より急使來りて今江戸よりの急報にて大老井伊掃部頭登城の途にて害に遭へりと告來れり猶豫なく參館あるべしと促しぬ予は取る

物も取敢へず參館すれば領事は公使よりの手簡を示せり

此凶變の報の知れ渡れば居留地内は騒ぎ出し噂さ各種なり四百餘の供人連れたる大老が數十人の浪士に無残々々と害せられたるを見れば我々とても安堵なり難しとて甚く恐れしもありぬ

江戸城にては人心の洶々を恐れしにや各國公使へは特使を出し凶變を告げ大老は事實浪人の襲撃に遭ひたれど傷病は淺くして一命に關する事もなしと言送れり之を聞き英國公使は原と軍醫にして醫術にも心得あれば其使に由て若し政府にて御依頼とあらば往て治療に盡力すべしと申送りしに幕府は深く其厚意を謝し大老の瘡痍も快方に向ふにより折角なれども謝絶すと體よく斷りしとぞ言傳へし

其より二週間を経て幕府は復も各國公使に書を寄せて大老は過般の瘡痍にて終み鬼籍に上りし旨を報じたりされども其實大老は櫻田門外の雪と消へて首は即時に剪落され浪人原が持去りしなりと見て來し人の語りき此凶事ありし爲め彦根三十五万石を削りて廿四万石となりぬ

此凶變の起因なりとて密々人の語るを予が聞きたるを試に左に録せん
 柳營の典範として將軍家に繼嗣なき時は三家の内紀伊家尾張家より儲嗣を入る
 事定められ水戸家は三家の一なれども入て將軍たるを得ず唯將軍幼少の折
 は副將軍として輔佐すべき事となり居れり然るに當時の水戸侯は竊かに柳營の
 實力を掌握せんと計りしが其身自ら將軍たる事は典範の許さざる所なれば侯ハ
 一策を畫し二卿の一なる一橋家に儲君なきを幸ひに其第七子を同家の嗣君とな
 し後には之を將軍となし其幼弱なるに乗じ自ら副將軍となり大權を心の儘にせ
 んと企てたり柳營には當代の將軍家定公幼少なるを以て水戸老侯副將軍となり
 輔佐職にあり竊かに典範と結托し一橋家を將軍と爲さんため家定公を除かんと
 謀りぬ當時典範は日々將軍家を診察し恙ある時は直ちに醫藥を奉るの慣例なり
 しかば將軍の健康は一に典範の匙の尖の儘なり危かりし事どもなり果せる哉將
 軍家は千八百五十八年俄かに薨去あり毒害とぞ聞へし慧達なる井伊侯早くも此
 隱謀を窺ひ知り泉源を推察せしかば此凶事ありしより直ちに老中の會議を開き
 醫藥を進めし典範を捕へ嚴しく推鞠せしかば悉く隱謀を白状したり仍て之を死

罪に處し水戸侯の副將軍の職を罷め水戸へ替居を命じたり
 是に於て紀州家より家茂公を迎へて十四代將軍となしぬされど尙幼弱なりしか
 ば輔佐職を撰任することとなり井伊掃部頭其撰に當り大老として万機を輔佐せ
 り
 却説も水戸にては老侯の企望も全く書餅となり一橋家が將軍家たるを得ざりし
 のみならず老侯も柳營に權力を失ひて替居の身となりしかば藩士は深く井伊侯
 を憤り中にも多血の若武者等三十七人は老成なる藩士の止むるも聞かず脱藩し
 て江戸に出て遂に三月廿五日(日本曆三月三日)の大雪に乗じて登城の途に要して
 其首を掻きたるなり去るにても當日は上己の節句とて登城するなれば大老の儀
 仗も嚴かにて四百人の供人は式服を着せしが雪風烈しかりしより皆な合羽を着
 し柄袋さへ掛けたれば浪人の襲ひし時只混雜するばかり早速の用に立ざりしは
 是非もなきこととなり浪士等も此襲撃をなすまでには幾多の辛酸を嘗め姿を
 變じ容を假裝して遂に此三月三日の時ならぬ雪の上に威權比びなき大老を櫻田
 門外の落花とあし終りぬ燈光滅せんとする時先づ明かなり盛者久しからず榮枯

は蓋生が夢なるこそ果敢なけれ
侯の邸は三宅坂に在りて本丸までは二三町餘りなり侯の登城の朝駕籠に乗らんとしけるに如何しけん鬚の元結故もなく切れしかば家人は甚く之を氣に掛け其登城を止めしかども侯は聞入れずして髪結ひ直して門を立出で未だ數分ならざるに屍と成り果てしころ口惜しけれ前兆は忽にあらぬものよと人々は言ひ合へり

第三十二回

同年四月横濱にて復も外國人殺害の事あり被害者は當時碇泊中の和蘭商船の船長二人なり其顛末を聞くに二人が日暮近きに本町通りを散歩し居たるに誰とも知らず聲をも掛けず後ろより切付け手も無く二人を殺しぬ其一人の腕は切られて體より一町許を隔て、落たりしは無残なりしと見て來し人の語りぬ下手人は逃れて今日までも知れず
却説も横濱は開港されてより支那各港の貿易商新港に移住し來り殊に此年五月に至りて目に立つまで増加せり内國人も各地より此に移住するもの日に多し幕

府にても貿易を獎勵せんため開港の初めに横濱に移住するものは三ヶ年間免稅すべしとの布令を出しぬされども多少社會に好位置を占むるものとは夷狄として賤みし外國人と接すること快からずとて來り住するもの絶て無く居住するものは皆投機者流ならずは無頼漢なり濡手で粟を攫まんとするものならずは損しても元の體一貫といふ徳義に乏しき寄合勢なりき

六月に至りては居留地も雜鬧を覺ゆるまで人口増加し貨幣引換へに税關の混雜は一方ならず江戸の銀座とても此需要に應じ兼たれば此月より何人も一日に十弗以上の引換をなすを得ずと布告せしが有りもせぬ名を作りて税關を欺き定額外の弗を引換へるものありて布告も何の役にも立たず
月は替りて四日は建國の日とて日本にて第二の祝祭を舉ぐべくなりぬ是までは國旗を掲げしことはあかりしが祝祭も明日と迫りし三日の朝米一人領事館に來り領事に面會して建國祭には各戸國旗を懸して祝意を表せんと申出たり領事は賛成すべしと思ひの外氣色を損じ官吏ならざる居留人の何人に限らず領事よりの特許あくんば國旗を其門戸に懸へすを得ず誰にもおれ猥りに居留地に於て

國旗を掲ぐるあらば予は直ちに行きて之を撤去せんと語氣鋭く言ひ放つに艦々
 來訪せし人も驚きて横濱に立歸り居留米人に斯々と語れを皆領事の言分奇怪な
 り然らば此方も意地なり明日は勉めて各戸に國旗を懸へし美事領事が撤去する
 様を見んとて其夜の内に日本仕立屋を呼び集へ國旗を縫はしめ夜の明ると共に
 戸々之を掲げ線に漂ふ星光の朝嵐に輝くを見たりされども領事は其言葉にも似
 ず己れも來らず代人さへ送らざりしは可笑かりし
 其月十三日は此土地の年中行事の中にて最賑はしき辨天の祭日なり山車踊屋
 臺に藝者の手古舞鎖棒曳なんど町毎に華美を競ふて押出したれば外人は其目新
 らしきに興がりて家を外に後を慕ひて浮かれ歩みぬ祭禮ハ三日に涉りて内國人
 は店を片付けて外國人を招き見物せしめたり
 同廿日俄に弗相場下落したり其故は江戸銀座にて弗の購入を停止したればなり
 其朝は百弗にして二百九十分なりし相場が夕には二百三十五分に下落せしは開
 港以來劇しき變動なりき
 十月廿五日米國軍艦ハートフォールド號に提督ストリプリング乗込みて支那より

來港せり予はトクトルメートル氏と共に訪問したり提督士官等も吾等が家に答禮
 として來りぬ

同月三十一日領事は提督を賓客として舞踏會を開き居留米人をも招きたり貴婦
 人の來客は四五名に過ぎりしが神奈川にての初めての舞踏會頗る盛會なりき翌
 日同艦は江戸に廻航すとて居留米人の都見度きものは乗艦を許せしかば家業を
 休みて往くものさへありぬ

予も乗艦して品川より上陸し「ホール」氏と共に「ハリス」公使を訪問し書記官通辨に
 も遇ひて彼等より馬を借受け護衛さへ付けられ市中を巡覽せり

數日を経て「ホール」氏と共に英國公使を訪問し其歸途舊友なりし僧正「ワラール」氏
 を訪へり僧正は永く琉球にありて琉球語を能くし開港と共に横濱に來り天主會
 堂を興し今は在江戸なる佛國公使館に近く一家を構へて住居せり予等の來訪を
 喜び緩々滞留して見物すべしと勸むるに予等は喜びて之を諾し其日より江戸見
 物を始めたり深川にて正午となりたれば割烹店に入りて食事しぬ魚鳥の珍味に
 腹膨らして勘定を問へば二分三朱の付けを出せり予等二人は護衛の官人二人馬

丁四人に馬四疋まで舌鼓み打ちて二分三朱とは廉過ぎたり誤りにもやと亭主招きて問へば其にて悉皆といふ予は之を拂ひて二朱金一ツ茶代お取らせつ亭主の頭無上に低く頭痛や病まんと思はれぬ立出る門に見送る女中等の聲も喧しきまて高しシラール僧正の厚意にて其家に滞在し十二層まで見物せしが途にて英國公使に逢ひしより予等がハードフホルド號にて歸濱せざるこの端なくも「ハリス」公使に知れて特に官人を遣はして滞在の理由なと問はれ煩はしさに僧正に迷惑掛りていとて「ホール」氏と共に辭し去らんとすれハ僧正も止め兼ね共に横濱に往くべしとて護衛を從へ轡を並へて打立ちたり

十一月九日合衆國軍艦ナイアガラ號瀛烟を雲に残して入港せり此軍艦にて曩にポーハタン號にて米國へ派遣の大使新見豐前守村垣淡路守其外諸役人歸朝したれば予は時を移さず赴きて無事の歸朝を祝しぬ二大使は予に面接して先づ艦長士官等に航行中の厚き待遇を謝せんことを求められたれば委細を承り尙米國にて善待なせし人々へも大使の名にて書状を送り呉れとの依頼を受けぬ同艦は大使の一行を載せて品川に入り上陸せしめたり

第三十三回

此月の末モツス銃獵事件神奈川に起り公判を開くに當り英領事「ヴァイス」氏は予に審問に陪せん事を求む予の審廷にての職務は日本役人が證人を取調ぶるに脅迫を用ひざらんことを視察するにてありしが二日續きて其席に出たれども遂に關涉するの要なかりし

十二月五日英國領事は居留英人に左の告示をなせり商會も廻達を受け書記に騰寫せしめ置きぬ

英國領事館告示第十五號

日本役人を傷け其生命殆危篤なるに至らしめたる嘆すべき銃獵事件は本官をして斯る煩厭なる事件を再び演ぜざらしめん爲め取らんとする善後策を擬ぐるものなり既に告示せるか如く英國臣民は當開港場の區域内に於て銃獵をなすことは日本國法の禁ずる所なるは一般に知る處なるべし然るに今復此厭ふべき事件を生ず本官をして再び勸言の必要を感ぜしめたるハ痛嘆に耐へざるなり抑外國に於る國民は國際禮義上居住國に法律を遵守すべき義務を有す故

に條約に依りて特權として許されたるものを除くの外に一般に居留外人は日本國法を遵奉すべきは論を俟たず特に効力を及ぼさざる法律以外凡て日本國法に従ふを要せずとの特權は大英國と日本との條約中に存せざるなり條約上の特權は明示の約諾を要するものにして正當に之に由て保有すべき權利は必ず保護さるべきも之を擴張敷衍する事を得ず日本國法は日本臣民を拘束すると同じく外國人を拘束するものなり故に英國臣民たるものは日本國法は條約に由て其効力を拘止するに非ざれば之を違反する時直ちに其法定の責任を負のみならず尙且英國法に依て不法の行爲の作爲より生ずる責任を負はざるべからざる事を記し認するを要す重罪を行はんとして人を故殺するものは法律は謀殺を以て論ず法律上なし得べき行爲と雖も不法の方法にて或は必要の注意觀察を欠きて行ひしが爲め人を死に致すものは情狀に従ひ或は故殺とし或は謀殺を以て論ず故に人若し千八百五十九年告示十五號の豫示あるにも拘はらず管轄領事廳の禁令を無し日本國法の禁を犯して銃獵をなすものは輕罪を犯すものなり加ふるに國法を犯すものを逮捕せんとする日本官吏の職務執行

に抵抗するものは重罪に當るものなり本官が在留英國臣民に對し日本國法を犯さざらん事を告諭し殊に銃獵に關して此告示を發するの要は實に此に存するなり各國法を通觀するに皆銃獵に關して多少の制限禁止の條ありて又嚴密なる規定を設け何人も他人の所有地に於ては其許諾を得るに非ざれば銃獵をなすを得ずと定めたるものあり夫れ斯の如く在留人は在留國法に従ふべきは一般なるを見るべし故に彼銃獵事件も揚言せらるゝ如き難事にあらざ設令居留の目的は銃獵の外ならざるも國禁は犯すべからず否寧銃獵を以て重且大なる目的となすも國法は遵奉せざるべからず況んや居住の目的は一層重大なるものにありて存し銃獵は輕事に過ざるに於てをや又假令正當なる目的に障害あるも國法の規定ある間は違反すべきにあらざるをや

尙本官をして注告をなさしむるものは自畫銃器を表白して携帶するの一事なり事固より正當にして敢て戒むるに足らざるが如くなれども今内地人士の氣激するの時に當り這般の小事も彼等をして仇敵たるの惡感情を生ぜしめ甚しきに至ては暴徒の利器となり危害を加ふるの媒介となるの不幸を招かんも未

だ知るべかず殊に日本の習慣上平和を旨とする商人を知りて外國の慣習を知らず居留人の銃を荷ふを見ては商人の武器を帯びて敵意を示すものと誤認し昂氣の極害心を起すべし其害や一人に止まらずして團體に及ばんとす茲に本官は此等の危害を未發に防がん爲め日出より日没まで武器を表白して携帯するものは罰金禁錮を以て處する事を宣言す又聞く居留人馬を疾驅して路人に危害を加ふ只居留外人のみならず其備役する支那人も亦之をなし而して之か爲めに殺傷せられたるものありと日本政府は馬を疾驅するハ外人の習慣ある事を知覺し注意處分するあらんとす本官は英國臣民が斯る舉動をなして告發せらるゝか如き事なしと深く信ずるものなれども尙開化國に於て法令に因て禁ぜられたる行爲なる事を注告せざるべからず而して各其奴僕をして爲めに其主を不名譽の位置に至らしめざらん事を戒めん事を望む抑奴僕が乘馬する事は日本國の習慣よ戻るものなるを以て是より惡感情を感起し意外の珍事あらんを恐るればなり本官は又奴僕が乘馬を以て必當なるものと認むるを得ず寧ろ其主人及び居留人の全體の利益の爲め

に之を避止せん事を望むものあり

千八百六十年十二月五日神奈川に於て

大英國女皇陛下の領事

エフ、ホウワード、ヴァイス手記

第三十四回

十二月廿二日前神奈川奉行堀織部正退城の途中乗物の内にて切腹して果たりと事の起因を尋るに其頃或る外商小麥粉の多量を買入れ支那に輸出せしかば粉は固より原料の小麥まで騰貴し内地の索麵商は尠からざる損害ありて恐慌さへ引起せしかば御老中安藤對馬守内商を戒めて外商と取引せしめずして粉類の輸出を防遏せんとす堀織部正は之を不可とし條約に粉類輸出の禁止をなし得るの明文なし條約に反する處置は或は國家の害を爲さんと論ぜしが對馬守の氣に障りけん物をも言はずト立ちて評議の席を立去りたり織部正は己れの語氣の對馬守の意を損せし事を知り辭々として退席し遂に歸館の途中にて自殺するに至りしなり尙風説に依れば織部正が退城するや間もなく評定席にてありし始末忽ち

上聞に達し將軍に於ても織部正が剛直篤義を知り給ふものから短慮ありては詮なしとて特に使を發して上司の處置を論議せしも直言なれば差構ひまじの上諭を齎らして堀が邸に到らしめしに端なくも堀が歸着と落合ひたり駕脇の士引戸を開き上使は教書を與へんとすればこゝいかに織部正は既に脇差を腹に突立て居りぬされど御教書と聞きて目を睜き讀上るを聞終りて頭を下げ有難しと言ひたげに笑ひを顔に残して惜しや大和櫻は散りぬ

將軍も深く其能を惜み給ひ直ちに其子を擧げて神奈川奉行となし給ひ二週間を経て各領事へ新任の披露ありたりとぞ

其頃復も水戸浪士等上總の代官所を襲ふの舉ありとの噂ありしかば神奈川奉行所は各領事に宛て保護の爲め一時領事館を横濱に移さん事を請求せり各領事の相會して此要求に應ずべきやを議せしが皆此要求こそ奉行が領事を脅かして横濱に移らしめ所謂第二の出島を作らん企なれとて之を拒絶せんと決せり

第三十五回

明れば千八百六十一年一月となりぬされば居留地のみ春となれり浪士の徘徊に

て江戸は穩かならず復も其捕縛あり一人は横濱に入らんとせしを捕へたるなり皆水戸浪人と聞へし聞傳へたる居留人は其安寧を危みて騒ぎ立ぬ

其十六日の朝江戸米國公使館より領事館への報に公使館通辨「ヒューズケン」氏日普條約締結の爲め奔走し昨夜も普魯西公使館に往きしが其歸途赤羽根にて凶徒の爲めに暗殺されたりと居留人は江戸横濱にあるものも傳へ聞きて騒擾一方ならず其廿日には英佛蘭三國公使の相會し其身體の安全に關して協議する所あり米國公使も招かれたれど會合に臨まず其内に横濱居留外人中に次の如き布告廻付あり今英國公使が發したるものゝ寫を左に録しぬ

予は茲に足下に報告し併せて足下の心得とならんを欲し予が京城撤去の理由を具して日本外國奉行に呈したる公書を送付す抑退去の決定は予が同僚なる佛蘭の兩公使と協議一致して日本政府の處置其交義に反して居留人の危害に脅かざるゝを不問に置くに對して施すべき最良の策なりとなしたるに基くなり然れども予等使臣は之を以て國交を廢絶せんとするにあらず只危害脅迫の再び條約國臣民に及ぶなきを欲するものにして若し斯る脅怖にして終極する

なくんば其害や既に蒙らされたる脅迫の結果より一層甚しからんを恐るれば

なり
此目的を達せんが爲め予は神奈川若くは横濱に移り危害に遠ざかるの地に立ちて日本政府の回答を待んとす加之若し得へくんば貿易港に居留英國臣民を

集め軍艦の保護に依て一層實効ある我臣民保安の談判を試むべきなり
夫れ此の如く條約上の権利を伸張するが爲め談判を開きたりと雖も兩國交

際は爲めに障礙せられたるに非ず又貿易も妨害せらるべきにあらず予は談判の結局は良好ならんと信じ現有の権利は確定せらるべきを疑はず足下は宜しく管轄貿易港に於ける施政の方針を變せざるを勉むべし尙神奈川奉行に對し

予か江戸撤去は絶交を爲すにあらずして只日本政府の猛省を促し遲疑する事なく各國交際を傷けず内肛外患なからしめて政府を鞏固にし以て居留人の生命財産の安全日夕に危害に陥るを防衛せん事を勉めしむるにある事を懇談せん事を望む
足下は此書簡及び別紙に記する予か外國奉行に呈したる公文の寫を居留英國

臣民の爲めに告知するの自由を有す

江戸灣碇泊英國軍艦エンカウンター號に於て

千八百六十一年正月廿五日 英國女皇陛下の全權公使アーノール・オルコック手記

横濱駐在英國領事足下

別紙

江戸及び横濱に於て居留外人の刺殺に遭ふもの繼續して止まざるを見れば再燃せる外人殺戮の脅迫は終に見處に類する悪意の表明に過ぎざる者ならざるの觀あり

「ヒュースケン」氏の虐殺及び特よ同氏保護の爲めに日本政府の隨從せしめたる役人の卑陋なる所業は以て外人の生命の安固ならざると保護の不確なるを證するに足るなり

加之前十八ヶ月に於て外人の蒙りたる暗殺若くは虐殺の下手人は未だ一人も逮捕され鞠訊せられたるを聞かず
此の如きは將來に於て斯る罪惡を犯すものを防止し既犯者を處罰するの不能

なるを示すものなり否日本政府が取りたる今日までの方針は毫も依頼するを得ざるを明示するものなり

嗚呼過ぎたるハ逐ふべからず日本政府も其策無るべし死者は生くべからず害は修むべからず然りと雖も黙視するを得ざるは將來を慮ればなり重罪を犯して政府之を罰せず其逮捕處罰をなさざれば其無罪を確むるにあらざして何ぞや吾人の安全は何に依てか保持するを得ん此れ恰も人を殺さんと欲するものは何時にても恐懼せず躊躇せず遂に外人に逢はゞ之を殺すを得べしの特許と何ぞ撰ばん犯して捕へず法律が其逃走を庇確すと一般なり法ありて法なし吾人の生命何を以てか危からざるを得んや

是れ實に外國人を國法保護の外に置くものなり外國の代表者も亦同じく之を殺さんと欲するものゝ手中に放擲さるゝものとする嗚呼施政此の如くなれば生命は帝國內の兇漢の任意に依て左右せらるゝものなり

以上述ぶる所のものは多少開化に赴ける國に於て有り得べからざる如き奇怪醜事に屬すと雖も予は各週各月起る所の事實に照して其眞實を斷言したる

のみ若し夫れ採て證となすべき事件は既に疑ふべからざる實際の有様に徴せ予は日本政府が斯る位置を以て泰西條約國外交官の安んずべき適當の所と思考したるや否やは問ふを要せず否斯る位置を各國の代表者が甘受すべしとさせるかを確むるの要なし

之に反し閣下等は勿論日本政府及び余は國中の大名小名が外人殺戮を以て徒らに外國公使をして脅迫の淵に呻吟せしめ之を凌辱し之を怒らしむるものなる事を覺知するを望むや切なり而して未だ制御の事あらざる荏苒月を重ぬ其意を知るに苦むなり又假りに一步を譲りて彼等は之を覺知せずとするも殺戮を犯すもの罪あしとは何に因りて生ずるや然も政府は優柔不斷の政を以て之を斷ずるを得ず永く犯行をして正道を蹂躪せしむ予が政府の決答を得んとするもの實に茲にあり否政府は萬國公法上之に答ふる責任あり

社會の秩序を維持し生命財産を保護する法律施行の責は政府たるものゝ負ふべきは世界の公論なり政府にして一度此責任を怠らば政府は其眞政府たるの要素を失ふものなり諸外國は之に對して敬意を表するを要せず何者條約各國

は名ありて實なきの政府と提携するものに非ざればなり政府鞏固の唯一條件
茲に存す若し之を忘るれば不測の危害を旋らさずして至らん今日本政府は
事態或は之に似たるものあるを恐る今にして猛省する處なくんば其成立は危
からざるなきを得んや

予は再び前十八ヶ月中に於て外國公使が受たる脅迫の事實を舉示せざるべし
兎に角間斷なき脅迫は外國使臣の交通を遮り自由を害し遂に其生命の安全を
危ましめたるは蔽ふべからざる事實なり夫のみならず貿易港の居留人も亦其
條約上の權利を障礙せられ貿易は干渉せられ妨害せられ制限せらる一言之を
蔽へば専制なる役人等は貿易を以て私利を謀り外人を傷くるの器械としたる
ものなり

「ヒュースケン」氏の暗殺に次て吾等外國公使の會葬に乗じ襲撃を加へんとする
の舉ありとの報を貴官等閣下より得て兼ての風評に未だ信を置かざりし予も
之に依て襲撃の脅迫の偽なるを疑ふを得ず予等外國公使も意を決して之に處
するなくんばあらず予は自ら處置を爲すに當りて確定の證據を示して以て日

本政府の保護は到底頼むべからざるを證し併せて處置の輕舉にあらざるを證
せん江戸横濱の公使領事居留人民の生命は危険なるを以て注意せよと報告し
て然も政府は之を救ふの術を施さず道路に番士なく浮浪横行するも捐て顧み
ず徒に外國人を一處に集合するも何の益かあらん故に予は政府は公使館員の
虐殺を救はず外國の使臣の安全日々危きも顧みざるものと斷言するを憚らざ
るなり殊に英國公使自身の生命危からんを知りて其會葬するを傍觀して保護
せざるが如きは政府の職を盡さざるも亦甚しといふべし

今日までの經歷に鑒み日本政府の保護は如何に申請するも到底得べからずし
て且倚頼すべからざるを知り又怠慢なる政府の所爲に憑らば終に我同胞の生
命を失ふ者あらんを恐れ斷然各國公使に予の決意を示し江戸公使館を引拂ひ
軍艦の保護の下に居を神奈川若しくは横濱に占め居留人の保護をも指揮せんと
して軍艦に投ぜり

予は安全の位置に移り靜かに將軍政府の報を待つべし暗殺の脅迫を避け一に
は其實行せられて貴政府及び貴國が危急に陥るの不幸あらんを慮りたるの微

意に出たるなり

予は閣下等が此書を老中職に披露せん事を請ふ而して貴政府は予が決意は誠意に暴擧を避けて國際の葛藤を生ぜん事を恐れたるものなる事を覺知せらるべしと予は確信し貴政府が英國臣民及び諸外人に對する政畧の速かに改まりて條約上の權利の享有を全からしめん事を望むの切なるを知らん事を疑はず予が閣下等との親交上相見て意を語るを得ざるの不便を來したるを深く悲むと共に閣下等の敏腕を以て亂麻を斷つの英斷をなし以て現時の批難を除かん事を望みて止まざるなり予の管見に依れば今日の事多くは劇烈無謀の輩の爲す所にして其昏頑なる恐懼殺戮を以て攘夷を爲さんとするものなり其黨に屬するものは貴と賤とを論ぜず多寡を問はず制壓する所あくんば或は恐る日本國家の大害を恩起せん事を政府の急務實に此に在り宜しく日本國と條約國との交親を傷けんとするものに對して嚴重の處分をなすの決心を表施せらるべきなり我英國政府の採る所も之に外ならずして兩國臣民の和親に由て其幸福を進めんと欲するなり之より以後殺人默許の事あるべからず徒らに殺戮脅威

を以て攘夷の無益なる希望を達せんとするを禁ぜざるべからず歐洲各國は合同して之に抗し之を成效せしめざるべし否國民の權利により國際公法に訴へて斯る暴擧の計畫者を罪すべきなり而して日本國をして危からしむるものは夫れ此徒が外人に蒙らす暴擧ならん歟

若し夫れ日本政府が猛省する事なくして現今の如き放縱なる政畧を持続せんか各開明國は日本を公敵と宣言するに躊躇せざるべしされども此の如き奇機は來らざらんを期し又日本政府及び人民は其約する所を履行するに吝ならずして臣民の蒙りたる害に對して賠償を請求するに餘力ある富強國と相結托するの政畧を取るの國たるを知らしむべきを期すべきなり

終りに臨んで現在の違例の事態に終結を置かん事の焦眉の急なるを告げ且今日の行掛りは速かに平和なる終極を以て止み將來に於て生命財産の安全に關し確實なる保證を得て再び江戸公使館に予の職務を取るを得ん事を望む予が財産は予の家に於て總て日本役人に信託せり其安全に關しては貴政府は勿論責任を負はるべきなり

予の歸館の遲速は一に貴政府の所置如何にあり素より英國公使として江戸に入らん事は早晩あるべきなり然れども速に他の紛雜を生ぜしむべき猶豫なく且此迄機を失はざれば成し得べかりし談判の基礎より良好なる基脚を以て容易に相互の利益を計るを得ば速かに入京すべし

英國公使館に於て

千八百六十一年一月廿六日

大英女皇陛下の全權公使

ルーザーフォルド、オルコック手記

合衆國公使館通辯ヒュースケン氏の悲むべき死去ありしに付きて英米兩公使の間に數回の往復ありしが米公使より英公使宛てたる公書は二月十五日神奈川横濱居留の米人間に告知されたり其書は次の如し

肅啓一月十九日及廿一日貴館に於る諸外國公使の協議の報告は同二十二日付を以て正に領掌せり報告は廿一日の協議會に予の參會せざりし旨を記す實に然りされども同報告は米國公使が該會に招かれざりし事實を漏せり

而して今該協議會の議法の謄本を送付され其議決の正確なる記録なるを記し

て署名せん事を求めらる然れども今此謄本を見て始めて協議會のありし事を知りたる予が其正確なる事を保證する能はざるは閣下の容易に睹る所なるべし而して熟々其議決を觀るに曰く日本政府は最早信するに足らず公使館員は江戸に止まるに於ては早晩襲撃の危險に遭遇すべし今に及んで宜しく京を撤し横濱に退き一には以て生命の危險を避け一には以て日本政府の猛省を促さんどすと予は不幸にして閣下等と意見を同ふせず請ふ以下其理由を簡述せん日本政府は外國使臣の着京してより以來暴舉の其身體に加はらんを憂へ斷へず館員に注意を請ひ又保護を全からしめんとして汲々寧日なきは既往に徴して明かなり

外國人は日本人が自ら保護するが如き方法を取らん事を懇請せられたるは事實なり而して外國使臣と同等の位置を日本政府にて有する役人は士分の從者數多を伴はざれば外出する事なく家に在りても番士を置いて警護せしめ然るに今此等の日本人が其身體を保護するより以外の方法を以て吾人を保護せよと要求するは正義に反するなき歟

若し夫れ日本政府に於て和交を捨て外國公使の殺戮を希望するが如きあらば此要求は至當にして立どころに決せん然れども事實上予等は十九ヶ月よ渉りて安全に江戸に住居するを得たるは又日本政府が誠意に予等の保護の全からんを欲し力を竭すを證するに足るべし

我公使館の適任なる通辯ヒユースケン氏の殺戮は人の悲む所にして殊に予に於て痛悼に耐へざる所なれども其遭難は一にハ氏が日本政府の再四の注告を蔑視し夜間に外出したるの輕舉に歸せざるべからず此遭難は予が着任以來懐ける憂慮を現實に結果せしめたり

日本政府の處置を批判せんとせば政治上先行的事務の觀察を怠るべからず徒よ外國の例を以て推さんとせば或は酷に過んとす夫れ日本は堅く鎖國主義を取る事茲に二百有餘年今遽に此障壁を撤し鎖鑰を脱して外交を開く上流の地位にある多數の人が條約に依て開かれたる新事態を喜ばざるは怪むに足らず而して此等攘夷黨の勢力は勢ひ江戸に集りたるは又奇とするに足らず非開國の聲は多く諸大名の藩士の口より出で其藩主の意見の反射たるなり

予の見る所を以てすれば外國貿易開始の結果として日用品の暴騰を來せる事は深く彼等の感情を害し其非開國論をして愈根底を堅くするの思あらしめたり條約を締結し其實行を監するは政府の爲し得べき處なすべき所あるべきも輿論は如何ともする能はざるなり

聞く協議會に於ての議決は日本政府を以て泰西諸國政府と同様文明社會の伴侶なりとの論定に基くものなりと予は其謬見に驚かざるを得ず日本人は未だ半開の人民たり此國今日の事態は中世に於ける歐洲諸國に均しきものなり故に日本政府に向て開化國に於るが如く正義の遵守施行を要求するは木に縁て魚を求むるが如し予は信ず今私人の孤獨の行爲に關して責任を日本政府に歸せんとするは萬國公法の認めざる所なるを此原理は泰西に於ては其實行されたるを見ず今を距る事遠からず倫敦に於る陪審官は悦んで佛蘭西國皇帝に對する逆徒の無罪を宣言せしが佛國公使館は審明の失錯を理由としてドーバーを撤去せるを聞ざるなり又ネーブルス最大なる街衢に於て而も白晝佛國公使は烈しき毆打を受たり現場に之を目撃せしもの數百人然るに犯人は逃走し遂

に今日まで縛に就かず當時佛國公使館はネーブルス政府が犯人を捕縛せざるを以てネーブルスを退去したりしや
 去年三月大老は暗殺せられたり漸く犯罪人の一部は逮捕せらる而して猶一人の刑に處せられたるなし大老の顯職にあるもの、暗殺者を處する猶如此し況んや其他をや知るべし日本政府が採用する手續は泰西の手續と異なる事を予は日本政府の時々の注告の意を體し日本役人のなすと同一なる用心を遵守するに於ては予が江戸の住居は安全なるを確信し之を記録せんと欲す又予は日本政府の省慮を促さんとの意志を以て横濱に退くは失策たりとなすものなり亞墨利加條約中には江戸に於る公使の住居の安全に關する一節より一層困難なる條款の存するなし而して條約締結の當時にありて日本委員は江戸に於る公使の住居を以て困難を生ずべきものなりと注告し公使は川崎若くは神奈川に其居を定め公用の都度入京するの勝れるに如かずと考ふとて其希望を述べたるなり

故に横濱に外國公使館の退去するは日本政府の尤も望む所なりといふべし之
 本依りて其憂慮を除き其責任を軽くし其費用を減きて日本政府は救濟せられたるの思ひあるべし而して政府は日はん公使館を保護するには江戸に於るよりも横濱に於て大に利便を得たりと此を以て此舉たるや日本政府を刺撃することなく却て其初志の希望を充したるものなり予は横濱の住居は日本上下の心を以て外國代表者と外國貿易商とを混同せしめ其弊や其威權勢力を損するに至らんを懼るゝものなり

以上略述せる理由に依り予は同僚諸君の處置は或は有益なる結果を來さずして寧ろ斯國と戰爭の危機を醸すものならん事を危むなり外交政畧の刺撃は如何に強くとも斯國人民をして吾人と同等の開化に到らしむると能はず否設令五萬の兵を學校々長となり教育するも速かに同一の開化を保有せしむるを得ず只能く此希望する結果に至らしむるものは時と忍耐なるかな
 予は將來の歴史上に東洋の一隅に於て耶蘇教開化の現出は常に之に隨伴する暴虐流血の汚點なかりしとの記録掲出せられん事を望む然れども此希望や或は失はれんを懼るゝなり予は各國と斯國と交親の條約は斯の平和なる人民斯

の幸福なる國土が戦争の脅威に陥るに及ばずして破れ而して日本は再び割據の勢ひに沈むことあらんを憂ふるものなり
此書簡の寫し一月十九日廿一日協議會の報告に添へんが爲め貴國政府に送致あらん事を請ふ謹言

千八百六十一年二月十二日江戸合衆國公使館よ於て

日本駐劄合衆國全權公使 タウンセンド、ハリス、

英國女皇陛下特命全權公使特派大使ルザーフォールド、オルコック殿

第三十六回

予等の商館も開設より一年を経たれども結果宜しからず先々の見込も立難ければ三月に入りて熟議の上解散し更に別自に業を従ひたり予の運の強かりけん花客忽ち門に充ちて商業日に増し隆盛とはなりぬ今は一人にて手廻り兼しに折よくも予が舊友なるトーマス、トロローイ氏の來港ありしかば直ちに商館の書記を備ひたり

年も半は過ぎ七月五日とはなれり此日江戸より飛報あり水戸の浪士英國公使館

を襲ひ負傷者も少からずと折しも同國公使は長崎より陸路上京の途富士登山後にありしとぞ

此年春の頃より予は屢神奈川横濱の役人より身體の安全に注意すべき旨の戒諭を領し殊に此頃に至りて予は浪人輩の注目する所となり常に付狙ふ有様なれば東海道筋は勿論居留地以外に遠乗などなさざる様との注告を受けぬ予も初めは深く意に介せざりしが數重れば快からず兼て亞米利加再遊の望を懐けるものか
此機を幸ひに彼地に到り一には漂泊中厚情を受たる人々へ禮物を贈り一には合衆國海軍倉庫委員の職を得て帽子の金線に當地の日本役人と肩を比するを得んと思ひ立ち旅装を倉卒の間に了り帆船キーンントン號に搭し二十九日を費して十月十六日無事桑港に到着せり

翌日直ちに舊屋主なる「チー、シー、ケリー」氏に詣り舊誼を謝し來港の意を述べ此處にて荷解をなし其々へ進物を分ち商品は「ケリー」氏に囑して販賣を委任せり
「ケリー」氏は予が合衆國政府の任命を受けるには書面よて願ふより自ら華盛頓府に赴くの捷徑なるを説き且つ予の爲めに當港の銀行家商人等より海軍卿への願書

を差出さしむる事を周旋すべきにより开を携へて往くべしと勧めたり
十一月十二日税關評價所長「マツヂ」氏より召喚され「キア」リントン號にて輸入せる
日本陶器漆器の品評を依頼されたり此貨物は同船の一旅客が一万五千弗以上に
持船を賣り共に買取來れるなり素より普通の品なりしが税關官吏の眼には珍
奇なりしかば其利得の餘りに大なるより税關を欺く爲めに物品目錄の價格付を
故らに低下したるにあらざる歟を疑ひて斯くは予に評價を求めしなり予は横濱
に於ける價格を呈しけるに税關も初めて之を知り物品主も予の評價に満足を表
しぬ

其後數日左の書狀を携へて東部に向へり

某等謹んで茲に「ヒコ」氏が日本神奈川海軍倉庫委員適任者たるを推撰して閣下
の一顧を乞ふ抑同氏は日本人なりしが今は歸化して米國市民籍にあるものな
り永く此國に住し英語に通じ當市に於て完全なる商業教育をも受修したり千
八百五十八年合衆國政府の任を拜し日本に往き神奈川に於る合衆國領事の通
辨とありて勤勉の聞へあり今政府の任用を請ふものは神奈川に於て日本役人

と同位置に立たん事を欲すればなり
某等は「ヒコ」氏の有用忠實の人なるを信じ彼にして日本役人と直接するの位置
に任用されれば合衆國政府の爲めに益する所尠からざるを思ひ敢て尊嚴を犯
して推撰す恐惶謹言

桑港に於て

千八百六十一年十一月十三日

- トーマス、ジ、ケリー 手記
- マコンドレー會社 全
- ウイリアム、コレマン會社 全
- フリント、ビーボザ會社 全
- タレント及ウアイルド 全
- ヘンリー、ヘンチ 全
- シ、アドルフ、ロー會社 全
- チャールズ、ブルークス會社全
- ウイリアム、ニユーウェル會社全

海軍卿ギゾオン、ウエルス殿

閣下

前記願書の署名者は當港著名の商賈及銀行家にして其表示は信憑すべき價値あるものなり

某等に於ても此等の署名者と意見を同ふし「ヒコ」氏が日本神奈川に於て重要な位置を占むる事を知るを以て右推撰書に従ひて彼を任用せば大に斯國の利益たらん事を確信するものなり

合衆國桑港支金庫に於て

税關長ビー、ランキン

手記

税關監察官チー、マックリーア

全

海軍委員リッチャード、チベニー

全

海軍士官ダブルユー、ビーファーウエル全

税關評價官サミューエル、マッヂ

全

税關主計官エス、エーチ、パーカーア

全

税關監督コバート、ステブンス 全

予は順路巴奈馬に着し巴奈馬瀛船會社のチャンピオン號に搭じ紐育府に向ふ十月十四日の朝セントドミンゴ島を過ぎし時船の右舷に當りて蒸氣船の帆にて航行するを見るに危難信號を擧げたり船長は乗客を戒めて船の構造を知らしめざる様になし針を轉じて之に逼らんとせり抑南方諸州の私船戦争の時敵船を奪ふが爲めに政府より免狀を受け私費を以て出す船を云ふ此近海に出没して北部諸州の船を奪ふ事ありて現に其害を蒙りざるものさへありしかば船長は之を推知して此くは威逼せんとしたり
さて全速力を以て逼らんとする我瀛船を見て彼等は軍艦なりと誤想し蒸氣さへ加へて一散に逃走せしが聽て我船に一杯食はせられたるを悟りけん再び危難信號を掲げたり我船長は之を見向もせず全速力にて航路に上れば彼復も追撃を始めたなりされども如何で我船に達するを得べき何時か見へずなりぬ後にて聞けば此瀛船は船長センムスの指揮する南部諸州方の私船サムテル號にして全く戯れを演ぜしものなりしとぞ

十二月十六日午後紐育港頭に入れり水先人は諸新聞を腕に餘る程抱きて乗り來りぬ其れと見るより戦争の状況如何を知らんとする旅客は奪取合を初めたり新聞所載の重要な項は次の如くなり也

○ボトマツク河畔に屯する中軍は不日進軍すべし而して激戦の機は切迫せり○十萬の南軍は急行して華盛頓に迫らんとす同盟軍少佐某は内援の嫌疑にて擲問を受く○英國政府は合衆國に對しメーソン及スライデルを引渡すべしと正式の要求をなせり旅客は皆甚だ激し殊に英國政府の要求に激し或は合衆國政府は斯る不法の要求を容るべきに非ずとし或は若し之を容れざれば英吉利とても到底此儘にはなし置かずして戦争は避くべからざらんと主張するもありて喧しき事言ん方なし

十二月十七日「ケリー」氏の叔父の商館なるケリー商會を訪ひしが此日より予は病に罹り遂に麻疹となりて平臥したり當時は日本には麻疹流行せしが米國には流行の兆さへなかりしも予の犯されたるは不思議といふべし

十二月廿九日病息りければ「ケリー」氏より得たる紹介狀を以て「アガセ」及「フルトン」の兩博士を訪ん爲めホストン府へ向け出發せり先ケンブリッヂに出で「ケリー」氏の母堂を訪へり夫人は厚く予を遇し見るは初めてなれど予が名は常に家内團樂の折の話柄ありなんど物語りて明日二時には會食し二博士も招くべければ是非來るべしと誘へり

時刻を違へず其家に到れば博士「アガセ」氏既に座にあり「ケリー」夫人令嬢も其席にありて主人振老實なり予は挨拶を終りて「ケリー」氏の紹介狀を博士に呈せしに氏は讀去りて予の志望の爲めに國務卿「ショーウアー」元老議官「サムナール」氏其外へも紹介狀を付くべしと語りぬ其より會食の席に入りて談話は予がうへなり博士は殊に日本の博物に就て問ひたる後標本を得らるまじきやと懇談せり予は其れ社容易なりとて歸朝の日は之を送るべしと約しぬ

(予は歸朝の後蝶其他昆蟲學標本甘箱を買求めコンテスト號にて送りしが全船は喜望峯沖に於て遭難し憐むべし蝶兒は其慈愛を受くべき博士の許に達せずして空しく魚腹に葬らる)

「ケリー」夫人は甚く東洋の風土氣候の愛すべきを賞し殊に日本の事を聞きて深く

感ぜしものゝ如し夫人は當時七十二歳の高齡なれども鏗鏘として舉止活潑なりしは東洋人の及ばざる所なり良人は嚮に予か漂泊流浪して艱難せる折書を寄せて救ひ呉れたる思義今に忘れ難ければ此行を幸ひ親しく其温容に接して昔日の恩を謝せんとせしに悲むべし老人は早く既に塵世を辭し歡樂國に遊吟す下界に於ては復見るべからざるの人となり居れり

會食終れば博士は紹介狀を予に與へぬ開き封なりしかば其書を見るに用語皆親しげなり

予は辭して旅舎に歸れば若き紳士予の歸着を待ち居れるあり紳士は「ドルチエスタ」街の「テンブル」氏にまて予が着府を聞て氏の老父は是非に予を迎へ來れどて令息を送りしなり予は深く厚意を喜び踵を旋らして其後に付て氏が家に到りぬ素より舊識あるにあらす唯「テンブル」氏の伯父なる「ポー」氏は予が嘗て元老議官「グウィン」氏に伴はれて「カリホルニア」より東部に往きし時同船の合客なりしことあり同氏よりの談話にて知りしものならんか此度予を特に其邸に招き傾蓋の新なるは宛然故友の如く待遇最も厚かりしは予の多幸とや言はん將米人の好奇と

やいはん「開」の鬼もあれ元來「テンブル」氏の家族に舉て宗教熱心家にて所謂「ビュリ」タン宗に屬し博愛の道を守りしものなりされば予が紐育府にて膾炙し痲疹の餘勢の残り居りて疲勞の取れぬを聞知りては其介抱は己が家にありとも斯る勝手はなし得まじと思ふばかりに手厚かりき

第三十七回

除夜の鐘に去年の名残を糸の如く曳きて今年は千八百六十二年一月一日と改まりぬ予は「テンブル」氏の家に快き歳越しをなし朝早く目覺しかども正月の風は此地には吹かぬにや元旦の景色さへ無し市人も常の如く業務に忙しき有様なり予は其れより「ホストン」に出で予等を救援したる帆船「オー」ブランド號の持主なりと聞く「ホール」ドマン氏を訪問せり

二日は「ドルチエスタ」に又の二日は紐育に止まりて「ホルチモニア」に往けり其山其水舊態を改めず予を迎へて轉た懷舊の感を増さしめ歩むとなしに身は舊恩人「サンタース」氏の門前に來れり氏の温顔は眼の前に浮びて空耳に聲の聞ゆると思ふ内思想は實現となりて予の手は彼の掌中にありて未だ一語を交へずして互に